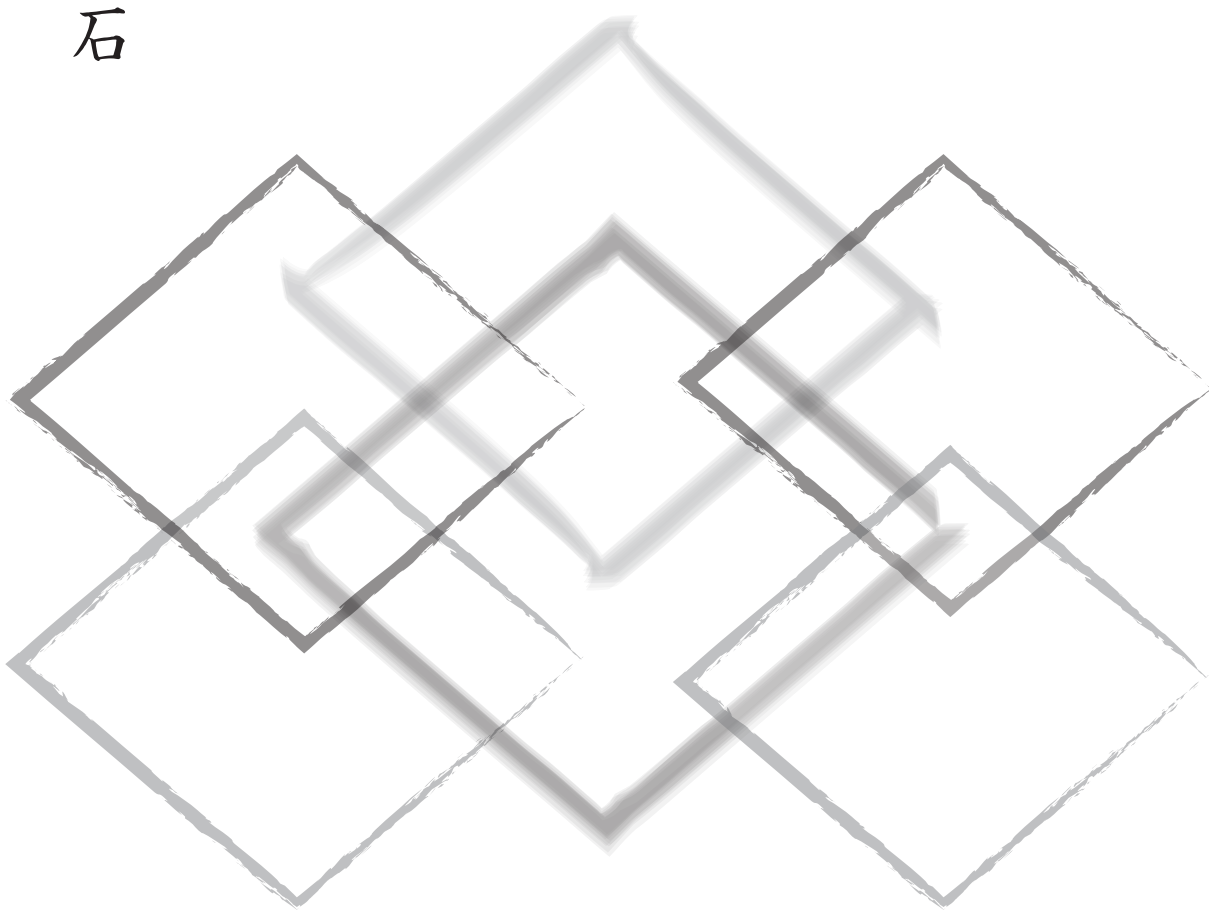


道草

夏目漱石



一冊堂青空文庫

道草

夏目漱石

一

健三^{けんぞう}が遠い所から帰って来て駒込^{こまごめ}の奥に世帯^{しよたい}を持ったのは東京を出てから何年目になるだろう。彼は故郷の土を踏む珍らしさのうちに一種^{さび}の淋^{しみ}し味^みさえ感じた。

彼の身体^{からだ}には新らしく後^{あと}に見捨てた遠い国の臭^{におい}がまだ付着^{つ着}していた。彼はそれを忌^いんだ。一日も早くその臭を振り落^{ふる}さなければならな
いと思った。そうしてその臭のうちに潜^{ひそ}んでいる彼の誇りと満足には

かえって気が付かなかった。

彼はこうした気分を有った人（も）にありがちな落付（おちつき）のない態度で、千駄（せんた）木（ぎ）から追分（おいわけ）へ出る通りを日に二返ずつ規則のように往来した。

ある日（こさめ）小雨が降った。その時彼は外套（がいとう）も雨具も着けずに、ただ傘を

差しただけで、何時もの通りを本郷（ほんごう）の方へ例刻に歩いて行つた。する

と車屋の少しさきで思い懸けない人にはたりと出会つた。その人は根（ね）

津権現（づこんげん）の裏門の坂（あが）を上つて、彼と反対に北へ向いて歩いて来たものと

見えて、健三が行手を何気なく眺めた時、十間位（けん）先から既に彼の視線

に入つたのである。そうして思わず彼の眼（め）をわきへ外（そら）させたのである。

彼は知らん顔をしてその人の傍（そば）を通り抜けようとした。けれども彼

にはもう一遍この男の眼鼻立を確かめる必要があつた。それで御互が二、三間の距離に近づいた頃また眸ひとみをその人の方角に向けた。すると先方ではもう疾とくに彼の姿を凝じつと見詰めていた。

往来は静しずかであつた。二人の間にはただ細い雨の糸が絶間なく落ちているだけなので、御互が御互の顔を認めるには何の困難もなかつた。健三はすぐ眼をそらしてまた真正面を向いたまま歩き出した。けれども相手は道端に立ち留まつたなり、少しも足を運ぶ気色けしきなく、じつと彼の通り過ぎるのを見送つていた。健三はその男の顔が彼の歩調につれて、少しずつ動いて回るのに気が着いた位であつた。

彼はこの男に何年会わなかつたろう。彼がこの男と縁を切つたのは、彼がまだ廿歳はたちになるかならない昔の事であつた。それから今日こんにちま

でに十五、六年の月日が経っているが、その間彼らはついぞ一度も顔を合せた事がなかったのである。

彼の位地も境遇もその時分から見るとまるで変っていた。黒い髭ひげを生はして山高帽を被かぶった今の姿と坊主頭の昔の面影おもかげとを比べて見ると、自分でさえ隔世の感が起らないとも限らなかった。しかしそれにしては相手の方があまりに変らな過ぎた。彼はどう勘定しても六十五、六であるべきはずのその人の髪の毛が、何故なぜ今でも元の通り黒いのだろうと思つて、心のうちで怪しんだ。帽子なしで外出する昔ながらの癖を今でも押通しているその人の特色も、彼には異な気分を与える媒介なかだちとなつた。

彼は固もとよりその人に出会ふ事を好まなかつた。万一出会つてもその

人が自分より立派な服装なりでもしていてくれれば好いと思っていた。しかし今日まのあたり前見たその人は、あまり裕福な境遇にいるとは誰が見ても決して思えなかった。帽子を被らないのは当人の自由としても、羽織はおりなり着物なりについて判断したところ、どうしても中流以下の活計を営んでいる町家ちやうかの年寄としか受取れなかった。彼はその人の差ししていた洋傘こうもりが、重けそうな毛繻子じゆすであつた事にまで気が付いていた。

その日彼は家へ帰つても途中で会つた男の事を忘れ得なかつた。折々は道端へ立ち止まつて凝と彼を見送っていたその人の眼付に悩まされた。しかし細君には何にも打ち明けなかつた。機嫌のよくない時は、いくら話したい事があつても、細君に話さないのが彼の癖であつた。細君も黙っている夫に対しては、用事の外決ほかして口を利かない女

であつた。

二

次の日健三はまた同じ時刻に同じ所を通つた。その次の日も通つた。けれども帽子を被^{かぶ}らない男はもうどこからも出て来なかつた。彼は器械のようにまた義務のように何時もの道を往^いつたり来たりした。

こうした無事の日が五日続いた後、^{あと}六日目の朝になつて帽子を被らない男は突然また根津権現の坂の蔭から現われて健三を脅やかした。それがこの前とほぼ同じ場所で、時間も殆^{ほとん}どこの前と違わなかつた。

その時健三は相手の自分に近付くのを意識しつつ、何時もの通り器

械のようにまた義務のように歩こうとした。けれども先方の態度は正
反対であつた。何人をも不安にしなければやまないほどの注意を双^{そう}眼^{がん}
に集めて彼を凝視した。隙^{すき}さえあれば彼に近付こうとするその人の心
が曇^{どん}よりした眸^{ひとみ}のうちにありありと読まれた。出来るだけ容赦なくそ
の傍^{そば}を通り抜けた健三の胸には変な予覚が起つた。

「とてもこれだけでは済むまい」

しかしその日家^{うち}へ歸つた時も、彼はついに帽子を被らない男の事を
細君に話さずにしまった。

彼と細君と結婚したのは今から七、八年前で、もうその時分にはこ
の男との関係がとくの昔に切れていたし、その上結婚地が故郷の東京
でなかったので、細君の方ではじかにその人を知るはずがなかった。

しかし噂^{うわさ}としてだけならあるいは健三自身の口から既に話していたかも知れず、また彼の親類のものから聞いて知つていないとも限らなかった。それはいずれにしても健三にとって問題にはならなかった。

ただこの事件に関して今でも時々彼の胸に浮んでくる結婚後の事実が一つあった。五、六年前彼がまだ地方にいる頃、ある日女文字で書いた厚い封書が突然彼の勤め先の机の上へ置かれた。その時彼は変な顔をしてその手紙を読んだ。しかしいくら読んでも読んでも読み切れなかった。半紙廿枚ばかりへ隙間なく細字^{さいじ}で書いたものの、五分の一ほど眼を通した後、彼はついにそれを細君の手に渡してしまった。

その時の彼には自分宛^{あて}でこんな長い手紙をかけた女の素性を細君に説明する必要があった。それからその女に關聯^{かんれん}して、是非ともこの帽

子を被らない男を引合に出す必要もあつた。健三はそうした必要にせまられた過去の自分を記憶している。しかし機嫌買きげんかいな彼がどの位綿密な程度で細君に説明してやったか、その点になると彼はもう忘れていた。細君は女の事だからまだ判然はつきり覚えているだろうが、今の彼にはそんな事を改めて彼女に問い訊ただして見る気も起らなかった。彼はこの長い手紙を書いた女と、この帽子を被らない男とを一所に並べて考えるのが大嫌だいきらだつた。それは彼の不幸な過去を遠くから呼び起す媒介なかだちとなるからであつた。

幸い彼の目下の状態はそんな事に屈托くつたくしている余裕を彼に与えなかつた。彼は家へ帰うちつて衣服を着換えると、すぐ自分の書齋へ這入はいつた。彼は始終その六畳敷の狭い畳の上に自分のする事が山のように積

んであるような気持ちでいるのである。けれども実際からいうと、仕事をするよりも、しなければならぬという刺戟しげきの方が、遙かに強く彼を支配していた。自然彼はいらいらしなければならなかった。

彼が遠い所から持って来た書物の箱をこの六畳の中で開けた時、彼は山のような洋書の裡うちに胡坐あぐらをかいて、一週間も二週間も暮らしていた。そうして何でも手に触れるものを片端かたはしから取り上げては二、三頁ページずつ読んだ。それがため肝心の書齋の整理は何時まで経っても片付かなかった。しまいていにこの体ていたらくを見るに見かねた或友人あるが来て、順序にも冊数にも頓着とんじゃくなく、あるだけの書物をさっさと書棚の上に並べてしまった。彼を知っている多数の人は彼を神経衰弱だと評した。彼自身はそれを自分の性質だと信じていた。

健三は実際その日その日の仕事に追われていた。家へ帰^{うち}つてからも気楽に使える時間は少しもなかった。その上彼は自分の読みたいものを読んだり、書きたい事を書いたり、考えたい問題を考えたりしたかった。それで彼の心は殆^{ほと}んど余裕というものを知らなかった。彼は始終机の前にこびり着いていた。

娯楽の場所へも滅多に足を踏み込めない位忙がしがつている彼が、ある時友達から謡^{うたい}の稽古^{けいこ}を勧められて、体^{てい}よくそれを断^{ことわ}ったが、彼は心のうちで、他人^{ひと}にはどうしてそんな暇があるのだろうと驚ろいた。そうして自分の時間に対する態度が、あたかも守銭奴のそれに似

通っている事には、まるで気がつかなかった。

自然の勢い彼は社交を避けなければならなかった。人間をも避けなければならなかった。彼の頭と活字との交渉が複雑になればなるほど、人としての彼は孤独に陥らなければならなかった。彼は臃氣おぼろげにその淋さびしさを感じする場合さえあった。けれども一方ではまた心の底に異様の熱塊があるという自信を持っていた。だから索寞さくぼくたる曠野あらのの方角へ向けて生活の路みちを歩いて行きながら、それがかえって本来だとばかり心得ていた。温かい人間の血を枯らしに行くのだとは決して思わなかった。

彼は親類から変人扱いにされていた。しかしそれは彼に取って大した苦痛にもならなかった。

「教育が違ふんだから仕方がない」

彼の腹の中には常にこういう答弁があつた。

「やつぱり手前味噌よ」

これは何時でも細君の解釈であつた。

気の毒な事に健三はこうした細君の批評を超越する事が出来なかつた。そういわれる度にたび氣不味きまずい顔をした。ある時は自分を理解しない細君を心しんから忌々いまいましく思つた。ある時は叱しかり付けた。またある時は頭かみごなしに遣り込めた。すると彼の癩癩かんしゃくが細君の耳に空威張からいばりをする人の言葉のように響いた。細君は「手前味噌」の四字を「大風呂敷おおふろしき」の四字に訂正するに過ぎなかつた。

彼には一人の腹違はらちがいの姉と一人の兄があるぎりであつた。親類といつ

たところでこの二軒より外に持たない彼は、不幸にしてその二軒ともあまり親しく往来ゆききをしていなかった。自分の姉や兄と疎遠になるという変な事實は、彼に取つても余り氣持の好いいものではなかった。しかし親類づきあいよりも自分の仕事の方が彼には大事に見えた。それから東京へ歸つて以後既に三、四回彼らと顔を合せたという記憶も、彼には多少の言訳になつた。もし帽子を被かぶらない男が突然彼の行手を遮らなかつたなら、彼は何時もの通り千駄木せんだぎの町を毎日二返規則正しく往来するだけで、当分の方角へは足を向けずにしまつたろう。もしその間あいだに身体からだの樂に出来る日曜が来たなら、ぐたりと疲れ切つた四肢しを畳の上に横たえて半日の安息を貪むさぼるに過ぎなかつたろう。

しかし次の日曜が来たとき、彼はふと途中で二度会つた男の事を思

い出した。そうして急に思い立ったように姉の宅へ出掛けた。姉の宅は四ッ谷の津の守坂の横で、大通りから一町ばかり奥へ引込んだ所にあつた。彼女の夫というのは健三の従兄にあたる男だから、つまり姉にも従兄であつた。しかし年齢は同年か一つ違で、健三から見ると双方とも、一廻りも上であつた。この夫がもと四ッ谷の区役所へ勤めた縁故で、彼が其所をやめた今日でも、まだ馴染の多い土地を離れるのが厭だといって、姉は今の勤先に不便なのも構わず、やっぱり元の古ぼけた家に住んでゐるのである。

四

この姉は喘息持であつた。ぜんそくもち年が年中ぜえぜえいつていた。それでも生れ付が非常な癩性かんしょうなので、よほど苦しくないと決して凝じつとしていなかった。何か用を拵こしらえて狭い家うちの中を始終ぐるぐる廻まわつて歩かないと承知しなかつた。その落付おちつきのないがさつな態度が健三の眼には如何いかにも氣の毒に見えた。

姉はまた非常に饒舌しゃべる事の好な女すきであつた。そうしてその喋舌り方に少しも品位というものがなかつた。彼女と対坐たいざする健三はきつと苦い顔をして黙らなければならなかつた。

「これが己おれの姉なんだからなあ」

彼女と話をした後の健三の胸には何時でもこういう述懐あとが起つた。

その日健三は例の如く襷たすきを掛けて戸棚の中を搔かきまわしているこの

姉を見出した。

「まあ珍らしく能く来てくれたこと。さあ御敷きなさい」

姉は健三に座蒲団を勧めて縁側へ手を洗いに行つた。

健三はその留守に座敷のなかを見廻わした。欄間には彼が子供の時

から見覚えのある古ぼけた額が懸つていた。その落款に書いてある筒

井憲という名は、たしか旗本の書家か何かで、大変字が上手なんだ

と、十五、六の昔此所の主人から教えられた事を思い出した。彼はそ

の主人をその頃は兄さん兄さんと呼んで始終遊びに行つたものであ

る。そうして年からいえば叔父甥ほどの相違があるのに、二人して能

く座敷の中で相撲をとつては姉から怒られたり、屋根へ登つて無花果

を搦いで食つて、その皮を隣の庭へ投げたため、尻を持ち込まれたり

した。主人が箱入りのコンパスを買って遣るといつて彼を騙したなり
何時まで経つても買ってくれなかったのを非常に恨めしく思った事も
あった。姉と喧嘩をして、もう向うから謝罪つて来ても勘忍してやら
ないと覚悟を極めたが、いくら待っていても、姉が詫まらないので、
仕方なしにこちらからのこのこ出掛けて行つたくせに、手持無沙汰な
ので、向うで御這入りというまで、黙つて門口に立っていた滑稽も
あった。……

古い額を眺めた健三は、子供の時の自分に明らかな記憶の探照燈を
向けた。そうしてそれほど世話になった姉夫婦に、今は大した好意を
有つ事が出来にくくなつた自分を不快に感じた。

「近頃は身体からだの具合はどうです。あんまり非道ひどく起る事ありません

か」

彼は自分の前に坐^{すわ}った姉の顔を見ながらこう訊^{たず}ねた。

「ええ有難う。御蔭さまで陽気が好^いいもんだから、まあどうかこうか家の事だけは遣^はつてゐるんだけど、——でもやっぱり年が年だからね。とても昔しのようにが・せ・いに働^{はたら}く事は出来ないのさ。昔健ちゃん^{あす}の遊び^{あそ}びに来てくれた時分にや、随分尻^{しり}ツ端^{はし}折^{しよ}りで、それこそ御釜^{おかま}の御尻^{しり}まで洗ったもんだが、今じゃとてもそんな元氣はありやしない。だけど御蔭様でこう遣^はつて毎日牛乳も飲^のんでるし……」

健三は些^さ少^{しょう}ながら月々いくらかの小遣^{こづかい}を姉に遣^やる事を忘れなかったのである。

「少し瘦^やせたようですね」

「なにこりや私の持前あたしもちまえだから仕方がない。昔から肥ふとった事のない女なんだから。やッぱり癩かんが強いもんだからね。癩で肥る事が出来ないんだよ」

姉は肉のない細い腕を捲まくつて健三の前に出して見せた。大きな落ち込んだ彼女の眼の下を薄黒い半円形の暈かさが、怠だるそうな皮で物憂もののうげに染めていた。健三は黙つてそのぱさぱさした手の平を見詰めた。

「でも健ちゃんは立派になつて本当に結構だ。御前さんが外国へ行く時なんか、もう二度と生きて会むう事は六むずかしкаろうと思つてたのに、それでもよくまあ達者で歸つて来られたのね。御父おとつさんや御母おつかさんが生きて御出だつたらさぞ御喜びだろう」

姉の眼にはいつか涙が溜たまっていた。姉は健三の子供の時分、「今に

姉さんに御金が出来たら、健ちゃんに何でも好きなものを買って上げるよ」と口癖くちくせのようにいつていた。そうかと思うと、「こんな偏窟へんくつじゃこの子はとても物にやならない」ともいった。健三は姉の昔の言葉やら語気やらを思い浮べて、心の中で苦笑した。

五

そんな古い記憶を喚よび起こすにつけても、久しく会わなかった姉の老けた様子が一層健三ひとしおの眼についた。

「時に姉さんはいくつでしたかね」

「もう御婆おばあさんさ。取いつて一いちだもの御前さん」

姉は黄色い疎まばらな歯を出して笑って見せた。実際五十一とは健三にも意外であつた。

「すると私わたしとは一廻ひとまわり以上違うんだね。私やまた精々違つて十とおか十一だと思つていた」

「どうして一廻どころか。健ちゃんとは十六違うんだよ、姉さんうちは。良人さんが羊さんの三碧で姉さんが四緑しろうくなんだから。健ちゃんは慥たしか七赤しちせきだつたね」

「何だか知らないが、とにかく三十六ですよ」

「繰繰つて見て御覧、きつと七赤だから」

健三はどうして自分の星を繰繰るのか、それさえ知らなかつた。年齢としの話はそれぎりやめてしまった。

「今日は御留守なんですか」と比田ひだの事を訊きいて見た。

「昨夕ゆうべも宿直とまりでね。なに自分の分だけなら月に三度か四度よどで済むんだけれども、他に頼ひとまれるもんだからね。それに一晩でも余計泊りさえすればやっぱりいくらかになるだろう、それでつい他ひとの分まで引受ける気にもなるのさ。この頃じゃあっちへ寐ねるのとこっちへ歸かえるのと、まあ半々位なものだろう。ことによると、向むこうへ泊る方がかえって多いかも知れないよ」

健三は黙もくつて障子の傍そばに据すえてある比田の机を眺めた。硯箱すずりばこや状袋じょうふくろや巻紙がきちりと行儀よく並んでいる傍に、簿記用の帳面が赤い脊皮せがわをこちらへ向けて、二、三冊立て懸かけてあつた。それから綺麗きれいに光つた小さい算盤そろばんもその下に置いてあつた。

うわさ

噂によると比田はこの頃変な女に關係をつけて、それを自分の勤め先のつい近くに囲っているという評番ひようばんであつた。宿直とまりだ宿直だといつて宅へ歸らないのは、あるいはそのせいじゃなかろうかと健三には思えた。

「比田さんは近頃どうです。大分年を取つたから元とは違つて真面目まじめになつたでしょう」

「なにやッぱり相變らずさ。ありや一人で遊ぶために生れて來た男なんだから仕方がないよ。やれ寄席よせだ、やれ芝居しばやだ、やれ相撲だつて、御金さえありや年が年中飛んで歩いてるんだからね。でも奇体なもんやさで、年のせいだか何だか知らないが、昔に比べると、少しは優しくなつたようだよ。もとは健ちゃんも知つてゐる通りの始末で、随分烈しはげし

かったもんだがね。蹴^けったり、敲^{たた}いたり、髪の毛を持って座敷中引摺^{ひつずり}廻したり……」

「その代り姉さんも負けてる方じゃなかったんだからな」

「なに妾^{あたし}や手出しなんかした事あ、つい^あの一度だつてありやしない」

健三は勝気な姉の昔を考え出してつい可笑^{おか}しくなった。二人の立ち廻りは今姉の自白するように受身のものばかりでは決してなかった。

ことに口は姉の方が比田に比べると十倍も達者だった。それにしてもこの利かぬ気の姉が、夫に騙^{だま}されて、彼が宅へ帰らない以上、きつと会社へ泊っているに違いないと信じ切っているのが妙に不憫^{ふびん}に思われ
て来た。

「久しぶりに何か奢^{おご}りましようか」と姉の顔を眺めながらいった。

「ありがと、今御鮎おすしをそういつたから、珍らしくもあるまいけれども、食べてって御くれ」

姉は客の顔さえ見れば、時間に関係なく、何か食わせなければ承知しない女であつた。健三は仕方がないから尻しりを落付おちつけてゆっくり腹の中に持って来た話を姉に切り出す氣になつた。

六

近頃の健三は頭を余計遣つかい過ぎるせいか、どうも胃の具合が好くなかつた。時々思い出したように運動して見ると、胸も腹もかえつて重くなるだけであつた。彼は要心して三度の食事以外にはなるべく物を

口へ入れないように心掛けていた。それでも姉の悪強には敵わなかった。

「海苔巻なら身体に障りやしないよ。折角姉さんが健ちゃんに御馳走しようと思つて取つたんだから、是非食べて御くれな。厭かい」

健三は仕方なしに旨くもない海苔巻を頬張つて、好い加減烟草で荒らされた口のうちをもぐもぐさせた。

姉が余り饒舌るので、彼は何時までも自分のいいたい事がいえなかった。訊きたい問題を持つていながら、こう受身な会話ばかりしているのが、彼には段々むず痒くなつて来た。しかし姉にはそれが一向通じないらしかった。

他に物を食わせる事の好きなのと同時に、物を遣る事の好きな彼女

は、健三がこの前賞めた古ぼけた達磨の掛物を彼に遣ろうかといひ出した。

「あんなものあ、宅にあつたつて仕方がないんだから、持って御出でよ。なに比田だつて要りやしないやね、汚ない達磨なんか」

健三は貰うとも貰わないともいわずにただ苦笑していた。すると姉は何か秘密話でもするように急に調子を低くした。

「実は健ちゃん、御前さんが帰つて来たら、話そう話そうと思つて、つい今日まで黙つてたんだがね。健ちゃんも帰りたてでさぞ忙がしかろうし、それに姉さんが出掛けて行くにしたところで、御住さんがいちゃ、少し話し悪い事だしね。そうかつて、手紙を書こうにも御存じの無筆だろう……」

姉の前置まえおきは長たらしくもあり、また滑稽こっけいでもあった。小さい時分いくら手習をさせても記憶おぼえが悪くって、どんなに平易やさしい字も、とうとう頭へ這入はいらずじまいに、五十の今日こんにちまで生きて来た女だと思ふと、健三にはわが姉ながら気の毒でもありまたうら恥ずかしくもあった。

「それで姉さんの話ってえな、一体どんな話なんです。実は私わたしも今日は少し姉さんに話があつて来たんだが」

「そうかいそれじゃ御前さんの方のから先へ聴くのが順だったね。何な故ぜ早く話さなかったの」

「だって話せないんだもの」

「そんなに遠慮しないでいいやね。姉弟きょうだいの間じゃないか、御前さん」

姉は自分の多弁が相手の口を塞いでいるのだという明白な事実には毫も気が付いていなかった。

「まあ姉さんの方から先へ片付けましょう。何ですか、あなたの話っているのは」

「実は健ちゃんにはまことに気の毒で、いい悪いんだけど、あたしも段々年を取って身体は弱くなるし、それに良人^{うち}があ^{おれ}の通りの男で、自分一人さえ好けりや女房なんかどうなったって、己^{おれ}の知った事じゃないって顔をしているんだから。——尤^{もっと}も月々の取高^{とりだか}が少ない上に、交際^{つきあい}もあるんだから、仕方がないといえはそれまでだけれどもね……」

姉のいう事は女だけに随分曲りくねっていた。なかなか容易な事で

目的地へ達しそうになかったけれども、その主意は健三によく解つた。つまり月々遣る小遣こづかいをもう少し増ましてくれというのだろうと思つた。今でさえそれをよく夫から借りられてしまうという話を耳にしてゐる彼には、この請求が憐あわれでもあり、また腹立たしくもあつた。

「どうか姉さんを助けると思つてね。姉さんだつてこの身体じゃどうせ長い事もあるまいから」

これが姉の口から出た最後の言葉であつた。健三はそれでも厭いやだとはいいかねた。

彼はこれから宅へ帰って今夜中に片付けなければならぬ明日の仕事を有^もっていた。時間の価値というものを少しも認めないこの姉と対^{たい}坐^ざして、何時^{いつ}までも、べんべんと喋^{しゃべ}舌^べっているのは、彼にとって多少の苦痛に違^{ちが}なかつた。彼は好^い加^い減^かに帰ろうとした。そうして帰る間際になつてやつと帽子を被^{かぶ}らない男の事をいい出した。

「実はこの間島田に会つたんですがね」

「へえどこで」

姉は吃^{びっくり}驚^{おどろ}したような声を出した。姉は無教育な東京ものによく見るわざとらしい仰山な表情をしたがる女であつた。

「太^{おお}田^たの原^{はら}の傍^{そば}です」

「じゃ御前さんのじき近所じゃないか。どうしたい、何か言葉でも掛

けたかい」

「掛けるって、別に言葉の掛けようもないんだから」

「そうさね。健ちゃんの方から何とかいわなきや、向で口なんぞ利けた義理でもないんだから」

姉の言葉は出来るだけ健三の意を迎えるような調子であつた。彼女は健三に「どんな服装なりをしていたい」と訊き足した後で、「じややツぱり楽でもないんだね」といった。其所そこには多少の同情も籠こもっているように見えた。しかし男の昔を話し出した時にはさもさも悪にくらしそうな語氣を用い始めた。

「なんぼ因業いんごうだつて、あんな因業な人つたらありやしないよ。今日が期限だから、是が非でも取って行くつて、いくら言訳をいってても、坐すわ

り込んで動かないんだもの。しまいこつちも腹が立つたから、御氣の毒さま、御金はありませんが、品物で好ければ、御鍋おなべでも御釜おかまでも持つて下さいっていったらね、じゃ釜を持つてくつていうんだよ。あきれるじゃないか」

「釜を持つて行くつたつて、重くつてとても持てやしないでしょう」
「ところがあの業突張ごうつくばりの事だから、どんな事をして持つてかないとも限らないのさ。そらその日の御飯をあたしに炊たかせまいと思つて、そういう意地の悪い事をする人なんだからね。どうせ先へ寄つて好い事あないはずだあね」

健三の耳にはこの話がただの滑稽こっけいとしては聞こえなかった。その人と姉との間に起つたこんな交渉のなかに引絡ひっからまっている古い自分の影

法師は、彼に取って可笑おかしいというよりもむしろ悲しいものであつた。

「私わたしや島田に二度会つたんですよ、姉さん。これから先また何時会うか分らないんだ」

「いいから知らん顔をして御出でよ。何度会つたつて構わないじゃないか」

「しかしわざわざ彼所あそこいらを通つて、私の宅うちでも探しているんだか、また用があつて通りがかりに偶然出ツくわしたんだか、それが分らないんでね」

この疑問は姉にも解けなかった。彼女はただ健三に都合の好さそうな言葉を無意味に使つた。それが健三には空御世辞からおせじのごとく響いた。

「こちらへはその後まるで来ないんですか」

「ああこの二、三年はまるつきり来ないよ」

「その前は？」

「その前はね、ちよくちよくってほどでもないが、それでも時々は来たのさ。それがまた可笑しいんだよ。来ると何時でも十一時頃でね。

うなぎめし

鰻飯かなにか食べさせないと決して帰らないんだからね。三度の御ま

ひと

んまを一かたけでも好いから他の家^{うち}で食べようっていうのがつまりあ

ひと

の人の腹なんだよ。そのくせ服装^{なり}なんかかなりなものを着ているんだ

がね。……」

姉のいう事は脱線しがちであつたけれども、それを聴いている健三には、やはり金銭上の問題で、自分が東京を去つたあとも、なお多少

の交際が二人の間に持続されていたのだという見当はついた。しかしそれ以上何も知る事は出来なかった。目下の島田については全く分らなかった。

八

「島田は今でも元の所に住んでいるんだろうか」

こんな簡単な質問さえ姉には判然^{はつきり}答えられなかった。健三は少し的^{あて}が外れた。けれども自分の方から進んで島田の現在の居所^{いどころ}を突き留めようとまでは思っていなかった。大した失望も感じなかった。彼はこの場合まだそれほどの手数^{てかず}を尽す必要がないと信じていた。たと

い尽すにしたところで、一種の好奇心を満足するに過ぎないとも考えていた。その上今の彼はこういう好奇心を軽蔑けいべつしなければならなかった。彼の時間はそんな事に使用するには余りに高価すぎた。

彼はただ想像の眼で、子供の時分見たその人の家と、その家の周囲とを、心のうちに思い浮べた。

其所そこには往来の片側に幅の広い大きな堀が一丁も続いていた。水の変らないその堀の中は腐った泥で不快に濁っていた。所々に蒼あおい色が湧わいて厭いやな臭においさえ彼の鼻を襲った。彼はその汚きたならしい一廓いっかくを――様さまの御屋敷という名で覚えていた。

堀の向う側には長屋がずっと並んでいた。その長屋には一軒に一位の割で四角な暗い窓が開けてあった。石垣とすれすれに建てられた

この長屋がどこまでも続いているので、御屋敷のなかはまるで見えなかった。

この御屋敷と反対の側には小さな平家ひらやが疎まばらに並んでいた。古いのも新らしいのもごちゃごちゃに交まじっていたその町並は無論不揃ぶそろであった。老人の齒のように所々が空いていた。その空いている所を少しばかり買つて島田は彼の住居すまいを拵こしらへたのである。

健三はそれが何時出来上つたか知らなかった。しかし彼が始めてそこへ行つたのは新築後まだ間もないうちであつた。四間よましかない狭い家だつたけれども、木口きぐちなどはかなり吟味してあるらしく子供の眼にも見えた。間取にも工夫があつた。六畳の座敷は東向で、松葉を敷き詰めた狭い庭に、大き過ぎるほど立派な御影みかげの石燈籠いしどうろうが据えてあつ

た。

綺麗きれい好きな島田は、自分で尻端しりはしお折りをして、絶えず濡雑巾ぬれぞうきんを縁側や柱へ掛けた。それから跣足はだしになつて、南向の居間の前栽せんざいへ出て、草雀くさむしりをした。あるときは鋤くわを使つて、門口かどぐちの泥溝どぶも浚さらつた。その泥溝には長さ四尺ばかりの木の橋が懸かつていた。

島田はまたこの住居すまい以外に粗末な貸家を一軒建てた。そうして双方の家の間を通り抜けて裏へ出られるように三尺ほどの路みちを付けた。裏は野とも畠はたとも片のつかない湿地であつた。草を踏むとじくじく水が出た。一番凹へこんだ所などはしよっちゅう浅い池のようになつていた。島田は追々其所へも小さな貸家を建てるつもりでいるらしかった。しかしその企ては何時までも実現されなかつた。冬になると鴨かもが下おりる

から、今度は一つ捕ってやろうなどといっていた。……

健三はこういう昔の記憶をそれからそれへと繰り返した。今其所へ行つて見たら定めし驚ろくほど変っているだろうと思ひながら、彼はなお二十年前の光景を今日こんにちの事のように考えた。

「ことによると、良人うちでは年始状位まだ出してゐるかも知れないよ」

健三の帰る時、姉はこんな事をいって、暗あんに比田ひだの戻るまで話して行けと勧めたが、彼にはそれほどの必要もなかった。

彼はその日無沙汰見舞かたがた市ヶ谷いちがやの薬王寺前やくおうじにいる兄の宅うちへも寄つて、島田の事を訊きいて見ようかと考えていたが、時間の遅くなつたのと、どうせ訊いたつて仕方がないという気が次第に強くなつたのとで、それなり駒込こまごめへ歸つた。その晩はまた翌日あくるひの仕事に忙殺ぼうさいされな

ければならなかった。そうして島田の事はまるで忘れてしまった。

九

彼はまた平生へいぜいの我に帰った。活力の大部分を挙げて自分の職業に使う事が出来た。彼の時間は静かに流れた。しかしその静かなうちには始終いらいらするものがあつて、絶えず彼を苦しめた。遠くから彼を眺めていなければならなかった細君は、別に手の出しようもないので、澄ましていた。それが健三には妻にあるまじき冷淡としか思えなかった。細君はまた心の中で彼と同じ非難を夫の上に投げ掛けた。夫の書齋で暮らす時間が多くなればなるほど、夫婦間の交渉は、用事以

外に少なくならなければならぬはずだというのが細君の方の理窟であつた。

彼女は自然の勢い健三を一人書齋に遺して置いて、子供だけを相手にした。その子供たちはまた滅多に書齋へ這入らなかつた。たまに這入ると、きつと何か悪戯いたづらをして健三に叱しかられた。彼は子供を叱るくせに、自分の傍そばへ寄り付かない彼らに対して、やはり一種の物足りない心持を抱いだいていた。

一週間後の日曜が来た時、彼はまるで外出しなかつた。気分を変えするため四時頃風呂ふろへ行つて帰つたら、急にうつとりした好いいい氣持に襲われたので、彼は手足を畳の上へ伸ばしたまま、つい仮寐うたたねをした。そうして晩食ばんめしの時刻になつて、細君から起されるまでは、首を切られた

人のように何事も知らなかった。しかし起きて膳ぜんに向った時、彼には微かすかな寒気が脊筋せすじを上から下へ伝わって行くような感じがあつた。その後で烈はげしい嚏くさみが二つほど出た。傍にいる細君は黙っていた。健三も何もいわなかったが、腹の中ではこうした同情に乏しい細君に対する厭いやな心持を意識しつつ箸はしを取った。細君の方ではまた夫が何故なぜ自分に何もかも隔意なく話して、能働のうどうてき的に細君らしく振舞わせないのかと、その方をかえって不愉快に思つた。

その晩彼は明らかに多少風邪かぜ気味であるという事に気が付いた。用心して早く寐ねようと思つたが、ついしかけた仕事に妨げられて、十二時過まで起きていた。彼の床に入る時には家内のものはもう皆な寐ねていた。熱い葛湯くずゆでも飲んで、発汗したい希望をもっていた健三は、や

むをえずそのまま冷たい夜具の裏に潜り込んだ。彼は例にない寒さを感じて、寐付が大変悪かった。しかし頭脳の疲労はほどなく彼を深い眠の境に誘った。

翌日眼を覚した時は存外安静であつた。彼は床の中で、風邪はもう癒つたものと考えた。^{なお}しかしいよいよ起きて顔を洗う段になると、何時もの冷水摩擦が退儀な位身体が倦怠^{からだ}くなつてきた。勇気を鼓^こして食卓に着いて見たが、朝食は少しも旨^{あさめし}くなかつた。いつもは規定として三膳食べるところを、その日は一膳で済ました後、梅干を熱い茶の中に入れてふうふう吹いて呑^のんだ。しかしその意味は彼自身にも解らなかつた。この時も細君は健三の傍に坐つて給仕をしていたが、別に何にもいわなかつた。彼にはその態度がわざと冷淡に構えている技巧の

如く見えて多少腹が立つた。彼はことさらな咳せきを二度も三度もして見せた。それでも細君は依然として取り合わなかった。

健三はさつさと頭から白襯衣ワイシャツを被かぶつて洋服に着換えたなり例刻うちに宅を出た。細君は何時もの通り帽子を持って夫を玄関まで送つて来たが、この時の彼には、それがただ形式だけを重んずる女としか受取れなかったので、彼はなお厭おかんな心持がした。

外ではしきりに悪感おかんがした。舌が重々しくぱさついて、熱のある人のように身体全体が倦怠けたるかった。彼は自分の脈を取って見て、その早いのに驚ろいた。指頭しとうに触れるピンピンいう音が、秒を刻む袂時計たもとどけいの音と錯綜さくそうして、彼の耳に異様な節奏を伝えた。それでも彼は我慢して、するだけの仕事を外でした。

十

彼は例刻に宅^{うち}へ歸つた。洋服を着換える時、細君は何時もの通り、彼の不斷着^{ふだんぎ}を持ったまま、彼の傍^{そば}に立っていた。彼は不快な顔をしてそちらを向いた。

「床を取つてくれ。寐^ねるんだ」

「はい」

細君は彼のいうがままに床を延べた。彼はすぐその中に入つて寐た。彼は自分の風邪氣^{かぜけ}の事を一口も細君にいわなかった。細君の方でも一向其^{そこ}所に注意していない様子を見せた。それで双方とも腹の中には不平があつた。

健三が眼を塞いでうつらうつらしていると、細君が枕元へ来て彼の名を呼んだ。

「あなた御飯を召上がりですか」

「飯なんか食いたくない」

細君はしばらく黙っていた。けれどもすぐ立って部屋の外へ出て行くとはしなかった。

「あなた、どうかなすったんですか」

健三は何にも答えずに、顔を半分ほど夜具の襟に埋めていた。細君は無言のまま、そつとその手を彼の額の上に加えた。

晩になって医者 came。ただの風邪だろうという診察を下して、水薬と頓服を呉れた。彼はそれを細君の手から飲ましてもらった。

あくるひ

翌日は熱がなお高くなった。医者ゴムの注意によって護謄ひょうのうの氷嚢を彼の頭の上に載せた細君は、蒲団ふとんの下に差し込むニッケル製の器械げじょを下女が買ってくるまで、自分の手で落ちないようにそれを抑えていた。

魔に襲われたような気分が二、三日つづいた。健三の頭にはその間の記憶というものが殆んどない位であつた。正気に歸つた時、彼は平気な顔をして天井を見た。それから枕元に坐っている細君を見た。そうして急にその細君の世話になつたのだという事を思い出した。しかし彼は何にもいわずにまた顔を背けてしまった。それで細君の胸には夫の心持が少しも映らなかつた。

「あなたどうなすつたんです」

「風邪を引いたんだって、医者がいうじゃないか」

「そりゃ解つてます」

会話はそれで途切れてしまった。細君は厭^{いや}な顔をしてそれぎり部屋を出て行つた。健三は手を鳴らしてまた細君を呼び戻した。

「己^{おれ}がどうしたというんだい」

「どうしたつて、——あなたが御病氣だから、私^{わたくし}だつてこうして氷嚢^{ひやう}を更^かえたり、藥を注^ついだりして上げるんじゃありませんか。それをあっちへ行けの、邪魔だのつて、あんまり……」

細君は後をいわずに下を向いた。

「そんな事をいった覚はない」

「そりゃ熱の高い時仰^{おつ}しやつた事ですから、多分覚えちゃいらつしやらないでしょう。けれども平生^{へいぜい}からそう考えてさえいらつしやらなけ

れば、いくら病気だって、そんな事を仰しやる訳がないと思いますわ」

こんな場合に健三は細君の言葉の奥に果してどの位な真実が潜んでいるだろうかと反省して見るよりも、すぐ頭の力で彼女を抑えつけたがる男であつた。事実の問題を離れて、単に論理の上から行くと、細君の方がこの場合も負けであつた。熱に浮かされた時、魔睡薬に酔つた時、もしくは夢を見る時、人間は必ずしも自分の思っている事ばかり物語るとは限らないのだから。しかしそうした論理は決して細君の心を服するに足りなかつた。

「よござんす。どうせあなたは私を下女同様に取り扱うつもりでいらつしやるんだから。自分一人さえ好ければ構わないと思つて、：

…」

健三は座を立つた細君の後姿を腹立たしそうに見送った。彼は論理の権威で自己を伴いつわっている事にはまるで気が付かなかつた。学問の力で鍛え上げた彼の頭から見ると、この明白な論理に心底しんそこから大人しく従い得ない細君は、全くの解らずやに違なかつた。

十一

その晩細君は土鍋どなべへ入れた粥かゆをもつて、また健三の枕元すわに坐つた。それを茶碗ちやわんに盛りながら、「御起おおきになりませんか」と訊きいた。

彼の舌にはまだ苔こけが一杯生えていた。重苦しいような厚ぼったいよ

うな口の中へ物を入れる気には殆んどなれなかった。それでも彼は何故だか床の上に起き返って、細君の手から茶碗を受取ろうとした。しかし舌障りの悪い飯粒が、ざらざらと咽喉の方へ滑り込んで行くだけなので、彼はたった一膳で口を拭いたなり、すぐ故の通り横になった。

「まだ食氣が出ませんね」

「少しも旨くない」

細君は帯の間から一枚の名刺を出した。

「こういう人が貴方の寐でいらしゃるうちに来たんですが、御病氣だから断って帰しました」

健三は寐ながら手を出して、鳥の子紙に刷ったその名刺を受取つ

て、姓名を読んで見たが、まだ会った事も聞いた事もない人であつた。

「何時^{いつ}来たのかい」

「たしか一昨日^{おととい}でしたろう。ちよつと御話ししようと思つたんですが、まだ熱^さが下らないから、わざと黙っていました」

「まるで知らない人だがな」

「でも島田の事でちよつと御主人に御目にかかりたいって来たんだそうですよ」

細君はとくに島田という二字に力を入れてこういいながら健三の顔を見た。すると彼の頭にこの間途中で会った帽子を被^{かぶ}らない男の影がすぐひらめいた。熱から覚めた彼には、それまでこの男の事を思い出

す機会がまるでなかったのである。

「御前島田の事を知ってるのかい」

「あの長い手紙が御常さんおつねって女から届いた時、貴方が御話しなすつたじゃありませんか」

健三は何とも答えずに一旦下へ置いた名刺をまた取り上げて眺めた。島田の事をその時どれほど詳しく彼女に話したか、それが彼には不確ふたしかであつた。

「ありや何時だったかね。よッぽど古い事だろう」

健三はその長々しい手紙を細君に見せた時の心持を思い出して苦笑した。

「そうね。もう七年位になるでしょう。私たちがまだ千本せんぽん通りにいた

時分ですから」

千本通りというのは、彼らがその頃住んでいた或^{ある}都会の外れにある町の名であつた。

細君はしばらくして、「島田の事なら、あなたに伺わなくても、御^お兄^{にい}さんからも聞いて知ってますわ」といった。

「兄がどんな事をいったかい」

「どんな事って、——なんでも余^あり善^まくない人だつていう話じゃありませんか」

細君はまだその男の事について、健三の心を知りたい様子であつた。しかし彼にはまた反対にそれを避けたい意向があつた。彼は黙つて眼を閉じた。盆に載せた土鍋と茶碗を持って席を立つ前、細君はも

う一度こういった。

「その名刺の名前の人はまた来るそうですよ。いずれ御病氣が御癒りおなおになったらまた伺いますからって、帰って行ったそうですから」

健三は仕方なしにまた眼を開あいた。

「来るだろう。どうせ島田の代理だと名乗る以上はまた来るに極きまつてるさ」

「しかしあなた御会いになつて？　もし来たら」

実をいうと彼は会いたくなかった。細君はなおの事夫をこの変な男に会わせたくなかった。

「御会いにならない方が好いいでしよう」

「会つても好い。何も怖い事はないんだから」

細君には夫の言葉が、また例の我^がだと取れた。健三はそれを厭^{いや}だけでも正しい方法だから仕方がないのだと考えた。

十二

健三の病気は日ならず全快した。活字に眼を曝^{さら}したり、万年筆を走らせたり、または腕組をしてただ考えたりする時が再び続くようになった頃、一度無駄足を踏ませられた男が突然また彼の玄関先に現われた。

健三は鳥の子紙に刷った吉田虎吉^{よしだとらきち}という見覚^{みおぼえ}のある名刺を受取つて、しばらくそれを眺めていた。細君は小さな声で「御会いになりま

すか」と訊たずねた。

「会うから座敷へ通してくれ」

細君は断りたさそうな顔をして少し躊躇ちゆうちよしていた。しかし夫の様子を見てとった彼女は、何もいわずにまた書斎を出て行つた。

吉田というのは、でっぷり肥ふとつた、かつぶくの好よい、四十恰がっこう好の男であつた。縞しまの羽織はおりを着て、その頃まで流行はやつた白縮緬しろちりめんの兵児帯へこおびにび

かぴかする時計の鎖を巻き付けていた。言葉使かたぎいから見ても、彼は全あきんどくの町人であつた。そうかといって、決して堅氣かたぎの商人あきんどとは受取れな

かつた。「なるほど」というべきところを、わざと「なある」と引

張へちまつとつたり、「御尤ごもつとも」の代りに、さも感服したらしい調子で、「いか

さま」と答えたりした。

健三には会見の順序として、まず吉田の身元から訊きいてかかる必要があつた。しかし彼よりは能弁な吉田は、自分の方で聞かれない先に、素性の概略を説明した。

彼はもと高崎たかさきにいた。そうして其所そこにある兵營しゅつにゅうに出入して、糧秣かいばを納めるのが彼の商買しょうばいであつた。

「そんな関係から、段々将校方の御世話になるようになりまして。その内でも柴野しばのの旦那には特別御贔負ごひいきになつたものですから」

健三は柴野という名を聞いて急に思い出した。それは島田の後妻の娘が嫁に行った先の軍人の姓であつた。

「その縁故で島田を御承知なんですな」

二人はしばらくその柴野という士官について話し合つた。彼が今高

崎にいない事や、もっと遠くの西の方へ転任してから幾年目になると
いう事や、相変らずの大酒たいしゅで家計があまり裕ゆたかでないという事や、すべ
てこれらは、健三に取って耳新らしい報知たよりに違なかつたが、同時に大
した興味を惹ひく話題にもならなかつた。この夫婦に対して何らの悪感あつかん
も抱いだいていない健三は、ただそうかと思つて平氣に聞いているだけで
あつた。しかし話が本筋に入つて、いよいよ島田の事を持ち出された
時彼は、自然厭いやな心持がした。

吉田はしきりにこの老人の窮迫の状を訴え始めた。

「人間があまり好過ぎるもんですから、つい人に騙だまされてみんな損すつ
ちまうんです。とても取れる見込のないのにむやみに金を出してやつ
たり何なんかするもんですからな」

「人間が好過ぎるんでしょうか。あんまり慾張るからじゃありませんか」

たとい吉田のいう通り老人が困窮しているとしたところで、健三にはこうより外に解釈の道はなかった。しかも困窮というからしてが既に怪しかった。肝心の代表者たる吉田も強いてその点は弁護しなかった。「あるいはそうかも知れませんが」といったなり、後は笑に紛らわしてしまった。そのくせ月々若干か貢いで遣つてくれる訳には行くまいかという相談をすぐその後から持ち出した。

正直な健三はつい自分の経済事状を打ち明けて、この一面識しかない男に話さなければならなかった。彼は自己の手に入る百二、三十円の月収が、どう消費されつつあるかを詳しく説明して、月々あとに

残るものは零ゼロだという事を相手に納得させようとした。吉田は例の「なある」と「いかさま」を時々使つて、神妙に健三の弁解を聴いた。しかし彼がどこまで彼を信用して、どこから彼を疑い始めているか、その点は健三にも分らなかつた。ただ先方はどこまでも下手したでに出る手段を主眼としてゐるらしく見えた。不穩の言葉は無論、強請ゆすりがましい様子は噫おくびにも出さなかつた。

十三

これで吉田の持つて来た用件の片が付いたものと解釈した健三は、心のうちで暗あんに彼の歸るのを予期した。しかし彼の態度は明らかにこ

の予期の裏を行つた。金の問題にはそれぎり触れなかつたが、毒にも薬にもならない世間話を何時までも続けて動かなかつた。そうして自然天然話頭わとうをまた島田の身の上に戻して來た。

「どんなものでしょう。老人も取る年で近頃は大変心細そうな事ばかりいつていますが、——どうかして元通りおつきあいの御交際は願えないものでしょうか」

健三はちよつと返答に窮した。仕方なしに黙つて二人の間に置かれた烟草盆タバコぼんを眺めていた。彼の頭のなかには、重たそうに毛繻子けじゆすの洋傘をさして、異様の瞳を彼の上に据えたその老人の面影がありありと浮かんだ。彼はその人の世話になつた昔を忘れる訳に行かなかつた。同時に人格の反射から来るその人に対しての嫌悪けんおの情も禁ずる事が出来

なかった。両方の間に板挟みとなった彼は、しばらく口を開き得なかった。

「手前も折角こうして上がったものですから、これだけはどうぞ曲げて御承知を願いたいもので」

吉田の様子はいいよ丁寧になった。どう考えても交際つきあうのは厭いやでならなかった健三は、またどうしてもそれを断わるのを不義理と認めなければ済まなかった。彼は厭でも正しい方に従おうと思い極きわめた。

「そういう訳なら宜よろしゅう御座います。承知の旨むねを向むへ伝えて下さい。しかし交際は致しても、昔のような関係ではとても出来ませんから、それも誤解のないように申し伝えて下さい。それから私わたしの今の状況では、私の方から時々出掛けて行って老人に慰藉いしやを与えるなんて事

は六^むずかしいのですが……」

「するとまあただ御出入^{おでいり}をさせて頂くという訳になりますな」

健三には御出入という言葉^{つら}を聞くのが辛^{つら}かった。そうだともそうでないともいいかねて、また口を閉じた。

「いえなにそれで結構で、——昔と今とは事情もまるで違いますから」

吉田は自分の役目^{ようや}が漸く済んだという顔付をしてこういった後^{あと}、今まで持ち扱っていた烟草入を腰へさしたなり、さつさと帰って行^たった。

健三は彼を玄関まで送り出すと、すぐ書斎へ入った。その日の仕事を早く片付けようという気があるので、いきなり机へ向ったが、心のどこかに引懸りが出来て、なかなか思う通りに抄^{はかど}取らなかつた。

其所^{そこ}へ細君がちよつと顔を出した。「あなた」と二返ばかり声を掛けしたが、健三は机の前に坐つたなり振り向かなかつた。細君がそのまゝ黙^{ひっそり}つて引込んだ後、健三は進まぬながら仕事を夕方まで続けた。平生^{へいぜい}よりは遅くなつて漸く夕食^{ゆうめし}の食卓に着いた時、彼は始めて細君と言葉を換わした。

「先刻^{さつき}来た吉田つて男は一体何なんですか」と細君が訊^きいた。

「元高崎で陸軍^{りくぐん}の用達^{ようたし}か何かしていたんだそうだ」と健三が答えた。

問答^{もんと}は固^{もと}よりそれだけで尽きるはずがなかつた。彼女は吉田と柴野との関係やら、彼と島田との間柄^{まがら}やらについて、自分に納得^{なつとく}の行くまで夫から説明を求めようとした。

「どうせ御金か何か呉^くれっていうんでしょう」

「まあそうだ」

「それで貴方^{あなた}どうなすつて、——どうせ御断りになったでしょうね」

「うん、断った。断るより外に仕方がないからな」

二人は腹の中で、自分らの家^{うち}の経済状態を別々に考えた。月々支出している、また支出しなければならぬ金額は、彼に取つて随分苦しい労力の報酬であると同時に、それで凡^{すべ}てを賄^{まかな}つて行く細君に取つても、少しも裕^{ゆたか}なものとはいわれなかった。

十四

健三はそれぎり座を立とうとした。しかし細君にはまだ訊^ききたい事

が残っていた。

「それで素直に帰って行っただんですか、あの男は。少し変ね」

「だって断られれば仕方がないじゃないか。喧嘩けんかをする訳にも行かないんだから」

「だけど、また来るんでしょう。ああして大人しく帰って置いて」

「来ても構構わないさ」

「でも厭いやですわ、蒼蠅うるさくって」

健三は細君が次の間で先刻さつきの会話を残らず聴いていたものと察した。

「御前聴いてたんだろう、悉皆すつかり」

細君は夫の言葉を肯定しない代りに否定もしなかった。

「じゃそれで好いじゃないか」

健三はこういったなりまた立つて書齋へ行こうとした。彼は独断家であつた。これ以上細君に説明する必要は始めからないものと信じていた。細君もそうした点において夫の権利を認める女であつた。けれども表向夫の権利を認めるだけに、腹の中には何時も不平があつた。おもてむき事々について出て来る権柄けんぺいずくな夫の態度は、彼女に取つて決して心持の好いものではなかつた。何故なぜもう少し打ち解けてくれないのかという気が、絶えず彼女の胸の奥に働らいた。そのくせ夫を打ち解けさせる天分も技倆も自分に充分具えていないという事実には全く無頓着むとんじやくであつた。

「あなた島田と交際つきあつても好いと受合うあつていらしたようですね」

「ああ」

健三はそれがどうしたといった風の顔付をした。細君は何時でも此^こ所まで来て黙ってしまふのを例にしていた。彼女の性質として、夫がこういう態度に出ると、急に厭^{いや}氣がさして、それから先一步も前へ出る氣になれないのである。その不愛想な様子がまた夫の氣質に反射して、益^{ますます}彼を権柄づくにしがちであつた。

「御前や御前の家族に關係した事でないんだから、構わないじゃないか、己^{おれ}一人で極^きめたつて」

「そりや私^{わたくし}に対して何も構って頂かなくつても宜^よござんす。構ってくれつつて、どうせ構って下さる方じゃないんだから、……」

學問をした健三の耳には、細君のいう事がまるで脱線であつた。そ

うしてその脱線はどうしても頭の悪い証拠としか思われなかった。

「また始まった」という気が腹の中でした。しかし細君はすぐ当の問題に立ち戻って、彼の注意を惹^ひかなければならないような事をいい出した。

「しかし御父さまに悪いでしょう。今になってあの人と御交際^{おつきあい}になっちゃあ」

「御父さまって己^{おれ}のおやじかい」

「無論貴方^{あなた}の御父さまですわ」

「己のおやじはどうに死んだじゃないか」

「しかし御亡くなりになる前、島田とは絶交だから、向後^{こうご}一切付合^{つきあい}をしちやならないって仰^{おつ}しやったそうじゃありませんか」

健三は自分の父と島田とが喧嘩をして義絶した当時の光景をよく覚えていた。しかし彼は自分の父に対してさほど情愛の籠こもった優しい記憶を有もつていなかった。その上絶交云々うんぬんについても、そう嚴重にいい渡された覚おぼえはなかった。

「御前誰からそんな事を聞いたのかい。己は話したつもりはないがな」

「貴方じゃありません。御兄おあにいさんに伺ったんです」

細君の返事は健三に取って不思議でも何でもなかった。同時に父の意志も兄の言葉も、彼には大した影響を与えなかった。

「おやじは阿爺おやじ、兄は兄、己は己なんだから仕方がない。己から見ると、交際を拒絶するだけの根拠がないんだから」

こういい切った健三は、腹の中でその交際が厭で厭で堪らないのだという事実を意識した。けれどもその腹の中はまるで細君の胸に映らなかった。彼女はただ自分の夫がまた例の頑固を張り通して、徒らに皆なの意見に反対するのだとばかり考えた。

十五

健三は昔その人に手を引かれて歩いた。その人は健三のために小さい洋服を拵らえてくれた。大人さえあまり外国の服装に親しみのない古い時分の事なので、裁縫師は子供の着るスタイルなどにはまるで頓着しなかった。彼の上着には腰のあたりに釦が二つ並んでいて、胸は

開いたままであつた。霜降の羅紗ラシャも硬くごわごわして、極めて手触てざわりが粗あらかつた。ことに洋袴ズボンは薄茶色に豎溝たてみぞの通つた調馬師でなければ穿はかないものであつた。しかし当時の彼はそれを着て得意に手を引かれて歩いた。

彼の帽子もその頃の彼には珍らしかつた。浅い鍋底なべぞこのような形をしたフェルトをすぽりと坊主頭ずきんへ頭巾かぶのように被かぶるのが、彼に大した満足を与えた。例の如くその人に手を引かれて、寄席よせへ手品を見に行つた時、手品師が彼の帽子を借りて、大事な黒羅紗の山の裏から表へ指を突き通して見せたので、彼は驚ろきながら心配そうに、再びわが手に歸つた帽子を、何遍か撫なでまわして見た事もあつた。

その人はまた彼のために尾の長い金魚をいくつも買つてくれた。武む

者^{しやえ}絵、錦^{にしきえ}絵、二枚つづき三枚つづきの絵も彼のいうがままに買つてくれた。彼は自分の身体^{からだ}にあう緋^ひ緘^{おど}しの鎧^{よろい}と竜頭^{たつがしら}の兜^{かぶと}さえ持つていた。彼は日に一度位ずつその具足を身に着けて、金紙^{きんがみ}で拵^{きんがみ}えた采配^{さいはい}を振り舞わした。

彼はまた子供の差す位な短かい脇差^{わきざし}の所有者であつた。その脇差の目貫^{めぬき}は、鼠^{とうがらし}が赤い唐辛子^{さんご}を引いて行く彫刻で出来上つていた。彼は銀で作つたこの鼠と珊瑚^{さんご}で拵^{きんがみ}えたこの唐辛子とを、自分の宝物のように大事がつた。彼は時々この脇差が抜いて見たくなつた。また何度も抜こうとした。けれども脇差は何時^{いつ}も抜けなかつた。——この封建時代の装飾品もやはりその人の好意で小さな健三の手に渡されたのである。

彼はまたその人に連れられて、よく船に乗った。船にはきつと腰蓑こしみのを着けた船頭がいて網を打った。いなだの鰯ぼらだのが水際まで来て跳ね躍おどる様が小さな彼の眼に白金しろがねのような光を与えた。船頭は時々一里も二里も沖へ漕こいで行つて、海鰐かいぐというものまで捕った。そういう場合には高い波が来て舟を揺り動かすので、彼の頭はすぐ重くなった。そうして舟の中へ寐ねてしまう事が多かった。彼の最も面白がったのは河豚ぐの網にかかった時であつた。彼は杉箸すぎばしで河豚の腹をかんから太鼓だいこのように叩たたいて、その膨ふくれたり怒つたりする様子を見て楽しんだ。……

吉田と会あひ見た後の健三あとしの胸には、ふとこうした幼時の記憶が続々湧わいて来る事があつた。凡すべてそれらの記憶は、断片的な割に鮮明あざやかに彼の心に映るものばかりであつた。そうして断片的ではあるが、どれも

これも決してその人と引き離す事は出来なかつた。零碎れいさいの事実を手繰たぐり寄せれば寄せるほど、種が無尽蔵にあるように見えた時、またその無尽蔵にある種おのおのの各自のうちには必ず帽子を披かぶらない男の姿が織り込まれているという事を発見した時、彼は苦しんだ。

「こんな光景をよく覚えていくせに、何故なぜ自分の有もつていたその頃の心が思い出せないのだろう」

これが健三にとって大きな疑問になった。實際彼は幼少の時分それほど世話になった人に対する当時のわが心持というものをまるで忘れてしまった。

「しかしそんな事を忘れるはずがないんだから、ことによると始めからその人に対してだけは、恩義相応じょうあいの情合が欠けていたのかも知れな

い」

健三はこうも考えた。のみならず多分この方だろうと自分を解釈した。

彼はこの事件について思い出した幼少の時の記憶を細君に話さなかった。感情に脆いもろ女の事だから、もしそうでもしたら、あるいは彼女の反感を和らげるに都合が好かろうとさえ思わなかった。

十六

待ち設けた日がやがて来た。吉田と島田とはある日の午後連れ立って健三の玄関に現れた。

健三はこの昔の人に対してどんな言葉を使つて、どんな応対をして
好いか解らなかつた。思慮なしにそれらを極めてくれる自然の衝動が
今の彼にはまるで欠けていた。彼は二十年余も会わない人と膝を突き
合せながら、大した懐かしみも感じ得ずに、むしろ冷淡に近い受答え
ばかりしていた。

島田はかねて横風おうふうだという評判のある男であつた。健三の兄や姉は
単にそれだけでも彼を忌み嫌っている位であつた。実は健三自身も心
のうちでそれを恐れていた。今の健三は、単に言葉遣いの末でさえ、
こんな男から自尊心を傷けきずられるには、あまりに高過ぎると、自分を
評価していた。

しかし島田は思ったよりも鄭寧ていねいであつた。普通初見しょけんの人が挨拶あいさつに用

いる「ですか」とか、「ません」とかいうてにはで、言葉の語尾を切る注意をわざと怠らないように見えた。健三はむかしその人から健坊々々と呼ばれた幼い時分を思い出した。関係が絶えてからも、会いさえすれば、やはり同じ健坊々々で通すので、彼はそれを厭に感じた過去も、自然胸のうちに浮かんだ。

「しかしこの調子なら好いだろう」

健三はそれで、出来るだけ不快の顔を二人に見せまいと力めた。向うもなるべく穏かに帰るつもりと見えて、少しも健三の気を悪くするような事はいわなかった。それがために、当然双方の間に話題となるべき懷旧談なども殆ど出なかった。従って談話はややともすると途切れがちになった。

健三はふと雨の降った朝の出来事を考えた。

「この間二度ほど途中で御目にかかりましたが、時々あの辺を御通りになるんですか」

「実はあの高橋の総領の娘が片付いている所がついこの先にあるもんですから」

高橋というのは誰の事だか健三には一向解らなかった。

「はあ」

「そら知ってるでしょう。あの芝しばの」

島田の後妻の親類が芝にあつて、其所そこの家は何でも神主かんぬしか坊主だという事を健三は子供心に聞いて覚えていたような氣もした。しかしその親類の人には、要ようさんという彼とおない年位な男に二、三遍会った

ぎりで、他のものに顔を合せた記憶はまるでなかった。

「芝というと、たしか御藤おふじさんの妹さんに当る方の御嫁かたにいらした所でしたね」

「いえ姉ですよ。妹ではないんです」

「はあ」

「要三ようぞうだけは死にましたが、あとの姉妹きょうだいはみんな好い所へ片付いてね、仕合せですよ。そら総領のは、多分知っておいでだろう、——へ行ったんです」

——という名前はなるほど健三に耳新しいものではなかった。しかしそれはもうよほど前に死んだ人であつた。

「あとが女と子供ばかりで困るもんだから、何かにつけて、叔父おじさん

叔父さんて重宝がられましてね。それに近頃は宅に手入をするんで監督の必要が出来たものだから、殆ど毎日のように此所の前を通りま
す」

健三は昔この男につれられて、池の端の本屋で法帖を買ってもらった事をわれ知らず思い出した。たとい一銭でも二銭でも負けさせなければ物を買った例のないこの人は、その時も僅か五厘の釣銭を取るべく店先へ腰を卸して頑として動かなかった。董其昌の折手本を抱えて傍に佇立んでいる彼に取ってはその態度が如何にも見苦しくまた不愉快であつた。

「こんな人に監督される大工や左官はさぞ腹の立つ事だろう」

健三はこう考えながら、島田の顔を見て苦笑を洩らした。しかし島

田は一向それに気が付かないらしかった。

十七

「でも御蔭さまで、本を遺^{のこ}して行つてくれたもんですから、あの男が亡くなつても、あとはまあ困らないで、どうにかこうにか遣^やつて行けるんです」

島田は――の作つた書物を世の中の誰でもが知っていなければならぬはずだといった風の口調でこういった。しかし健三は不幸にしてその著書の名前を知らなかった。字引^{じびき}か教科書だろうとは推察したが、別に訊^きいて見る気にもならなかった。

「本というものは実に有難いもので、一つ作って置くとそれが何時までも売れるんですからね」

健三は黙っていた。仕方なしに吉田が相手になつて、何でも儲けるには本に限るような事をいった。

「御祝儀は済んだが、——が死んだ時後が女だけだもんだから、実は私が本屋に懸け合いましたね。それで年々いくらと極めて、向うから収めさせるようにしたんです」

「へえ、大したもんですな。なるほどどうも学問をなさる時は、それだけ資金が要るようで、ちよつと損な気もしますが、さて仕上げて見ると、つまりその方が利廻りの好い訳になるんだから、無学のものはとても敵いませんな」

「結局得ですよ」

彼らの応対は健三に何の興味も与えなかった。その上いくら相槌をあいづち打とうにも打たれないような変な見当へ向いて進んで行くばかりであつた。手持無沙汰な彼は、やむをえず二人の顔を見比べながら、時々庭の方を眺めた。

その庭はまた見苦しく手入れの届かないものであつた。何時緑をとつたか分らないような一本の松が、息苦しうに蒼黒い葉を垣根の傍にそば茂らしている外に、木らしい木は殆どなかつた。箒に馴染まない地面は小石交りに凸凹でこぼこしていた。

「こちらの先生も一つ御儲けになつたら如何いかにです」

吉田は突然健三の方を向いた。健三は苦笑しない訳に行かなかつ

た。仕方なしに「ええ儲けたいものですね」といって跋ばつを合せた。

「なに訳はないんです。洋行まですりゃ」

これは年寄の言葉であつた。それがあたかも自分で学資でも出して、健三を洋行させたように聞こえたので、彼は厭いやな顔をした。しかし老人は一向そんな事に頓着とんじやくする様子も見えなかつた。迷惑めいわくそうな健三の体ていを見ても澄すましていた。しまい吉田が例の烟草タバコ入いれを腰へ差し、
「では今日こんにちはこれで御暇おいとまを致す事にしましょうか」と催促したので、彼は漸ようやく帰る氣になつたらしかつた。

二人を送り出してまたちよつと座敷へ戻つた健三は、再び座蒲団ざぶたんの上うへに坐つたまま、腕組わんぐみをして考えた。

「一体何のために來たのだろう。これじゃ他ひとを厭いとがらせに來るのと同

じ事だ。あれで向は面白いのだろうか」

彼の前には先刻島田の持つて来た手土産がそのまま置いてあつた。

彼はぼんやりその粗末な菓子折を眺めた。

何にもいわずに茶碗だの烟草盆を片付け始めた細君は、しまいに

黙つて坐つている彼の前に立つた。

「あなたまだ其処に坐つていらつしやるんですか」

「いやもう立つても好い」

健三はすぐ立上ろうとした。

「あの人たちはまた来るんでしょうか」

「来るかも知れない」

彼はこう言い放つたまま、また書斎へ入った。一しきり箒で座敷を

掃く音が聞えた。それが済むと、菓子折を奪り合う子供の声がした。
凡てがやがて静になったと思う頃、黄昏の空からまた雨が落ちて来た。
健三は買おう買おうと思ひながら、ついまだ買わずにいる才
ヴァーシユの事を思い出した。

十八

雨の降る日が幾日も続いた。それがからりと晴れた時、染付けられた
ような空から深い輝きが大地の上に落ちた。毎日鬱陶しい思いをし
て、縫針にばかり気をとられていた細君は、縁鼻へ出てこの蒼い空を
見上げた。それから急に箆笥の抽斗を開けた。

彼女が服装を改ためて夫の顔を覗のぞきに來た時、健三は頬杖ほおづえを突いたまま盆ぼん槍やり汚ない庭を眺めていた。

「あなた何を考えていらつしやるの」

健三はちよつと振り返つて細君の余所行姿よそゆきすがたを見た。その刹那せつなに爛熟らんじゆくした彼の眼はふとした新らし味を自分の妻の上に見出した。

「どこかへ行くのかい」

「ええ」

細君の答は彼に取つて余りに簡潔過ぎた。彼はまたもとの佗わびしい我に歸つた。

「子供は」

「子供も連れて行きます。置いて行くと八釜やかましくつて御蒼蠅おうるさいでしょ

うから」

その日曜の午後を健三は独り静かに暮らした。

細君の帰って来たのは、彼が夕飯ゆうめしを済ましてまた書斎へ引き取った

後あとなので、もう灯あかりが点ついてから一、二時間経っていた。

「ただ今」

遅くなりましたとも何ともいわない彼女の無愛嬌ぶあいきようが、彼には気に入らなかった。彼はちよつと振り向いただけで口を利かなかった。するとそれがまた細君の心に暗い影を投げる媒介なかたちとなった。細君もそのまま立って茶の間の方へ行ってしまった。

話をする機会はそれぎり二人の間に絶えた。彼らは顔さえ見れば自然何かいいなくなるような仲の好いいい夫婦でもなかった。またそれだけ

の親しみを現わすには、御互が御互に取ってあまりに陳腐過ぎた。

二、三日経ってから細君は始めてその日外出した折の事を食事の話題に上せた。

「此間宅へ行ったら、門司の叔父に会いましたね。随分驚ろいちまいました。まだ台湾にいるのかと思ったら、何時の間にか帰って来ていまするんですもの」

門司の叔父というのは油断のならない男として彼らの間に知られていた。健三がまだ地方にいる頃、彼は突然汽車で遣って来て、急に入用が出来たから、是非とも少し都合してくれまいかと頼むので、健三は地方の銀行に預けて置いた貯金を些少ながら用立てたら、立派に印紙を貼った証文を後から郵便で送って来た。その中に「但し利子の儀

は」という文句まで書き添えてあったので、健三はむしろ堅過ぎる人だと思ったが、貸した金はそれぎり戻って来なかった。

「今何をしているのかね」

「何をしているんだか分りやしません。何とかの会社を起すんで、是非健三さんにも賛成してもらいたいから、その内上あがるつもりだって言ってました」

健三にはその後を訊きく必要もなかった。彼が昔し金を借りられた時分にも、この叔父は何かの会社を建てているとかいうので彼はそれを本当にしていた。細君の父もそれを疑わなかった。叔父はその父を旨うまく説きつけて、門司まで引張って行つた。そうしてこれが今建築中の会社だといって、縁もゆかりもない他人の建てている家を見せた。彼

は実にこの手段で細君の父から何千かの資本を捲まき上げたのである。

健三はこの人についてこれ以上何も知りたがらなかつた。細君もい
うのが厭いとらしかつた。しかし何時もの通り会話は其所そこで切れてしまわ
なかつた。

「あの日はあまり好い御天氣だったから、久しぶりで御兄おあにいさんの所へ
も廻まわつて来ました」

「そうか」

細君の里は小石川台町こいしかわだいまちで、健三の兄の家は市ヶ谷薬王寺前うち いちがやくおうじまえだから、
細君の訪問は大した迂回まわりみちでもなかつた。

「御兄さんおあにいに島田の来た事を話したら驚ろいていらつしやいましたよ。今更来られた義理じゃないんだって。健三もあんなものを相手にしなければ好いのにって」

細君の顔には多少諷諫ふうかんの意が現われていた。

「それを聞きに、御前わざわざ薬王寺前へ廻ったのかい」
やくおうじまえ

「またそんな皮肉を仰おつしやる。あなたは どうして そう 他ひとのする事を悪くばかり御取りになるんでしょう。妾わたくしあんまり御無沙汰ごぶさたをして済まな
いと思つたから、ただ歸りにちよつと伺つただけですわ」

彼が滅多に行つた事のない兄の家へ、細君がたまに訪ねて行くのは、つまり夫の代りに交際つきあいの義理を立てているようなものなので、いかな健三もこれには苦情をいう余地がなかった。

「御兄おあにいさんは貴夫あなたのために心配していらっしやるんですよ。ああいう人と交際つきあいだして、またどんな面倒が起らないとも限らないからって」

「面倒ってどんな面倒を指すのかな」

「そりゃ起って見なければ、御兄おあにいさんにだって分りっ子ないでしょうけれども、何しろ碌ろくな事はないと思っていられっしやるんでしょう」

碌な事があるうとは健三にも思えなかった。

「しかし義理が悪いからね」

「だって御金を遣やって縁を切った以上、義理の悪い訳はないじゃありませんか」

手切の金は昔し養育料の名前もとの下に、健三の父の手から島田に渡さ

れたのである。それはたしか健三が廿二の春であつた。

「その上その御金をやる十四、五年も前から貴夫は、もう貴夫の宅へ引き取られていらしたんでしよう」

いくつの年からいくつの年まで、彼が全然島田の手で養育されたのか、健三にも判然分らなかつた。

「三つから七つまでですって。御兄さんおあにいがそう御仰おっしやいましたよ」

「そうかしら」

健三は夢のように消えた自分の昔を回顧した。彼の頭の中には眼鏡めがねで見るような細かい絵が沢山出た。けれどもその絵にはどれを見ても日付がついていなかった。

「証文にちゃんとそう書いてあるそうですから大丈夫間違はないで

しょう」

彼は自分の離籍に関した書類というものを見た事がなかった。

「見ない訳はないわ。きっと忘れていらっしやるんですよ」

「しかし八ッで宅へ帰ったにしたところで復籍するまでは多少往来もしてたんだから仕方がないさ。全く縁が切れたという訳でもないんだからね」

細君は口を噤つぐんだ。それが何故なぜだか健三には淋さびしかった。

「己おれも実は面白くないんだよ」

「じゃ御止およしになれば好いのに。つまらないわ、貴夫、今になってあんな人と交際うのは。一体どういう気なんでしょう、先方むこうは」

「それが己ちつには些ちつとも解らない。向むこうでもさぞ詰らないだろうと思うん

だがね」

「御兄さんは何でもまた金にしようと思つて遣つて来たに違いないから、用心しなくつちやいけないっていつていらつしやいましたよ」

「しかし金は始めから断つちまつたんだから、構わないさ」

「だつてこれから先何をいい出さないとも限らないわ」

細君の胸には最初からこうした予感が働らいていた。其所そこを既に防ぎ止めたとばかり信じていた理に強い健三の頭に、微かすかな不安がまた新らしく萌きざした。

その不安は多少彼の仕事の上に即いて廻った。けれども彼の仕事はまたその不安の影をどこかへ埋めてしまうほど忙がしかった。そうして島田が再び健三の玄関へ現れる前に、月は早くも末になった。

細君は鉛筆で汚ならしく書き込んだ会計簿を持って彼の前に出た。

自分の外で働いて取る金額の全部を挙げて細君の手に委ねるのを例にしていた健三には、それが意外であつた。彼はいまだかつて月末に細君の手から支出の明細書を突き付けられた例がなかつた。

「まあどうにかしているんだろう」

彼は常にこう考えた。それで自分に金の要る時は遠慮なく細君に請求した。月々買う書物の代価だけでも随分の多額に上る事があつた。それでも細君は澄ましていた。経済に暗い彼は時として細君の放漫を

さえ疑^{うたぐ}つた。

「月々の勘定はちゃんとして己^{おれ}に見せなければいけないぜ」

細君は厭^{いや}な顔をした。彼女自身からいえば自分ほど忠実な経済家はどこにもいない気なのである。

「ええ」

彼女の返事はこれぎりであつた。そうして月末^{つきすえ}が来ても会計簿はついに健三の手に渡らなかつた。健三も機嫌の好^いい時はそれを黙認した。けれども悪い時は意地になつてわざと見せろと逼^{せま}る事があつた。そのくせ見せられるとごちゃごちゃしてなかなか解らなかつた。たとい帳面づらは細君の説明を聴いて解るにしても、實際月に肴^{さかな}をどれだけ食^くたものか、または米がどれほど要^いつたものか、またそれが高過ぎ

るのか、安過ぎるのか、更に見当が付かなかった。

この場合にも彼は細君の手から帳簿を受取って、ざっと眼を通しただけであった。

「何か変った事でもあるのかい」

「どうかして頂かないと……」

細君は目下の暮し向について詳しい説明を夫にして聞かせた。

「不思議だね。それで能く今日まで遣^よつて来^{きよう}られたものだね」

「実は毎月余^{まいげつ}らないんです」

余ろうとは健三にも思えなかった。先月末^{すえふる}に古い友達^{すえ}が四、五人で

どこかへ遠足に行くとかいうので、彼にも勧誘の端書をよこした時、

彼は二円の会費がないだけの理由で、同行を断^{おぼえ}った覚もあった。

「しかしかつかつ位には行きそうなものだがな」

「行っても行かなくつても、これだけの収入で遣つて行くより仕方がないんですけれども」

細君はいい悪^{にく}そうに、簞^{たんす}笥^{ひきだし}の抽匣にしまつて置いた自分の着物と帶を質に入れた顛^{てん}末^{まつ}を話した。

彼は昔自分の姉や兄が彼らの晴着を風呂敷へ包んで、こつそり外へ持つて出たりまた持つて入つたりしたのをよく目撃した。他^{ひと}に知れないように気を配りがちな彼らの態度は、あたかも罪を犯した日影者のように見えて、彼の子供心に淋^{さび}しい印象を刻み付けた。こうした聯^{れん}想^{そう}が今の彼を特^{とく}更^{めい}に佗^わびしく思わせた。

「質を置いたつて、御前が自分で置きに行つたのかい」

彼自身いまだ質屋の暖簾のれんを潜くぐった事のない彼は、自分より貧苦の経験に乏しい彼女が、平気でそんな所へ出入でいりするはずがないと考えた。

「いいえ頼んだんです」

「誰に」

「山野のうちの御婆おばあさんにです。あすこには通いつけの質屋の帳面があつて便利ですから」

健三はその先を訊きかなかつた。夫が碌な着物一枚さえ拵こしらえてやらないのに、細君が自分の宅うちから持ってきたものを質に入れて、家計の足たしにしなければならぬというのは、夫の恥に相違なかつた。

健三はもう少し働らこうと決心した。その決心から来る努力が、月々幾枚かの紙幣に変形して、細君の手に渡るようになったのは、それから間もない事であつた。

彼は自分の新たに受取つたものを洋服の内隠袋うちかくしから出して封筒のまゝ畳の上へ放り出した。黙つてそれを取り上げた細君は裏を見て、すぐその紙幣の出所でどころを知つた。家計の不足はかくの如くにして無言のうちに補なわれたのである。

その時細君は別に嬉しい顔うれもしなかつた。しかしもし夫が優しい言葉に添えて、それを渡してくれたなら、きっと嬉しい顔をする事が出来たろうと思つた。健三はまたもし細君が嬉しそうにそれを受取つてくれたら優しい言葉も掛けられたろうにと考えた。それで物質的の

要求に応ずべく工面されたこの金は、二人の間に存在する精神上の要求を充たす方便としてはむしろ失敗に帰してしまった。

細君はその折の物足らなさを回復するために、二、三日経つてから、健三に一反の反物を見せた。

「あなたの着物を拵えようと思うんですが、これはどうでしょう」

細君の顔は晴々しく輝やいていた。しかし健三の眼にはそれが下手

な技巧を交えているように映った。彼はその不純を疑がった。そうし

てわざと彼女の愛嬌に誘われまいとした。細君は寒そうに座を立つ

た。細君の座を立った後で、彼は何故自分の細君を寒がらせなければ

ならない心理状態に自分が制せられたのかと考へて益不愉快になつ

た。

細君と口を利く次の機会が来た時、彼はこういった。

「己^{おれ}は決して御前の考えているような冷刻な人間じゃない。ただ自分の有^もっている温かい情愛を堰^せき止めて、外へ出られないように仕向けるから、仕方なしにそうするのだ」

「誰もそんな意地の悪い事をする人はいないじゃありませんか」

「御前はしょっちゅうしているじゃないか」

細君は恨めしそうに健三を見た。健三の論理^{ロジック}はまるで細君に通じなかった。

「貴夫^{あなた}の神経は近頃よっぱど変ね。どうしてもっと穏当^{わたくし}に私を觀察して下さらないのでしょうか」

健三の心には細君の言葉に耳^{かたみみ}を傾ける余裕がなかった。彼は自分に

不自然な冷かさひややに対して腹立たしいほどの苦痛を感じていた。

「あなたは誰も何にもしないのに、自分一人で苦しんでいらっしやるんだから仕方がない」

二人は互に徹底するまで話し合う事のついに出来ない男女なんによのような気がした。従って二人とも現在の自分を改める必要を感じ得なかった。

健三の新たに求めた余分の仕事は、彼の学問なり教育なりに取って、さして困難のものではなかった。ただ彼はそれに費やす時間と努力とを厭いとった。無意味に暇を潰つぶすという事が目下の彼には何よりも恐ろしく見えた。彼は生きているうちに、何かし終おせる、またし終おせなければならぬと考える男であった。

彼がその余分の仕事を片付けて家に帰るときは何時でも夕暮になった。

或日彼は疲れた足を急がせて、自分の家の玄関の格子を手荒く開けた。すると奥から出て来た細君が彼の顔を見るなり、「あなたあの人
がまた来ましたよ」といった。細君は島田の事を始終あの人あの人と
呼んでいたので、健三も彼女の様子と言葉から、留守のうちに誰が来
たのかほぼ見当が付いた。彼は無言のまま茶の間へ上^{あが}つて、細君に扶^{たす}
けられながら洋服を和服に改めた。

彼が火鉢ひばちの傍そばに坐すわつて、烟草タバコを一本吹かしていると、間もなく夕飯ゆうめしの膳ぜんが彼の前に運ばれた。彼はすぐ細君に質問を掛けた。

「上あがつたのかい」

細君には何が上つたのか解らない位この質問は突然であつた。

ちよつと驚ろいて健三の顔を見た彼女は、返事を待ち受けている夫の様子から始めてその意味を悟さとつた。

「あの人ですか。——でも御留守でしたから」

細君は座敷へ島田を上げなかったのが、あたかも夫の氣に障さわる事でもしたような調子で、言訳がましい答をした。

「上げなかったのかい」

「ええ。ただ玄関でちよつと」

「何とかいつていたかい」

「とうに伺うはずだったけれども、少し旅行していたものだから御不沙汰さたをして済みませんって」

済みませんという言葉が一種の嘲弄ちやうろうのように健三の耳に響いた。

「旅行なんぞするのかな、田舎いなかに用のある身体からだとも思えないが。御前にその行つた先を話したかい」

「そりや何ともいいませんでした。ただ娘の所で来てくれて頼まれたから行つて来たつていいました。大方あの御縫おぬいさんて人の宅うちなんでしょう」

御縫さんの嫁かたづいた柴野しばのという男には健三もその昔会つた覚おぼえがあった。柴野の今の任地先もこの間吉田から聞いて知っていた。それは師

団か旅団のある中国辺の或^{ある}都会であつた。

「軍人なんですか、その御縫さんて人の御嫁に行つた所は」

健三が急に話を途切らしたので、細君はしばらく間^まを置いたあとでこんな問^とを掛けた。

「能^よく知^ちつてるね」

「何時^{いつ}か御兄^{おあにい}さんから伺^{うかが}いましたよ」

健三は心のうちで昔見た柴野と御縫さんの姿を並べて考えた。柴野は肩の張つた色の黒い人であつたが、眼^め鼻^{はな}立^{だち}からいうとむしろ立派な部類に属すべき男に違なかつた。御縫さんはまたすらりとした恰好^{かっこう}の好^い女^めで、顔^{おも}は面^も長^{なが}の色白という出来であつた。ことに美しいのは睫毛^{まつげ}の多い切^き長^れのその眼のように思われた。彼らの結婚したのは柴野

がまだ少尉か中尉の頃であつた。健三は一度その新宅の門を潜くぐつた記憶を有もつていた。その時柴野は隊から歸つて來た身体を大きくして、ながひばちねこいたの猫板の上にある洋盃コップから冷酒ひやざけをぐいぐい飲んだ。御縫さんは白い肌をあらわに、鏡台の前で鬢びんを撫なでつけていた。彼はまた自分の分として取り配わけられた握にぎり鮎すしをしきりに皿の中から撮つまんで食べた。

……

「御縫さんて人はよっぽど容色きりようが好いんですか」

「何故なぜ」

「だって貴夫あなたの御嫁にするって話があつたんだそうじゃありませんか」

なるほどそんな話もない事はなかつた。健三がまだ十五、六の時

分、ある友達を往来へ待たせて置いて、自分一人ちよつと島田の家へ
寄ろうとした時、偶然門前の泥溝に掛けた小橋の上に立つて往来を眺
めていた御縫さんは、ちよつと微笑しながら出合頭の健三に会釈し
た。それを目撃した彼の友達は独乙語を習い始めの子供であつたの
で、「フラウ門に倚つて待つ」といって彼をひやかした。しかし御縫
さんは年齒からいうと彼より一つ上であつた。その上その頃の健三
は、女に対する美醜の鑑別もなければ好悪も有たなかつた。それから
羞恥に似たような一種妙な情緒があつて、女に近寄りたがる彼を、自
然の力で、護謨球のように、かえつて女から弾き飛ばした。彼と御縫
さんとの結婚は、他に面倒のあるなしを差措いて、到底物にならない
ものとして放棄されてしまった。

二十三

「貴夫^{あなた}どうしてその御縫さんて人^{おも}を御貫^{もら}いにならなかったの」

健三は膳^{ぜん}の上から急に眼を上げた。追憶の夢を愕^{おど}ろかされた人のように。

「まるで問題にやならない。そんな料簡は島田にあっただけなんだから。それに己^{おれ}はまだ子供だったしね」

「あの人の本当の子じゃないんでしょう」

「無論さ。御縫さんは御藤^{おふじ}さんの連れっ子だもの」

御藤さんというのは島田の後妻の名であつた。

「だけど、もしその御縫さんて人と一所になつていらしたら、どう

でしよう。今頃は」

「どうなってるか判^{わか}らないじゃないか、なつて見なければ」

「でも殊^{こと}によると、幸福かも知れませんわね。その方が」

「そうかも知れない」

健三は少し忌^{いまいま}々しくなつた。細君はそれぎり口を噤^{つぶ}んだ。

「何^{なぜ}故そんな事を訊^きくのだい。詰らない」

細君は窘^{たじ}なめられるような気がした。彼女にはそれを乗り越すだけの勇氣がなかつた。

「どうせ私^{わたくし}は始めつから御氣に入らないんだから……」

健三は箸^{はし}を放り出して、手を頭の中に突込んだ。そうして其所^{そこ}に溜^{たま}っている雲脂^{ふけ}をごしごし落し始めた。

二人はそれなり別々の室で別々の仕事をした。健三は御機嫌ようと挨拶あいさつに来た子供の去った後で、例の如く書物を読んだ。細君はその子供を寐ねかした後で、昼の残りの縫物を始めた。

御縫さんの話がまた二人の間の問題になったのは、中一日置いた後あとの事で、それも偶然の切ツ懸けからであつた。

その時細君は一枚の端書を持って、健三の部屋へ這入はいつて来た。それを夫の手に渡した彼女は、何時ものようにそのまま立ち去ろうともしせずに、彼の傍そばに腰を卸した。健三が受取った端書を手に持ったなり何時までも読みそうにしないので、我慢しきれなくなった細君はついに夫を促した。

「あなたその端書は比田ひださんから来たんですよ」

健三は漸ようやく書物から眼を放した。

「あの人の事で何か用事が出来たんですって」

なるほど端書には島田の事で会いたいからちよつと来てくれと書いた上に、日と時刻が明記してあった。わざわざ彼を呼び寄せる失礼も鄭寧ていねいに詫わびてあった。

「どうしたんでしょう」

「まるで判明わからないね。相談でもなかりうし。こつちから相談を持ち懸けた事なんかまるでないんだから」

「みんなで交際つきあっちゃいけないって忠告でもなさるんじゃないって。御兄おあにいさんもいらつしやると書いてあるでしょう、其所そこに」

端書には細君のいった通りの事がちゃんと書いてあった。

兄の名前を見た時、健三の頭にふとまた御縫さんの影が差した。島田が彼とこの女を一所にして、後まで両家の関係をつなごうとした如く、この女の生母はまた彼の兄と自分の娘とを夫婦にしたいような希望を有^もっていたらしかったのである。

「健ちゃんの宅^{うち}とこんな間柄にならないとね。あたしも始終健ちゃんの家^{うち}へ行かれるんだけれども」

御藤さんが健三にこんな事をいったのも、顧りみれば古い昔であつた。

「だって御縫さんが今嫁^{かたづ}いてる先は元からの許嫁^{いいなずけ}なんでしょう」

「許嫁でも場合によつたら断る気だつたんだろうよ」

「一体御縫さんはどっちへ行きたかつたんでしょう」

「そんな事が判明^{わか}るもんか」

「じゃ御兄^{おあにい}さんの方はどうなの」

「それも判明らんさ」

健三の子供の時分の記憶の中には、細君の問に応ぜられるような人情がかった材料が一つもなかった。

二十四

健三はやがて返事の端書を書いて承知の旨を答えた。そうして指定の日が来た時、約束通りまた津^つの守坂^{かみざか}へ出掛けた。

彼は時間^{すこ}に対して頗ぶる正確な男であつた。一面において愚直に近

い彼の性格は、一面においてかえって彼を神経的にした。彼は途中で二度ほど時計を出して見た。實際今の彼は起きると寐^ねるまで、始終時間^間に追い懸けられているようなものであつた。

彼は途々^{みちみち}自分の仕事について考えた。その仕事は決して自分の思い通りに進行していなかつた。一步目的へ近付くと、目的はまた一步彼から遠ざかつて行つた。

彼はまた彼の細君の事を考えた。その当時強烈であつた彼女の歇私^{ヒステ}的^リ里^ーは、自然と軽くなつた今でも、彼の胸になお暗い不安の影を投げてやまなかつた。彼はまたその細君の里の事を考えた。經濟上の圧迫が家庭を襲おうとしているらしい気配が、船に乗つた時の鈍い動揺を彼の精神に与える種となつた。

彼はまた自分の姉と兄と、それから島田の事も一所に纏めて考えなければならなかった。凡てが頽廢すべたいはいの影であり凋落ちようらくの色であるうちに、血と肉と歴史とで結び付けられた自分をも併せて考えなければならなかった。

姉の家へ来た時、彼の心は沈んでいた。それと反対に彼の気は興奮していた。

「いやどうもわざわざ御呼び立て申して」と比田が挨拶あいさつした。これは昔の健三に対する彼の態度ではなかった。しかし変って行く世相のうちに、彼がひとり姉の夫たるこの人にだけ優者になり得たという誇りは、健三にとって満足であるよりも、むしろ苦痛であつた。

「ちよつと上がるうにも、どうにもこうにも忙がしくって遣り切れな

いもんですから。現に昨夜なども宿直でしてね。今夜も実は頼まれたんですけれども、貴方あなたと御約束があるから、断わってやつとの事で今帰って来たところで」

比田のいうところを黙って聴いていると、彼が変な女をその勤先つとめさきの近所に囲っているという噂うわさはまるで嘘うそのようであつた。

古風な言葉で形容すれば、ただ算筆さんぴつに達者だという事の外に、大した学問も才幹もない彼が、今時の会社で、そう重宝がられるはずがないのに。——健三の心にはこんな疑問さえ湧わいた。

「姉さんは」

「それに御夏おなつがまた例の喘息ぜんそくでね」

姉は比田のいう通り針箱の上に載せた括り枕くくまくらに倚よりかかつて、ぜい

ぜいいていた。茶の間を覗きに立った健三の眼に、その乱れた髪の毛がむごたしく映った。

「どうです」

彼女は頭を真直に上る事さえ叶わないで、小さな顔を横にしたまま健三を見た。挨拶をしようと思う努力が、すぐ咽喉に障ったと見え、今まで多少落ち付いていた咳嗽の発作が一度に來た。その咳嗽は一つがまだ済まないうちに、後から後から仕切りなしに出て來るの
で、傍で見ていても気が退けた。

「苦しそうだな」

彼は独り言のようにこう囁やいて、眉を顰めた。

見馴れない四十恰好の女が、姉の後から脊中を撫っている傍に、一

本の杉箸すぎばしを添えた水飴みずあめの入物が盆の上に載せてあつた。女は健三に会釈した。

「どうも一昨日おとといからね、あなた」

姉はこうして三日も四日も不眠絶食の姿で衰ろえて行つたあと、また活作用の弾力で、じりじり元へ戻るのを、年来の習慣としていた。それを知らない健三ではなかったが、目前まのあたりこの猛烈な咳嗽せきと消え入るような呼息遣いきづかいとを見ていると、病氣に罹かかつた当人よりも自分の方がかえつて不安で堪らなくなつた。

「口を利こうとすると咳嗽を誘い出すのでしよう。静かにしていらいしゃい。私はあつちへ行くから」
わたし

発作の一仕切収まつた時、健三はこういつて、またもとの座敷へ

歸った。

二十五

比田は平氣な顔をして本を読んでいた。「いえなにまた例の持病ですから」といって、健三の慰問にはまるで取り合わなかった。同じ事を年に何度となく繰り返して行くうちに、自然と末枯れて来る氣の毒な女房の姿は、この男にとって毫も感傷の種にならないように見えた。實際彼は三十年近くも同棲して来た彼の妻に、ただの一つ優しい言葉を掛けた例のない男であつた。

健三の這入って来るのを見た彼は、すぐ読み懸けの本を伏せて、鉄

縁ぶちの眼鏡めがねを外した。

「今ちよつと貴方あなたが茶の間へ行つていらした間に、下くだらないものを読み出したんです」

比田と読書とくしょ——これはまた極めて似つかわしくない取合わせであつた。

「何ですか、それは」

「なに健ちゃんなんぞの読むもんじゃありません、古いもんで」

比田は笑いながら、机の上に伏せた本を取つて健三に渡した。それが意外にも『常山紀談』じょうざんきだんだったので健三は少し驚せろいた。それにしても自分の細君が今にも絶息しそうな勢で咳せき込んでいるのを、まるで余所事よそごとのように聴いて、こんなものを平気で読んでいられるところ

が、如何にも能くこの男の性質をあらわしていた。

「私わたしや旧弊だからこういう古い講談物が好きでしてね」

彼は『常山紀談』を普通の講談物と思っているらしかった。しかしそれを書いた湯浅常山ゆあさじょうざんを講釈師と間違えるほどでもなかった。

「やッぱり学者なんでしょうね、その男は。曲亭馬琴きょくていばきんとどっちでしょう。私や馬琴の『八犬伝はっけんでん』も持っているんだが」

なるほど彼は桐きりの本箱の中に、日本紙へ活版で刷った予約の『八犬伝』を綺麗きれいに重ね込んでいた。

「健ちゃんは『江戸名所図絵』を御持ちですか」

「いいえ」

「ありや面白い本ですね。私や大好きだ。なんなら貸して上げましょ

うか。なにしろ江戸といった昔の日本橋にほんばしや桜田さくらだがすっかり分るんだからね」

彼は床の間の上にある別の本箱の中から、美濃紙版みのがみの浅黄あさぎの表紙をした古い本を一、二冊取り出した。そうしてあたかも健三を『江戸名所図絵』の名さえ聞いた事のない男のように取扱った。その健三には子供の時分その本を蔵くらから引き摺ずり出して来て、頁ページから頁へと丹念に挿絵さしえを拾って見て行くのが、何よりの楽しみであった時代の、懐かしい記憶があった。中にも駿河町するがちようという所に描かいてある越後屋えちごやの暖簾のれんと富士山とが、彼の記憶を今代表する焼点しょうてんとなった。

「この分ではとてもその頃の悠長な心持で、自分の研究と直接関係のない本などを読んでいる暇は、薬にしたくつても出て来こまい」

健三は心のうちでこう考えた。ただ焦燥あせりに焦燥つてばかりいる今の自分が、恨めしくもありまた気の毒でもあった。

兄が約束の時間までに顔を出さないので、比田はその間を繋つなぐためか、しきりに書物の話をつづけようとした。書物の事なら何時いつまで話していても、健三にとって迷惑にならないという自信でも持っているように見えた。不幸にして彼の知識は、『常山紀談』を普通の講談ものとして考える程度であつた。それでも彼は昔し出た『風俗画報』を一冊残らず綴とじて持っていた。

本の話が尽きた時、彼は仕方なしに問題を変えた。

「もう来そうなもんですね、長ちやうさんも。あれほどいつてあるんだから忘れるはずはないんだが。それに今日は明けの日だから、遅くとも十

一時頃までには帰らなきやならないんだから。何ならちよつと迎^{むかい}に遣^やりましようか」

この時また変化が来たと見えて、火の着くように咳き入る姉の声が茶の間の方で聞こえた。

二十六

やがて門口^{かどぐち}の格子^{こうし}を開けて、沓脱^{くつぬぎ}へ下駄^{げた}を脱ぐ音がした。

「やつと来たようですぜ」と比田^{ひだ}がいった。

しかし玄関を通り抜けたその足音はすぐ茶の間へ這入^{はい}った。

「また悪いの。驚ろいた。ちつとも知らなかった。何時^{いつ}から」

短かい言葉が感投詞のようにまた質問のように、座敷に坐^{すわ}っている二人の耳に響いた。その声は比田の推察通りやっぱり健三の兄であつた。

「長さん、先刻^{さつき}から待ってるんだ」

性急な比田はすぐ座敷から声を掛けた。女房の喘息^{ぜんそく}などはどうなつても構わないといった風のその調子が、如何^{いか}にもこの男の特性をよく現わしていた。「本当に手前勝手な人だ」とみんなからいわれるだけあつて、彼はこの場合にも、自分の都合より外に何にも考えていないように見えた。

「今行きますよ」

長太郎^{ちやうたろう}も少し癪^{しゃく}だと思えて、なかなか茶の間から出て来なかつた。

「重湯おもゆでも少し飲んだら好いいでしょう。厭いや？　でもそう何にも食べな
くつちや身体からだが疲れるだけだから」

姉が息苦しくつて、受答うたえが出来かねるので、脊中せなかを撫さすっていた女
が一口ごとに適宜あいさつな挨拶をした。平生へいぜい健三よりは親しくその宅うちへ出入でいり
する兄は、見馴みなれないこの女とも近付ちかづきと見えた。そのせいか彼らの応
対は容易に尽きなかった。

比田はふりつと膨ふくれていた。朝起きて顔を洗う時のように、両手で
黒い顔をごしごし擦こすった。しまいに健三の方を向いて、小さな声でこ
んな事をいった。

「健ちゃんあれだから困るんですよ。口ばかり多くってね。こつちも
手がないから仕方なしに頼むんだが」

比田の非難は明らかに健三の見知らない女の上に投げ掛けられた。

「何ですあの人は」

「そら梳手すきての御勢おせいですよ。昔し健ちゃんの遊びあそびに来る時分、よくいたじゃありませんか、宅に」

「へええ」

健三には比田の家うちでそんな女に会った覚おぼえが全くなかった。

「知りませんね」

「なに知らない事があるもんですか、御勢だもの。あいつはね、御承知の通りまことに親切で実意のある好い女なんだが、あれだから困るんです。喋舌しゃべるのが病なんだから」

よく事情を知らない健三には、比田のいう事が、ただ自分だけに都

合のいい誇張のように聞こえるばかりで、大した感銘も与えなかった。

姉はまた咳^せき出した。その発作が一段落片付くまでは、さすがの比田も黙っていた。長太郎も茶の間を出て来なかった。

「何だか先刻^{さつき}より劇^{はげ}しいようですね」

少し不安になった健三は、そういうながら席を立とうとした。比田は一も二もなく留めた。

「なあに大丈夫、大丈夫。あれが持病なんですから大丈夫。知らない人が見るとちよつと吃驚^{びつくり}しますがね。私^{わたし}なんざあもう年来馴^なれっ子になつてゐるから平気なもんですよ。実際またあれを一々苦にしているよ
うじゃ、とても今日^{こんにち}まで一所に住んでる事は出来ませんからね」

健三は何とも答える訳に行かなかった。ただ腹の中で、自分の細君ヒステリーが歇私的里の発作に冒された時の苦しい心持を、自然の対照として描き出した。

姉の咳嗽せきが一収ひとおさまり収った時、長太郎は始めて座敷へ顔を出した。

「どうも済みません。もつと早く来るはずだったが、生憎あいにく珍らしく客があつたもんだから」

「来たか長さん待ってたほい。冗談じゃないよ。使でも出そうかと思つてたところです」

比田は健三の兄に向つてこの位な気安い口調で話の出来る地位にあつた。

二十七

三人はすぐ用談に取り掛った。比田ひだが最初に口を開ひらいた。

彼はちよつとした相談事にも仔細しさいぶる男であつた。そうして仔細ぶればぶるほど、自分の存在が周囲から強く認められると考えているらしかつた。「比田さん比田さんって、立てて置きさえすりゃ好いんだ」と皆みんなが蔭かげで笑っていた。

「時に長さんどうしたもんだろう」

「そう」

「どうもこりゃ天から筋が違ちがうんだから、健ちゃんに話をするまでもなからうと思おもうんだがね、私わたしや」

「そうさ。今更そんな事を持ち出して来たって、こっちで取り合う必要もないだろうじゃないか」

「だから私も突つ跳ねたのさ。今時分そんな事を持ち出すのは、まるで自分の殺した子供を、もう一返生かしてくれって、御寺様へ頼みに行くようなものだから御止しなさいって。だけど大將いくら何といつても、坐り込んで動かないんだからね、仕方がない。しかしあの男がああやって今頃私の宅へのんこのしゃあで遣つて来るのも、実はというと、やっぱり昔し○の関係があつたからの事さ。だってそりや昔しも昔し、ずっと昔しの話でさあ。その上ただで借りやしまいしね、：

「またただで貸す風でもなしね」

「そうさ。口じゃ親類付合だとか何とかいってゐるくせに、金にかけちゃあかの他人より阿漕あこぎなんだから」

「来た時にそういつて遣れば好いのに」

比田と兄との談話はなかなか元へ戻つて来なかつた。ことに比田は其所そこに健三のいるのさえ忘れてしまったように見えた。健三は好加減いいかげんに何とか口を出さなければならなくなつた。

「一体どうしたんです。島田がこちらへでも突然伺つたんですか」

「いやわざわざ御呼び立て申して置いて、つい自分の勝手ばかり喋しゃ舌べつて済みません。——じゃ長さん私から健ちゃんに一応その顛末てんまつを御話する事にしようか」

「ええどうぞ」

話しは意外にも単純であつた。――ある日島田が突然比田の所へ来た。自分も年を取つて頼りにするものがいないので心細いという理由の下に、^{もと}昔し通り島田姓に復歸してもらいたいからどうぞ健三にそう取り次いでくれと頼んだ。比田もその要求の突飛^{とつ}なのに驚ろいて最初は拒絶した。しかし何といつても動かないので、ともかくも彼の希望だけは健三に通じようと受合つた。――ただこれだけなのである。

「少し変ですねえ」

健三にはどう考えても変としか思われなかつた。

「変だよ」

兄も同じ意見を言葉にあらわした。

「どうせ変にや違ない、何しろ六十以上になつて、少しやきが廻つて

るからね」

「慾^{よく}でやきが廻りやしないか」

比田も兄も可笑^{おか}しように笑ったが、健三は独りその仲間へ入る事が出来なかった。彼は何時までも変だと思ふ氣分に制せられていた。彼の頭から判断すると、そんな事は到底ありようはずがなかった。彼は最初に吉田が来た時の談話を思い出した。次に吉田と島田が一所に來た時の光景を思い出した。最後に彼の留守に旅先から歸つたといつて、島田が一人で訪ねて來た時の言葉を思い出した。しかしどこをどう思い出しても、其所^{そこ}からこんな結果が生れて來^きようとは考えられなかった。

「どうしても変ですね」

彼は自分のために同じ言葉をもう一度繰り返して見た。それから漸やっと気を換えてこういった。

「しかしそりや問題にやならないでしょう。ただ断りさえすりや好いんだから」

二十八

健三の眼から見ると、島田の要求は不思議な位理に合わなかった。従ってそれを片付けるのも容易であった。ただ簡単に断りさえすれば済んだ。

「しかし一旦は貴方あなたの御耳まで入れて置かないと、私の落度わたくしになりま

すからね」と比田は自分を弁護するようにいった。彼はどこまでもこの会合を真面目なものにしなければ気が済まないらしかった。それで言う事も時によつて変化した。

「それに相手が相手ですからね。まかり間違えば何をするか分らないんだから、用心しなくっちゃいけませんよ」

「焼が廻つてゐるなら構わないじゃないか」と兄が冗談半分に彼の矛盾を指摘すると、比田はなお真面目になった。

「焼が廻つてゐるから怖いんです。なに先が当り前の人間なら、私わたしだつてその場ですぐ断つちまいますさあ」

こんな曲折は会談中に時々起つたが、要するに話は最初に戻つて、つまり比田が代表者として島田の要求を断るという事になった。それ

は三人が三人ながら始めから予期していた結局なので、其所^{そこ}へ行き着くまでの筋道は、健三から見ると、むしろ時間の空費に過ぎなかった。しかし彼はそれに対して比田に礼を述べる義理があつた。

「いえ何御礼なんぞ御仰^{おつしや}られると恐縮します」といった比田の方はかえつて得意であつた。誰が見ても宅^{うち}へも帰らずに忙がしがっている人の様子とは受取れないほど、調子づいて来た。

彼は其所にある塩煎餅^{しおせんべい}を取つてやたらにぼりぼり噛^かんだ。そうしてその相間^{あいま}々々には大きな湯呑^{ゆのみ}へ茶を何杯も注^つぎ易^かえて飲んだ。

「相変らず能^よく食べますね。今でも鰻飯^{うなぎめし}を二つ位遣^やるんでしよう」

「いや人間も五十になるともう駄目ですね。もとは健ちゃんの見ている前で天^そふら蕎麦^{そば}を五杯位^{ごはい}ぺろりと片付けたもんでしたかね」

比田はその頃から食氣くいけの強い男であつた。そうして余計食うのを自慢おごりにしていた。それから腹の太いのを賞めほられたがつて、時機さえあれば始終叩たたいて見せた。

健三は昔しこの人に連れられて寄席よせなどに行つた歸りに、能く二人して屋台店やたいみせの暖簾のれんを潜くぐつて、鮎すしや天麩羅てんぷらの立食たちぐいをした當時を思い出した。彼は健三にその寄席で聴いたしかおどりとかいう三味線しゃみせんの手を教えたり、またはさばさばを読むという隠語などを習い覚えさせたりした。

「どうもやっぱり立食に限るようですね。私もこの年になるまで、段々方々食つて歩いて見たが。健ちゃん、一遍輕井沢かるいざわで蕎麦を食つて御覽ごらんなさい、騙だまされたと思つて。汽車の停とまつてるうちに、降りて食うんです、プラットフォームの上へ立つてね。さすが本場だけあつて旨うま

うがすぜ」

彼は信心を名として能く方々遊び廻る男であつた。

「それよか、善光寺ぜんこうじの境内けいだいに元祖藤八拳指南所とうはちけんという看板が懸つていたには驚ろいたね、長さん」

「這入はいつて一つ遣つて来やしないか」

「だつて束修そくしゅうが要いるんだからね、君」

こんな談話を聞いていると、健三も何時か昔の我に歸つたような心持になつた。同時に今の自分が、どんな意味で彼らから離れてどこに立っているかも明らかに意識しなければならなくなつた。しかし比田は一向そこに気が付かなかつた。

「健ちゃんはたしか京都へ行つた事がありますね。彼所あそこに、ちん・ちん・

でんき皿^も持てこ汁飲ましょって鳴く鳥がいるのを御存じですか」などと訊^きいた。

先刻^{さつき}から落付^{おちつ}いていた姉が、また劇^{はげ}しく咳^せき出した時、彼は漸^{ようや}く口を閉じた。そうしてさもくさくさしたといわぬばかりに、左右の手の平を揃^{そろ}えて、黒い顔をごしごし擦^{こす}った。

兄と健三はちよつと茶の間の様子を覗^{のぞ}きに立った。二人とも発作の静まるまで姉の枕元^{すわ}に坐っていた後で、別々に比田の家を出た。

二十九

健三は自分の背後にこんな世界の控えている事を遂に忘れることが

出来なくなつた。この世界は平生へいぜいの彼にとって遠い過去のものであつた。しかしいざという場合には、突然現在に变化しなければならぬ性質を帯びていた。

彼の頭には願がんにんぼうず仁坊主に似た比田いがりあたまの毬栗頭が浮いたり沈んだりした。猫のように願あごの詰つた姉の息苦しく喘あえいでいる姿が薄暗く見えた。血の気の竭つきかけた兄に特有なひすばった長い顔も出たり引込ひっこんだりした。

昔しこの世界に人となつた彼は、その後自然の力でこの世界から独り脱け出してしまった。そうして脱け出したまま永く東京の地を踏まなかつた。彼は今再びその中へ後戻りをして、久しぶりに過去の臭においを嗅かいだ。それは彼に取つて、三分の一の懐かしさと、三分の二の厭いやら

しさとを齎^{もたら}す混合物であつた。

彼はまたその世界とはまるで関係のない方角を眺めた。すると其所^{そこ}には時々彼の前を横切る若い血と輝いた眼を有^もつた青年がいた。彼はその人々の笑いに耳を傾むけた。未来の希望を打ち出す鐘のように朗かなその響が、健三の暗い心を躍^{おど}らした。

或日^{ある日}彼はその青年の一人に誘われて、池^{いけ}の端^{はた}を散歩した歸りに、広^{ひろ}小路^{こうじ}から切通^{きりどお}しへ抜ける道を曲つた。彼らが新らしく建てられた見番^{けんばん}の前へ来た時、健三はふと思ひ出したように青年の顔を見た。

彼の頭の中には自分とまるで縁故のない或女の事^{こと}が閃^{ひらめ}いた。その女は昔し芸者をしていた頃人を殺した罪で、二十年^{あま}余^りも牢屋^{ろうや}の中で暗い月日を送つた後^{あと}、漸^{やっ}と世の中へ顔を出す事が出来るようになったので

ある。

「さぞ辛いだろう」

容色きりようを生命とする女の身になったら、殆んど堪えられない淋しみさびが其所そこにあるに違ないと健三は考えた。しかしいくらでも春が永く自分の前に続いているとしか思わない伴つれの青年には、彼の言葉が何ほどの効果にもならなかった。この青年はまだ二十三、四であつた。彼は始めて自分と青年との距離を悟って驚ろいた。

「そういう自分もやつぱりこの芸者と同じ事なのだ」

彼は腹の中で自分と自分にこういい渡した。若い時から白髪たちの生えたる性質の彼の頭には、気のせいか近頃めつきり白い筋が増して来た。自分はまだまだだと思っっているうちに、十年は何時の間にか過ぎ

た。

「しかし他事^{ひとごと}じゃないね君。その実僕も青春時代を全く牢獄の裡^{うち}で暮したのだから」

青年は驚ろいた顔をした。

「牢獄とは何です」

「学校さ、それから図書館さ。考えると両方ともまあ牢獄のようなものだね」

青年は答えなかった。

「しかし僕がもし長い間の牢獄生活をつづけなければ、今日^{こんにち}の僕は決して世の中に存在していないんだから仕方がない」

健三の調子は半ば弁解的であつた。半ば自嘲^{じちようてき}的であつた。過去の牢

獄生活の上に現在の自分を築き上げた彼は、その現在の自分の上に、是非とも未来の自分を築き上げなければならなかった。それが彼の方針であつた。そうして彼から見ると正しい方針に違なかつた。けれどもその方針によつて前へ進んで行くのが、この時の彼には徒らに老ゆるという結果より外に何物をも持ち来さないように見えた。

「学問ばかりして死んでしまつても人間は詰らないね」

「そんな事はありません」

彼の意味はついに青年に通じなかつた。彼は今の自分が、結婚当時の自分と、どんなに變つて、細君の眼に映るだろうかを考えながら歩いた。その細君はまた子供を生むたびに老けて行つた。髪の毛なども気の引けるほど抜ける事があつた。そうして今は既に三番目の子を胎

内に宿していた。

三十

家へ帰ると細君は奥の六畳に手枕てまくらをしたなり寐ねていた。健三はその傍そばに散らばっている赤い片端きれはしだの物指ものさしだの針箱だのを見て、またかという顔をした。

細君はよく寐る女であつた。朝もことによると健三より遅く起きた。健三を送り出してからまた横になる日も少なくなかつた。こうしてあくまで眠りを貪むさぼらないと、頭が痺しびれたようになって、その日一日何事をしてはつきりも判然しないというのが、常に彼女の弁解であつた。

健三はあるいはそうかも知れないと思ったり、またはそんな事があるものかと考えたりした。ことに小言をいittaあとで、寐られるときは、後の方の感じが強く起った。

「不貞寐ふてねをするんだ」

彼は自分の小言が、歇私ヒステリー的里性の細君しやうに対して、どう反応するか

を、よく観察してやる代りに、単なる面当つらあてのために、こうした不自然

の態度を彼女が彼に示すものと解釈して、苦々しい囁ささやきを口の内もで洩

らす事がよくあつた。

「何故なぜ夜早く寐ないんだ」

彼女は宵っ張であつた。健三にこういわれる度に、夜は眼が冴さえて寐られないから起きているのだという答弁をきつとした。そうして自

分の起きていたい時までには必ず起きて縫物の手をやめなかった。

健三はこうした細君の態度を悪にくんだ。同時に彼女の歇ヒステリー私的里を恐れた。それからもしや自分の解釈が間違っているまいかという不安にも制せられた。

彼は其所そこに立ったまま、しばらく細君の寐顔を見詰めていた。肱ひじの上に載せられたその横顔はむしろ蒼白あおしろかった。彼は黙って立っていた。御住おすみという名前さえ呼ばなかった。

彼はふと眼を転じて、あらわな白い腕かいなの傍に放り出された一束ひとたばの書かき物ものに気を付けた。それは普通の手紙の重なり合ったものでもなければ、また新らしい印刷物を一纏ひとまとめに括くくったものとも見えなかった。惣体そうたいが茶色がかって既に多少の時代を帯びている上に、古風なかんじん撚より

で丁寧な結び目がしてあった。その書ものの一端は、殆んど細君の頭の下に敷かれていると思われる位、彼女の黒い髪で、健三の目を遮ぎっていた。

彼はわざわざそれを引き出して見る気にもならず、また眼を蒼白い細君の額の上に注いだ。彼女の頬は滑り落ちるようにこけていた。

「まあ御痩せなすった事」

久しぶりに彼女を訪問した親族のある女は、近頃の彼女の顔を見て驚ろいたように、こんな評を加えた事があった。その時健三は何故だかこの細君を痩せさせた凡ての源因が自分一人にあるような心持がした。

彼は書斎に入った。

三十分も経ったと思う頃、門口かどぐちを開ける音がして、二人の子供が外から帰って来た。坐すわっている健三の耳には、彼らと子守との問答が手に取るように聞こえた。子供はやがて馳かけ込むように奥へ入った。其所ではまた細君が蒼蠅うるさいといって、彼らを叱しかる声がした。

それからしばらくして細君は先刻さつき自分の枕元にあつた一束の書ものを手に持ったまま、健三の前にあらわれた。

「先ほど御留守に御兄おあにいさんがいらっしやいましたね」

健三は万年筆の手を止めて、細君の顔を見た。

「もう帰ったのかい」

「ええ。今ちよつと散歩に出掛ましたから、もうじき帰りましようつて御止めしたんですけれども、時間がないからつて御上りおあがになりませ

んでした」

「そうか」

「何でも谷中^{やなか}に御友達とかの御葬式があるんですって。それで急いで行かないと間に合わないから、上っ^{おっし}ていられないんだと仰^{おつし}やいました。しかし帰りに暇があつたら、もしかすると寄るかも知れないから、帰つたら待つてゐるようにいつてくれって、いい置いていらつしやいました」

「何の用なのかね」

「やっぱりあの人の事なんだそうです」

兄は島田の事で来たのであつた。

三十一

細君は手に持った書付かきつけの束を健三の前に出した。

「これを貴夫あなたに上げてくれと仰おつしゃいました」

健三は怪訝けげんな顔をしてそれを受取った。

「何だい」

「みんなあの人に関係した書類なんだそうです。健三に見せたら参考になるだろうと思って、用筆筒ようだんすの抽匣ひきだしの中にしまって置いたのを、今日きよ日出うして持って来たって仰おつしやいました」

「そんな書類があつたのかしら」

彼は細君から受取った一括ひとくくりの書付を手に載せたまま、ぼんやり時

代の付いた紙の色を眺めた。それから何も意味なしに、裏表を引繰返して見た。書類は厚さにしてほぼ二寸すんもあつたが、風の通らない湿気しっけた所に長い間放り込んであつたせい、虫に食われた一筋の痕あとが偶然健三の眼を懐古的にした。彼はその不規則な筋を指の先でざらざら撫なでて見た。けれども今更鄭寧ていねいに絡からげたかんじん撚よりの結び目を解ほどいて、一々中を検あらためる氣も起らなかつた。

「開けて見たって何が出て来るものか」

彼の心はこの一句でよく代表されていた。

「御父さまが後々のちのちのためにちゃんと一纏めひとまとにして取おつて御置おおきになつたんですって」

「そうか」

健三は自分の父の分別と理解力に対して大した尊敬を払っていなかった。

「おやじの事だからきつと何でもかんでも取って置いたんだろう」

「しかしそれもみんな貴夫に対する御親切からなんでしょう。あんな奴だから己おれのいなくなった後のちに、どんな事をいって来ないとも限らない、その時にはこれが役に立つって、わざわざ一纏めにして、御兄おあにいさんに御渡になったんだそうですよ」

「そうかね、己は知らない」

健三の父は中気で死んだ。その父のまだ達者でいるずっと前から、彼はもう東京にいなかった。彼は親の死目しにめにさえ会わなかった。こんな書付が自分の眼に触れないで、長い間兄の手元に保管されていたの

も、別段の不思議ではなかった。

彼は漸ようやく書類の結目を解といて一所に重なっているものを、一々ほごし始めた。手続き書と書いたものや、取り替かわせ一札の事と書いたものや、明治二十一年子ね一月約定金請取の証と書いた半紙二つ折の帳面やらが順々にあらわれて来た。その帳面のしまいには、右本日受取うけとり右月賦金は皆済相成候事と島田の手蹟で書いて黒い判がべたりと捺おしてあつた。

「おやじは月々三円か四円ずつ取られたんだな」

「あの人にですか」

細君はその帳面を逆さまに覗のぞき込んでいた。

「しめめていくらになるかしら。しかしこの外にまだ一時に遣やつたものが

あるはずだ。おやじの事だから、きつとその受取を取って置いたに違ない。どこかにあるだろう」

書付はそれからそれへと続々出て来た。けれども、健三の眼にはどれもこれもごちゃごちゃして容易に解らなかった。彼はやがて四つ折にして一纏めに重ねた厚みのあるものを取り上げて中を開いた。

「小学校の卒業証書まで入れてある」

その小学校の名は時によって変っていた。一番古いものには第一大学区第五中学区第八番小学などという朱印が押してあった。

「何ですかそれは」

「何だか己も忘れてしまった」

「よっぽど古いものね」

証書のうちには賞状も二、三枚交まじっていた。昇のぼり竜と降くだり竜で丸い輪廓りんかくを取った真中に、甲科と書いたり乙科と書いたりしてある下に、いつも筆墨紙と横に断つてあつた。

「書物も貰もらった事があるんだがな」

彼は『勸善訓蒙かんぜんくんもう』だの『輿地誌略よちしりやく』だのを抱いて喜びの余り飛んで宅うちへ帰った昔を思い出した。御褒美ごほうびをもらう前の晩夢に見た蒼あおい竜と白い虎の事も思い出した。これらの遠いものが、平生へいぜいと違つて今の健三には甚だ近く見えた。

細君にはこの古臭い免状がなおの事珍らしかった。夫の一旦^{いったん}下へ置いたのをまた取り上げて、一枚々々鄭寧^{ていねい}に剥繰^{はぐ}って見た。

「変ですわね。下等小学第五級だの六級だのつて。そんなものがあつたんでしうか」

「あつたんだね」

健三はそのまま外^{ほか}の書付^{かきつけ}に手を着けた。読みにくい彼の父の手蹟が大いに彼を苦しめた。

「これを御覧、とても読む勇氣がないね。ただでさえ判明^{わか}らないところへ持つて来て、むやみに朱を入れたり棒を引いたりしてあるんだから」

健三の父と島田との懸合^{かけあい}について必要な下書^{したがき}らしいものが細君の手

に渡された。細君は女だけあって、綿密にそれを読み下した。

「貴夫あなたの御父さまはあの島田って人の世話をなすった事があるのね」

「そんな話は己おれも聞いてはいるが」

「此所ここに書いてありますよ。——同人幼少つとめむきにて勤向相成りがたく当方とうかたへ引き取り五カ年間養育致候縁合そろえんあいを以てと」

細君の読み上げる文章は、まるで旧幕時代の町人まちぶぎようが町奉行か何かへ出す訴状のように聞こえた。その口調に動かされた健三は、自然古風な自分の父を眼の前に髣髴ほうふつした。その父から、將軍の鷹狩たかがりに行く時の模様などを、それ相当の敬語で聞かされた昔も思い合された。しかし事実の興味が主として働らきかけている細君の方ではまるで文体などに頓着とんじゃくしなかった。

「その縁故で貴夫はあの人の所へ養子に遣^やられたのね。此所にそう書いてありますよ」

健三は因果な自分を自分で憐^{あわ}れんだ。平氣な細君はその続きを読み出した。

「右健三三歳のみぎり養子に差遣^{さしつかわ}し置候^{おきそろ}処平吉儀妻常と不和を生じ、遂に離別と相成候につき当時八歳の健三を当方へ引き取り今日^{こんにち}まで十四力年間養育致し、——あとは真^ま赤^{つか}でごちやごちやして読めないわね」

細君は自分の眼の位置と書付の位置とを色々に配合して後を読もうと企てた。健三は腕組をして黙って待っていた。細君はやがてくすくす笑い出した。

「何が可笑おかしいんだ」

「だって」

細君は何にもいわずに、書付を夫の方に向け直した。そうして人さし指の頭で、細かく割註わりちゆうのように朱で書いた所を抑えた。

「ちよつと其所そこを読んで御覧なさい」

健三は八の字を寄せながら、その一行を六むずかしそうに読み下した。

「取扱い所勤務中遠山藤とおやまふじと申す後家ごけへ通じ合い候そうろうが事の起り。――何だ下らない」

「しかし本当なんでしょう」

「本当は本当さ」

「それが貴夫の八ツの時なのね。それから貴夫は御自分の宅^{うち}へ御歸り
になつた訳ね」

「しかし籍を返さないんだ」

「あの人が？」

細君はまたその書付を取り上げた。読めない所はそのままにして置いて、読める所だけ眼を通して、自分のまだ知らない事実が出て来るだろうという興味が、少なからず彼女の好奇心を唆^{そそ}つた。

書付のしまいの方には、島田が健三の戸籍を元通りにして置いて実家へ返さないのみならず、いつの間にか戸主に改めた彼の印形^{いんぎよう}を濫用^{らんよう}して金を借り散らした例などが挙げてあつた。

いよいよ手を切る時に養育料として島田に渡した金の証文も出て来

た。それには、しかる上は健三離縁本籍と引替に当金——円御渡し被^{くだ}下、^{され}残金——円は毎月^{まいげつ}三十日限り月賦にて御差入^{おさしいれ}のつもり御対談^{うんぬん}云々と長たらしく書いてあつた。

「凡^{すべ}て変^{へん}挺^{てこ}な文句ばかりだね」

「親類取扱人比田寅八^{ひだとらはち}つて下に印が押してあるから、大方比田さんでも書いたんでしよう」

健三はついこの間会つた比田の万事に心得顔な様子と、この証文の文句とを引き比べて見た。

葬式の歸りに寄るかも知れないといった兄は遂に顔を見せなかった。

「あんまり遅くなったから、すぐ御歸りになったんでしよう」

健三にはその方が便宜であつた。彼の仕事は前の日か前の晩を潰して調べたり考えたりしなければ義務を果す事の出来ない性質のものであつた。従つて必要な時間を他に食ひ削られるのは、彼に取つて甚しい苦痛になつた。

彼は兄の置いて行つた書類をまた一纏めにして、元のかんじん撚で括ろうとした。彼が指先に力を入れた時、そのかんじん撚はぷつりと切れた。

「あんまり古くなつて、弱つたのね」

「まさか」

「だって書付の方は虫が食つてゐる位ですもの、貴夫^{あなた}」

「そういえばそうかも知れない。何しろ抽斗^{ひきだし}に投げ込んだなり、今日^{こんにち}まで放つて置いたんだから。しかし兄貴も能く^{よく}まあこんなものを取つて置いたものだね。困つちや何でも売るくせに」

細君は健三の顔を見て笑い出した。

「誰も買い手がないでしょう。そんな虫の食つた紙なんか」

「だがさ。能く^{よく}紙屑籠^{かみくずかご}の中へ入れてしまわなかつたという事さ」

細君は赤と白で撚つた細い糸を火鉢^{ひばち}の抽斗^{ひきだし}から出して来て、其所^{そこ}に置かれた書類を新らしく絡^{から}げた上、それを夫に渡した。

「己^{おれ}の方にやしまつて置く所がないよ」

彼の周囲は書物で一杯になっていた。手文庫には文殻ふみがらとノートがぎっしり詰っていた。空地くうちのあるのは夜具蒲団やぐふとんのしまつてある一間の戸棚だけであつた。細君は苦笑して立ち上つた。

「御兄おあにいさんは二、三日うちきつとまたいらつしやいますよ」

「あの事でかい」

「それもそうですけれども、今日御葬式きようにいらつしやる時に、袴はかまが要るから借してくれつて、此所ここで穿はいていらしたんですもの。きつとまた返しにいらつしやるに極きまつていますわ」

健三は自分の袴を借りなければ葬式の供に立てない兄の境遇を、ちよつと考えさせられた。始めて学校を卒業した時彼はその兄から貰もらつたべろべろの薄羽織うすばおりを着て友達と一所に池いけの端はたで写真を撮つた事

をまだ覚えていた。その友達の一人が健三いちにんに向つて、この中で一番先に馬車へ乗るものは誰たれだろうといった時に、彼は返事をしないで、ただ自分の着ている羽織を淋さびしそうに眺めた。その羽織は古い紹ろの紋付に違なかつたが、悪くいえば申し訳のために破けずにいる位な見すばらしい程度のものであつた。懇意な友人の新婚披露ひろうに招かれて星ほしが岡おかの茶寮さりように行った時も、着るものがないので、袴羽織とも凡すべて兄のを借りて間に合せた事もあつた。

彼は細君の知らないこんな記憶を頭の中に呼び起した。しかしそれは今の彼を得意にするよりもかえつて悲しくした。今昔こんじやくの感——そういう在来ありきたりの言葉で一番よく現せる情緒が自然と彼の胸に湧わいた。

「袴位ありそうなものだがね」

「みんな長い間に失くして御しまいなすったんでしよう」

「困るなあ」

「どうせ宅うちにあるんだから、要る時に貸して上げさいすりやそれで好いでしよう。毎日使うものじゃなし」

「宅にある間はそれで好いがね」

細君は夫に内所ないしょで自分の着物を質に入れたついこの間の事件を思い出した。夫には何時自分が兄と同じ境遇に陥らないものでもないという悲観的な哲学があつた。

昔の彼は貧しいながら一人で世の中に立っていた。今の彼は切り詰めた余裕のない生活をしている上に、周囲のものからは、活力の心棒のように思われていた。それが彼には辛かった。自分のようなものが

親類中で一番好くなっていると考えられるのはなおさら情なかつた。なさけ

三十四

健三の兄は小役人であつた。彼は東京の真中にある或ある大きな局へ勤めていた。その宏壯こうそうな建物のなかに永い間憐あわれな自分の姿を見出す事が、彼には一種の不調和に見えた。

「僕なんぞはもう老朽なんだからね。何しろ若くつて役に立つ人が後から後からと出て来るんだから」

その建物のなかには何百という人間が日となく夜よとなく烈はげしく働いていた。氣力の尽きかけた彼の存在はまるで形のない影のようなも

のに違なかつた。

「ああ厭だ^{いや}」

活動を好まない彼の頭には常にこんな觀念が潜んでいた。彼は病身であつた。年齒^{とし}より早く老けた。年齒より早く干乾^{ひから}びた。そうして色^{いろ}沢^{つや}の悪い顔をしながら、死ににでも行く人のように働いた。

「何しろ夜寐^ねないんだから、身体^{からだ}に障^さってね」

彼はよく風邪^{かぜ}を引いて咳嗽^{せき}をした。ある時は熱も出た。するとその熱が必ず肺病の前兆でなければならぬように彼を脅かした。

實際彼の職業は強壯な青年にとつても苦しい性質のものに違なかつた。彼は隔晩に局へ泊らせられた。そうして夜通し起きて働らかなければならなかつた。翌日^{あくるひ}の朝彼はぼんやりして自分の宅^{うち}へ歸つて来

た。その日一日は何をする勇氣もなく、ただぐたりと寐て暮らす事さえあつた。

それでも彼は自分のためまた家族のために働らくべく余儀なくされた。

「今度は少し危険いようだから、誰かに頼んでくれないか」

改革とか整理とかいう噂うわさのあるたびに、健三はよくこんな言葉を彼の口から聞かされた。東京を離れている時などは、わざわざ手紙で依頼して来た事も一返や二返ではなかった。彼はその都度つど誰それにといて、わざわざ要路の人を指名した。しかし健三にはただ名前が知れているだけで、自分の兄の位置を保証してもらうほどの親しみのあるものは一人もなかった。健三は頬杖ほおづえを突いて考えさせられるばかり

であつた。

彼はこうした不安を何度となく繰り返しながら、昔時から今日まで同じ職務に従事して、動きもしなければ発展もしなかった。健三よりも七つばかり年上の彼の半生は、あたかも変化を許さない器械のようなもので、次第に消耗して行くより外には何の事実も認められなかった。

「二十四、五年もあんな事をしている間には何か出来そうなものだがね」

健三は時々自分の兄をこんな言葉で評したくなつた。その兄の派出好で勉強嫌であつた昔も眼の前に見えるようであつた。三味線を弾いたり、一絃琴を習つたり、白玉を丸めて鍋の中へ放り込んだり、寒天

を煮て切溜きりだめで冷したり、凡すべての時間はその頃の彼に取って食う事と遊ぶ事ばかりに費やされていた。

「みんな自業自得だといえ、まあそんなものさね」

これが今の彼の折々他ひとに洩もらす述懐になる位彼は怠け者であつた。

兄弟が死に絶えた後あと、自然健三の生家の跡を襲つぐようになった彼は、父が亡くなるのを待つて、家屋敷をすぐ売り払つてしまった。それで元からある借金を済なして、自分は小さな宅うちへ這入はいつた。それから其所そこに納まり切らない道具類を売払つた。

間もなく彼は三人の子の父になった。そのうちで彼の最も可愛かあいがつていた惣領そうりょうの娘が、年頃になる少し前から悪性の肺結核に罹かかつたので、彼はその娘を救うために、あらゆる手段を講じた。しかし彼のな

し得る凡ては残酷な運命に対して全くの徒勞に歸した。二年越煩った後で彼女が遂に斃れた時、彼の家の箆笥はまるで空になっていた。儀式に要る袴は無論、ちよつとした紋付の羽織さえなかった。彼は健三の外国で着古した洋服を貰って、それを大事に着て毎日局へ出勤した。

三十五

二、三日経って健三の兄は果して細君の予想通り袴を返しに來た。「どうも遅くなって御氣の毒さま。有難う」

彼は腰板の上に双方の端を折返して小さく畳んだ袴を、風呂敷の中

から出して細君の前に置いた。大の見栄坊で、ちよつとした包物を持つのも厭いやがった昔に比べると、今の兄は全く色気が抜けていた。その代り膏あぶら気もなかった。彼はぱさぱさした手で、汚れた風呂敷の隅を抓つまんで、それを鄭寧ていねいに折った。

「こりゃ好い袴だね。近頃拵こしらえたの」

「いいえ。なかなかそんな勇氣はありません。昔からあるんです」

細君は結婚のときこの袴を着けて勿体もったいらしく坐すわった夫の姿を思いだした。遠い所で極簡略ごくに行われたその結婚の式に兄は列席していなかった。

「へええ。そうかね。なるほどそういわれるとどこかで見たような気もするが、しかし昔のものはやっぱり丈夫なんだね。ちつとも敗いたんで

いないじゃないか」

「滅多に穿^はかないんですもの。それでも一人でいるうちに能^よくそんな物を買う気になれたのね、あの人が。私^{わたくし}今でも不思議だと思っていますわ」

「あるいは婚礼の時に穿くつもりでわざわざ拵えたのかも知れないね」

二人はその時の異様な結婚式について笑いながら話し合った。

東京からわざわざ彼女を伴^つれて来た細君の父は、娘に振袖^{ふりそで}を着せながら、自分は一通りの礼装さえ調^{ととの}えていなかった。セルの単衣^{ひとえ}を着流し^{あぐら}のままでは胡坐^{あぐら}さえ搔^かいた。婆^{ばあ}さん一人より外に誰も相談する相手のない健三の方ではなおの事困った。彼は結婚の儀式につい

て全くの無方針であつた。もともと東京へ歸つてから貰うという約束があつたので、媒酌人もその地にはいなかった。健三は参考のためこの媒酌人が書いて送つてくれた注意書のようなものを読んで見た。それは立派な紙に楷書で認められた厳めしいものには違なかつたが、中には『東鑑』などが例に引いてあるだけで、何の実用にも立たなかつた。

「雌蝶も雄蝶もあつたもんじやないのよ貴方。だいち御盃の縁が欠けているんですもの」

「それで三々九度を遣つたのかね」

「ええ。だから夫婦中がこんなにがたぴしするんでしょう」

兄は苦笑した。

「健三もなかなかの気^き六^むずかしやだから、御住^{おすみ}さんも骨が折れるだろう」

細君はただ笑っていた。別段兄の言葉に取り合う気色^{けしき}も見えなかった。

「もう帰りそうなものですがね」

「今日は待ってて例の事件を話して行かなくっちゃあ、……」

兄はまだその後をいおうとした。細君はふいと立って茶の間へ時計を見に這^{はい}入^いった。其所^{そこ}から出て来た時、彼女はこの間の書類を手にしていた。

「これが要^いるんでしよう」

「いえそれはただ参考までに持って来たんだから、多分要るまい。も

う健三に見せてくれたんでしょう」

「ええ見せました」

「何とってたかね」

細君は何とも答えようがなかった。

「随分沢山色々な書付が這入っていますわね。この中には」

「御父さんが、今に何か事があるといけないうて、丹念に取って置いたんだから」

細君は夫から頼まれてその中の最も大切らしい一部分を彼のため^{うち}に代読した事はいわなかった。兄もそれぎり書類について語らなくなつた。二人は健三の帰るまでの時間をただの雑談に費やした。その健三は約三十分ほどして帰って来た。

三十六

彼が何時もの通り服装を改めて座敷へ出た時、赤と白と撚り合せた細い糸で括られた例の書類は兄の膝の上にあった。

「先達ては」

兄は油気の抜けた指先で、一度解きかけた糸の結び目を元の通りに締めた。

「今ちよつと見たらこの中には君に不必要なものが紛れ込んでいるね」

「そうですか」

この大事そうにしまい込まれてあつた書付に、兄が長い間眼を通さ

なかつた事を健三は知つた。兄はまた自分の弟がそれほど熱心にそれを調べていない事に気が付いた。

「御由およしの送籍願が這入つてゐるんだよ」

御由というのは兄の妻さいの名であつた。彼がその人と結婚する當時に必要なであつた区長宛の願書が其所そこから出て来きようとは、二人とも思いがけなかつた。

兄は最初の妻さいを離別した。次の妻に死なれた。その二度目の妻が病氣の時、彼は大きく心配の様子もなく能く出歩いた。病症が悪阻つわりだから大丈夫という安心もあるらしく見えたが、容体ようたいが險悪になつて後、彼は依然としてその態度を改める様子がなかつたので、人はそれを氣に入らない妻つまに対する仕打とも解釈した。健三もあるいはそうだ

ろうと思つた。

三度目の妻を迎える時、彼は自分から望みの女を指名して父の許諾を求めた。しかし弟には一言の相談もしなかった。それがため我の強い健三の、兄に対する不平が、罪もない義姉の方にまで影響した。彼は教育も身分もない人を自分の姉と呼ぶのは厭だと主張して、気の弱い兄を苦しめた。

「なんて捌けない人だろう」

陰で批評の口にするこうした言葉は、彼を反省させるよりもかえつて頑固にした。習俗を重んずるために学問をしたような悪い結果に陥つて自ら知らなかった彼には、とにかく自分の不見識を認めて見識と誇りたがる弊があつた。彼は慚愧の眼をもつて当時の自分を回顧し

た。

「送籍願が紛れ込んでいるなら、それを御返しするから、持って行ったら好いでしょう」

「いいえ写しだから、僕も要らないんだ」

兄は紅白の糸に手も触れなかった。健三はふとその日附が知りたくなつた。

「一体何時頃でしたかね。それを区役所へ出したのは」

「もう古い事さ」

兄はこれだけいったぎりであつた。その唇には微笑の影が差した。

最初も二返目も失敗しくじつて、最後にやっと自分の氣に入つた女と一所になつた昔を忘れるほど、彼は耄碌もろろくしていなかつた。同時にそれを口へ

出すほど若くもなかった。

「御幾年おいくつでしたかね」と細君が訊きいた。

「御由ですか。御由は御住さんおすみと一つ違ちがいですよ」

「まだ御若いのね」

兄はそれには何とも答えずに、先刻から膝ひざの上に置いた書類の帯を急に解き始めた。

「まだこんなものが這入はいっていたよ。これも君にや関係のないものだ。さつき見て僕もちよいと驚ろいたが、こら」

彼はごたごたした故紙の中から、何の雑作もなく一枚の書付を取り出した。それは喜代子きよこという彼の長女の出産届の下書であつた。「右者みぎ本月はほんげつ二十三日午前十一時五十分出生致しゅうしやうし候そう」という文句の、「本月

二十三日」だけに棒が引懸けて消してある上に、虫の食った不規則な線が筋違すじかいに入っていた。

「これも御父おとつさんの手蹟てだ。ねえ」

彼はその一枚の反故ほごを大事らしく健三の方へ向け直して見せた。

「御覧、虫が食ってるよ。尤もっともそのはずだね。出産届ばかりじゃない、もう死亡届まで出ているんだから」

結核で死んだその子の生年月を、兄は口のうちに静かに読んでいた。

兄は過去の人であつた。華美な前途はもう彼の前に横わつていなかった。何かに付けて後を振り返りがちな彼と対坐している健三は、自分の進んで行くべき生活の方向から逆に引き戻されるような気がした。

「淋しいな」

健三は兄の道伴になるには余りに未来の希望を多く持ち過ぎた。そのくせ現在の彼もかなりに淋しいものに違なかつた。その現在から順に推した未来の、当然淋しかるべき事も彼にはよく解つていた。

兄はこの間の相談通り島田の要求を断つた旨を健三に話した。しかしどんな手続きでそれを断つたのか、また先方がそれに対してどんな挨拶をしたのか、そういう細かい点になると、全く要領を得た返事を

しなかった。

「何しろ比田^{ひだ}からそういつて来たんだから慥^{たしか}だろう」

その比田が島田に会いに行つて話を付けたとも、または手紙で会見の始末を知らせて遣^やつたとも、健三には判明^{わか}らなかった。

「多分行つたんだろうと思うがね。それともあの人の事だから、手紙だけで済ましてしまつたのか。其所^{そこ}はつい聴いて来るのを忘れたよ。

尤^{もつと}もあの後一返姉^{ごぺん}さんの見舞かたがた行つた時にや、比田が相変らず留守だったので、つい会う事が出来なかつたのさ。しかしその時姉さんの話じゃ、何でも忙がしいんで、まだそのままにしてあるようだつていつてたがね。あの男も随分無責任だから、ことによると行かないのかも知れないよ」

健三の知っている比田も無責任の男に相違なかった。その代り頼むと何でも引き受ける性質たちであつた。ただ他ひとから頭を下げて頼まれるのが嬉うれしくつて物を受合いたがる彼は、頼み方が氣に入らないと容易に動かなかつた。

「しかしこんだの事なんざあ、島田がじかに比田の所へ持ち込んだんだからねえ」

兄は暗あんに比田自身が先方へ出向いて話し合を付けなければ義理の悪いような事をいった。そのくせ彼はこんな場合に決して自分で懸合かけあいごと事などに掛ける人ではなかつた。少し氣を遣つかわなければならぬ面倒が起ると必ず顔を背けた。そうして事情の許す限り凝じつと辛防しんぼうして独り苦しんだ。健三にはこの矛盾が腹立たしくも可笑おかしくもない代りに何

となく気の毒に見えた。

「自分も兄弟だから他ひとから見たらどこか似ているのかも知れない」

こう思うと、兄を気の毒がるのは、つまり自分を気の毒がるのと同じ事にもなった。

「姉さんはもう好いいんですか」

問題を変えた彼は、姉の病気について経過を訊たずねた。

「ああ。どうも喘息ぜんそくつてものは不思議だねえ。あんなに苦しんでいても直癒じきなおるんだから」

「もう話が出来ますか」

「出来るどころか、なかなか能く喋しゃべ舌しやべつてね。例の調子で。——姉さんの考じゃ、島田は御縫おぬいさんの所へ行つて、智慧ちえを付けられて来たん

だろうっていうんだがね」

「まさか。それよりあの男だからあんな非常識な事をいって来るのだと解釈する方が適当でしょう」

「そう」

兄は考えていた。健三は馬鹿らしいという顔付をした。

「でなければね。きつと年を取って皆なから邪魔にされるんだろうって」

健三はまだ黙っていた。

「何しろ淋^{さむ}しいには違^{ちが}ないんだね。それもあいつの事だから、人情で淋^よしいんじゃない、慾^{よく}で淋^よしいんだ」

兄はお縫さんの所から毎月彼女の母の方へ手宛^{てあて}が届く事をどうして

か知っていた。

「何でも金鵄勲章の年金か何かを御藤さんが貰ってるんだとき。だから島田もどこからか貰わなくっちゃ淋しくって堪らなくなったんだろうよ。何しろあの位慾張ってるんだから」

健三は慾で淋しがってる人に対して大した同情も起し得なかった。

三十八

事件のない日がまた少し続いた。事件のない日は、彼に取って沈黙の日に過ぎなかった。

彼はその間に時々己れの追憶を辿るべく余儀なくされた。自分の兄

を気の毒がりつつも、彼は何時の間にか、その兄と同じく過去の人となった。

彼は自分の生命を両断しようと試みた。すると綺麗きれいに切り棄すてられべきはずの過去が、かえって自分を追掛おっかけて来た。彼の眼は行手を望んだ。しかし彼の足は後あとへ歩きがちであつた。

そうしてその行き詰りには、大きな四角な家が建っていた。家には幅の広い階子段はしごだんのついた二階があつた。その二階の上も下も、健三の眼には同じように見えた。廊下で囲まれた中庭もまた真四角まっしかくであつた。

不思議な事に、その広い宅うちには人が誰も住んでいなかった。それを淋さみしいとも思わずにいられるほどの幼ない彼には、まだ家というもの

の経験と理解が欠けていた。

彼はいくつとなく続いている部屋だの、遠くまで真直まっすぐに見える廊下だのを、あたかも天井の付いた町のように考えた。そうして人の通らない往来を一人で歩く気でそこいら中馳かけ廻った。

彼は時々表二階おもてにかいへ上あがつて、細い格子こうしの間から下を見下した。鈴を鳴

らしたり、腹掛はらがけを掛けたりした馬が何匹も続いて彼の眼の前を過ぎ

た。路みちを隔てた真ん向うには大きな唐金からかねの仏様があつた。その仏様は

胡坐あぐらをかいれんだいて蓮台すわの上に坐すわっていた。太い錫杖しやくじょうを担いでいた、それか

ら頭に笠かさを被かぶっていた。

健三は時々薄暗い土間どまへ下りて、其所そこからすぐ向側むこうがわの石段を下りるために、馬の通る往来を横切った。彼はこうしてよく仏様へ攀よじ上のぼつ

た。着物の襷ひだへ足を掛けたり、錫杖の柄えへ捉つらまったりして、後うしろから肩に手が届くか、または笠に自分の頭が触れると、その先はもうどうする事も出来ずにまた下りて来た。

彼はまたこの四角な家と唐金の仏様の近所にある赤い門の家を覚えていた。赤い門の家は狭い往来から細い小路こうじを二十間も折れ曲はつて這入いった突き当りにあつた。その奥は一面の高藪たかやぶで蔽おおわれていた。

この狭い往来を突き当って左へ曲ると長い下り坂があつた。健三の記憶の中に出てくるその坂は、不規則な石段で下から上まで畳み上げられていた。古くなって石の位置が動いたためか、段の方々には凸凹でこぼこがあつた。石と石の罅隙すきまからは青草が風に靡なびいた。それでも其所は人の通行する路に違なかつた。彼は草履穿ぞうりばきのまま、何度かその高い石

段を上つたり下つたりした。

坂を下り尽すとまた坂があつて、小高い行手に杉の木立が蒼黒く見えた。丁度その坂と坂の間の、谷になった窪地の左側に、また一軒の萱葺があつた。家は表から引込んでゐる上に、少し右側の方へ片寄つていたが、往来に面した一部分には掛茶屋のような雑な構が拵えられて、常には二、三脚の床几さえ体よく据えてあつた。

葭簀の隙から覗くと、奥には石で囲んだ池が見えた。その池の上には藤棚が釣つてあつた。水の上に差し出された両端を支える二本の棚柱は池の中に埋まっていた。周囲には躑躅が多かつた。中には緋鯉の影があちこちと動いた。濁つた水の底を幻影のように赤くするその魚を健三は是非捕りたいと思つた。

或日彼は誰も宅にいない時を見計^{みはから}つて、不細工な布袋竹^{ほていちく}の先へ一枚糸を着けて、餌^{えさ}と共に池の中に投げ込んだら、すぐ糸を引く気味の悪いものに脅かされた。彼を水の底に引っ張り込まなければやまないその強い力が二の腕まで伝った時、彼は恐ろしくなつて、すぐ竿^{さお}を放り出した。そうして翌日^{あくるひ}静かに水面に浮いている一尺余^{しゃく}りの緋鯉を見出した。彼は独り怖がった。……

「自分はその時分誰と共に住んでいたのだろうか」

彼には何らの記憶もなかった。彼の頭はまるで白紙のようなものであった。けれども理解力の索引に訴えて考えれば、どうしても島田夫婦と共に暮したといわなければならなかった。

三十九

それから舞台が急に変わった。淋^{さみ}しい田舎^{いなか}が突然彼の記憶から消えた。

すると表に櫺子^{れんじまど}窓の付いた小さな宅^{うち}が朧^{おぼろげ}氣に彼の前にあらわれた。門のないその宅は裏通りらしい町の中にあつた。町は細長かつた。そうして右にも左にも折れ曲つていた。

彼の記憶がぼんやりしているように、彼の家も始終薄暗かつた。彼は日光とその家とを連想する事が出来なかつた。

彼は其所^{そこ}で疱瘡^{ほうそう}をした。大きくなつて聞くと、種痘が元で、本疱瘡^{ほんほうそう}を誘い出したのだとかいう話であつた。彼は暗い櫺子^{れんじ}のうちに転^{ころ}げ

廻った。惣身そうしんの肉を所嫌わず搔かき撈むしつて泣き叫んだ。

彼はまた偶然広い建物の中に幼い自分を見出した。区切られているように続いている仕切のうちには人がちらほらいた。空いた場所の畳だか薄縁うすべりだかが、黄色く光って、あたりを伽藍堂がらんどうの如く淋さびしく見せた。彼は高い所にいた。其所で弁当を食った。そうして油揚あぶらげの胴かみびを干瓢よういで結いえた稲荷鮎いなりずしの恰好かつこうに似たものを、上から下へ落した。彼は勾欄てすりにつらまって何度も下を覗のぞいて見た。しかし誰もそれを取ってくれるものはなかった。伴つれの大人はみんな正面に氣を取られていた。正面ではぐらぐらと柱が揺れて大きな宅が潰つぶれた。するとその潰れた屋根の間から、髭ひげを生やした軍人いくさにんが威張い張くさって出て来た。——その頃の健三はまだ芝居というものの觀念もを有もっていないなかったのである。

彼の頭にはこの芝居と外れ鷹そ たかとが何の意味なしに結び付けられていた。突然鷹が向うに見える青い竹藪たけやぶの方へ筋違すじかいに飛んで行った時、誰だか彼の傍そばにいるものが、「外れそた外れた」と叫けんだ。すると誰だかまた手を叩たたいてその鷹を呼び返そうとした。——健三の記憶は此所ここでふつりと切れていた。芝居と鷹とどっちを先に見たのか、それさえ彼には不分明ふぶんみようであつた。従つて彼が田圃たんぼや藪やぶばかり見える田舎に住んでいたのと、狭苦しい町内の往来に向いた薄暗い宅に住んでいたのと、どっちが先になるのか、それも彼にはよく判明わからなかった。そしてその時代の彼の記憶には、殆んど人ほとというものの影が働はたらいていなかった。

しかし島田夫婦が彼の父母として明瞭めいりように彼の意識のぼに上つたのは、そ

れから間もない後の事であつた。

その時夫婦は変な宅にいた。門口から右へ折れると、他の塀際伝いに石段を三つほど上らなければならなかつた。そこからは幅三尺ばかりの露地で、抜けると広くて賑やかな通りへ出た。左は廊下を曲つて、今度は反対に二、三段下りる順になつていた。すると其所に長方形の広間があつた。広間に沿うた土間も長方形であつた。土間から表へ出ると、大きな河が見えた。その上を白帆を懸けた船が何艘となく往つたり来たりした。河岸には柵を結つた中へ薪が一杯積んであつた。柵と柵の間にある空地は、だらだら下りに水際まで続いた。石垣の隙間からは弁慶蟹がよく鋏を出した。

島田の家はこの細長い屋敷を三つに区切つたものの真中にあつた。

もとは大きな町人の所有で、河岸に面した長方形の広間がその店になつていたらしく思われるけれども、その持主の何者であつたか、またどうして彼が其所を立ち退いたものか、それらは凡て健三の知識の外に横わる秘密であつた。

一頃その広い部屋をある西洋人が借りて英語を教えた事があつた。

まだ西洋人を異人という昔の時代だったので、島田の妻の御常は、化物と同居でもしているように氣味を悪がつた。尤もこの西洋人は上靴を穿いて、島田の借りている部屋の縁側までのそのそ歩いてくる癖を有つていた。御常が癢の氣味だとかいって蒼い顔をして寐ていると、

其所の縁側へ立つて座敷を覗き込みながら、見舞を述べたりした。その見舞の言葉は日本語か、英語か、またはただ手真似だけか、健三に

はまるで解っていないかった。

四十

西洋人は何時の間にか去ってしまった。小さい健三がふと心付いて見ると、その広い室は既にへや扱所あつかいじよというものに変っていた。

扱所というのは今の区役所のようなものらしかった。みんなが低い机を一行に並べて事務を執っていた。テーブルや椅子いすが今日こんにちのように広く用いられない時分の事だったので、畳の上に長く坐すわるのが、それほど不便でもなかったのだろう、呼び出されるものも、また自分から遣やつて来るものも、悉く自分ことごとの下駄げたを土間どまへ脱ぎ捨てて掛り掛りの

机の前へ畏かしこまった。

島田はこの扱所かしらの頭であつた。従つて彼の席は入口からずっと遠い一番奥の突つき当あたりに設けられた。其所そこから直角に折れ曲つて、河の見える櫺子窓れんじまどの際までに、人の数が何人いたか、机の数が幾脚あつたか、健三の記憶は慥たしかにそれを彼に語り得なかつた。

島田の住居すまいと扱所とは、もとより細長い一つ家いえを仕切つたまでの事なので、彼は出勤しゅっきんといわず退出たいしゅつといわず、少なからぬ便宜を有もつていた。彼には天氣の好よい時でも土を踏む面倒がなかつた。雨の降る日には傘を差す臆おっくう劫を省く事が出来た。彼は自宅から縁側伝いで勤めに出た。そうして同じ縁側を歩いて宅うちへ歸つた。

こういう關係が、小さい健三を少なからず大胆にした。彼は時々公

けの場所へ顔を出して、みんなから相手にされた。彼は好い気になって、書記の硯箱すずりばこの中にある朱墨しゅずみを弄いじったり、小刀の鞘さやを払はつて見たり、他に蒼蠅ひと　うるさがられるような悪戯いたずらを続けざまにした。島田はまた出来る限りの専横をもつて、この小暴君の態度を是認した。

島田は吝嗇りんしょくな男であつた。妻さいの御常は島田よりもなお吝嗇であつた。

「爪つめに火を点ともすつてえのは、あの事だね」

彼が実家に帰つてから後のち、こんな評が時々彼の耳に入いつた。しかし当時の彼は、御常が長火鉢ながひばちの傍そばへ坐つて、下女げじょに味噌汁おつけをよそつて遣るのを何の気もなく眺めていた。

「それじゃ何ぼ何でも下女が可哀かわいそうだ」

彼の実家のものは苦笑した。

御常はまた飯櫃^{おはち}や御菜^{おかず}の這入^{はい}っている戸棚に、いつでも錠^おを卸^おろした。たまに実家の父が訪ねて来ると、きつと蕎麦^{そば}を取り寄せて食わせた。その時は彼女も健三も同じものを食った。その代り飯時が来てても決して何時ものように膳^{ぜん}を出さなかった。それを当然のように思っていた健三は、実家へ引き取られてから、間食の上に三度の食事が重なるのを見て、大いに驚ろいた。

しかし健三に対する夫婦は金の点に掛けてむしろ不思議な位寛大であつた。外へ出る時は黄八丈^{きはちじょう}の羽織^{はおり}を着せたり、縮緬^{ちりめん}の着物を買うために、わざわざ越後屋^{えちごや}まで引つ張つて行ったりした。その越後屋の店へ腰を掛けて、柄^よを折り分けている間に、夕暮の時間が逼^{せま}つたので、

大勢の小僧が広い間口の雨戸を、両側から一度に締め出した時、彼は急に恐ろしくなつて、大きな声を揚げて泣き出した事もあつた。

彼の望む玩具おもちゃは無論彼の自由になつた。その中には写し絵の道具も交まじつていた。彼はよく紙を継ぎ合わせた幕の上に、三番叟さんばそうの影を映して、烏帽子姿えぼしに鈴を振らせたり足を動かさせたりして喜こんだ。彼は新らしい独楽こまを買つてもらつて、時代を着けるために、それを河岸際かしぎわの泥溝どぶの中に浸けた。ところがその泥溝は薪積場の柵まきつみばと柵さくとの間から流れ出して河へ落ち込むので、彼は独楽の失くなるのが心配さに、日に何遍となく扱所の土間を抜けて行つて、何遍となくそれを取り出して見た。そのたびに彼は石垣の間へ逃げ込む蟹かにの穴を棒で突ツついた。それから逃げ損なつたものの甲を抑えて、いくつも生捕りいけどにして

袂たもとへ入れた。……

要するに彼はこの吝嗇な島田夫婦に、よそから貰もらい受けた一人っ子として、異数の取扱いを受けていたのである。

四十一

しかし夫婦の心の奥には健三に対する一種の不安が常に潜んでいた。

彼らが長火鉢ながひばちの前で差向すわいに坐り合う夜寒よさむの宵などには、健三によくこんな質問を掛けた。

「御前おとつの御父おとつさんは誰だい」

健三は島田の方を向いて彼を指した。ゆびさ

「じゃ御前の御母さんは」おつか

健三はまた御常の顔を見て彼女を指さした。

これで自分たちの要求を一応満足させると、今度は同じような事を外の形で訊いた。き

「じゃ御前の本当の御父さんと御母さんは」

健三は厭々いやいやながら同じ答を繰り返すより外に仕方がなかった。しかしそれが何故なぜだか彼らを喜ほこばした。彼らは顔を見合せて笑った。

或時はこんな光景が殆んど毎日のように三人の間に起った。或時は単にこれだけの問答では済まなかった。ことに御常は執濃しつこかった。

「御前はどこで生れたの」

こう聞かれるたびに健三は、彼の記憶のうちに見える赤い門——高たか敷やぶで蔽おほわれた小さな赤い門うちの家を挙げて答えなければならなかった。御常は何時この質問を掛けても、健三が差支さしつかえなく同じ返事の出来るように、彼を仕込んだのである。彼の返事は無論器械的であつた。けれども彼女はそんな事には一向頓着とんじやくしなかった。

「健坊けんぼう、御前本当は誰の子なの、隠さずにそう御いい」

彼は苦しめられるような心持がした。時には苦しいより腹が立つた。向うの聞きたがる返事を与えずに、わざと黙っていたくなつた。

「御前誰が一番好きだい。御父ッさん？　御母さん？」

健三は彼女の意を迎えるために、向うの望むような返事をするのが厭で堪らなかつた。彼は無言のまま棒のように立っていた。それを

ただ年齒としはの行かないためとのみ解釈した御常の觀察は、むしろ簡単に過ぎた。彼は心のうちで彼女のこうした態度を忌み悪にくんだのである。

夫婦は全力を尽して健三を彼らの専有物にしようと力つとめた。また事実上健三は彼らの専有物に相違なかった。従って彼らから大事にされるのは、つまり彼らのために彼の自由を奪われるのと同じ結果に陥った。彼には既に身体からだの束縛があつた。しかしそれよりもなお恐ろしい心の束縛が、何も解らない彼の胸に、ぼんやりした不満足の影響を投げた。

夫婦は何かに付けて彼らの恩恵を健三に意識させようとした。それで或時は「御父ッさんが」という声を大きくした。或時はまた「御母さんが」という言葉に力を入れた。御父ッさんと御母さんを離れたた

だの菓子を食べたり、ただの着物を着たりする事は、自然健三には禁じられていた。

自分たちの親切を、無理にも子供の胸に外部から叩き込もうとする彼らの努力は、かえって反対の結果をその子供の上に引き起した。健三は蒼蠅がった。

「なんでそんなに世話を焼くのだろう」

「御父ツさんが」とか「御母さんが」とかが出るたびに、健三は己れ独りの自由を欲しがった。自分の買ってもらう玩具を喜んだり、錦絵を飽かず眺めたりする彼は、かえってそれらを買ってくれる人を嬉しがらなくなつた。少なくとも両つのものを綺麗に切り離して、純粹な楽みに耽りたかつた。

夫婦は健三を可愛^{かあい}がつていた。けれどもその愛情のうちには変な報酬が予期されていた。金の力で美しい女を囲っている人が、その女の好きなものを、いうがままに買ってくれるのと同じように、彼らは自分たちの愛情そのものの発現を目的として行動する事が出来ずに、ただ健三の歡心を得^うるために親切を見せなければならなかった。そうして彼らは自然のために彼らの不純を罰せられた。しかも自^{みづ}から知らなかった。

四十二

同時に健三の氣質も損われた。順良な彼の天性は次第に表面から落

ち込んで行つた。そうしてその陥欠を補うものは強情の二字に外ならなかつた。

彼の我儘^{わがまま}には日増^{ひまし}に募つた。自分の好きなものが手に入らないと、往来でも道端でも構わずに、すぐ其所^{そこ}へ坐り込んで動かなかつた。ある時は小僧の脊中^{せなか}から彼の髪の毛を力に任せて撈^{むし}り取つた。ある時は神社に放し飼^{はと}の鳩^{はと}をどうしても宅^{うち}へ持つて帰るのだと主張してやまなかつた。養父母の寵^{ちよう}を欲しいままに専有^{せんゆう}し得^うる狭い世界の中に起きたり寐^ねたりする事より外に何にも知らない彼には、凡^{すべ}ての他人が、ただ自分の命令を聞くために生きているように見えた。彼はいえば通るとばかり考えるようになった。

やがて彼の横着はもう一步深入りをした。

ある朝彼は親に起こされて、眠い眼を擦りながら縁側へ出た。彼は毎朝寐起に其所から小便をする癖を有^もっていた。ところがその日は何時もより眠かったので、彼は用を足しながらつい途中で寐てしまった。そうしてその後を知ら^{あと}なかった。

眼が覚めて見ると、彼は小便の上に転げ落ちていた。不幸にして彼の落ちた縁側は高かった。大通りから河岸^{かし}の方へ滑り込んでいる地面の中途に当るので、普通の倍ほどあつた。彼はその出来事のためにとうとう腰を抜かした。

驚ろいた養父母はすぐ彼を千住^{せんじゅ}の名倉^{なぐら}へ伴^つれて行って出来るだけの治療を加えた。しかし強く痛められた腰は容易に立たなかった。彼は醋^すの臭のする黄色いどろどろしたものを毎日局部に塗って座敷に寐て

いた。それが幾日続いたか彼は知らなかった。

「まだ立てないかい。立って御覧」

御常は毎日のように催促した。しかし健三は動けなかった。動けるようになってもわざと動かなかった。彼は寐ながら御常のやきもきする顔を見てひそかに喜こんだ。

彼はしまいに立った。そうして平生と何の異なる所なく其所いら中歩き廻った。すると御常の驚ろいて嬉しがりようが、如何にも芝居じみた表情に充ちていたので、彼はいつそ立たずにもう少し寐ていればよかったという氣になった。

彼の弱点が御常の弱点とまともに相搏つ事も少なくはなかった。

御常は非常に嘘を吐く事の巧い女であつた。それからどんな場合で

も、自分に利益があるとさえ見れば、すぐ涙を流す事の出来る重宝な女であつた。健三をほんの小供だと思つて氣を許していた彼女は、その裏面をすっかり彼に曝露^{ばくろ}して自^{みず}から知らなかつた。

或日一人の客と相對して坐つていた御常は、その席で話題に上^{のぼ}つた甲という女を、傍^{はた}で聴いていても聴きづらいほど罵^{のの}つた、ところがその客が歸つたあとで、甲がまた偶然彼女を訪ねて來た。すると御常は甲に向つて、そらぞらしい御世辞を使い始めた。遂に、今誰さんとあなたの事を大變賞^ほめていた所だというような不必要な嘘まで吐^ついた。

健三は腹を立てた。

「あんな嘘を吐いてらあ」

彼は一徹な小供の正直をそのまま甲の前に披瀝^{ひれき}した。甲の歸つたあ

とで御常は大変に怒った。^{おこ}

「御前と一所にしていると顔から火の出るような思をしなくっちゃならない」

健三は御常の顔から早く火が出れば好^い位に感じた。

彼の胸の底には彼女を忌み嫌う心が我知らず常にどこかに働^{じようあい}らいていた。いくら御常から可^{かあい}愛がられても、それに酬^{むく}いるだけの情^{じようあい}合^あがこつちに出て来^{きえ}得ないような醜^{みにく}いものを、彼女は彼女の人格^{じんかく}の中^{うち}に蔵^{かく}していたのである。そうしてその醜^{みにく}いものを一番能^よく知っていたのは、彼女の懷^{こころ}に温められて育った駄^だ々^だツ子^こに外ならなかったのである。

四十三

その中^{うち}変な現象が島田と御常との間に起った。

ある晩健三がふと眼を覚まして見ると、夫婦は彼の傍^{そば}ではげしく罵^{のの}り合っていた。出来事は彼に取って突然であつた。彼は泣き出した。

その翌晩も彼は同じ争いの声で熟睡を破られた。彼はまた泣いた。こうした騒がしい夜が幾つとなく重なって行くに連れて、二人の罵る声は次第に高まつて来た。しまいには双方とも手を出し始めた。打つ音、踏む音、叫ぶ音が、小さな彼の心を恐ろしがらせた。最初彼が泣き出すとやんだ二人の喧嘩^{けんか}が、今では寐^ねようが覚めようが、彼に用捨なく進行するようになった。

幼稚な健三の頭では何のために、ついぞ見馴みなれないこの光景が、毎夜深更に起るのか、まるで解釈出来なかった。彼はただそれを嫌った。道徳も理非も持たない彼に、自然はただそれを嫌うように教えたのである。

やがて御常は健三に事実を話して聞かせた。その話によると、彼女は世の中で一番の善人であつた。これに反して島田は大変な悪ものであつた。しかし最も悪いのは御藤おふじさんであつた。「あいつが」とか「あの女が」とかいう言葉を使うとき、御常は口惜しくって堪まらないという顔付をした。眼から涙を流した。しかしそうした劇烈な表情はかえつて健三の心持を悪くするだけで、外に何の効果もなかった。「あいつは讐かたきだよ。御母おつかさんにも御前にも讐だよ。骨を粉こにしても仇かたき

討うちをしなくつちや」

御常は齒をぎりぎり噛かんだ。健三は早く彼女の傍を離れたくなつた。

彼は始終自分の傍にいて、朝から晩まで彼を味方にしたがる御常よりも、むしろ島田の方を好いた。その島田は以前と違って、大抵は宅うちにいない事が多かった。彼の帰る時刻は何時も夜更よふけらしかつた。従つて日中は滅多に顔を合せる機会がなかつた。

しかし健三は毎晩暗い灯火ともしびの影で彼を見た。その險惡な眼と怒いかりに顫ふるえる唇とを見た。咽喉のどから渦捲うずまく烟けむりのように洩もれて出るその憤りの声を聞いた。

それでも彼は時々健三を伴つれて以前の通り外へ出る事があつた。彼

は一口も酒を飲まない代りに大変甘いものを嗜たしなんだ。ある晩彼は健三と御藤さんの娘の御縫おぬいさんとを伴ともれて、賑にぎやかな通りを散歩した帰りに汁粉屋しるこやへ寄った。健三の御縫さんに会ったのはこの時が始めてであった。それで彼らは碌ろくに顔さえ見合せなかった。口はまるで利かなかった。

宅へ帰った時、健三は御常から、まず島田にどこへ伴ともれて行かれたかを訊きかれた。それから御藤さんの宅へ寄りはないかと念を押された。最後に汁粉屋へは誰と一所に行ったという詰問を受けた。健三は島田の注意にかかわらず、事実をありのままに告げた。しかし御常の疑いはそれでもなかなか解けなかった。彼女はいろいろな鎌かまを掛けて、それ以上の事実を釣り出そうとした。

「あいつも一所なんだろう。本当を御いい。いえば御母おつかさんが好いものを上げるから御いい。あの女も行ったんだろう。そうだろう」

彼女はどうしても行つたといわせようとした。同時に健三はどうしてもいうまいと決心した。彼女は健三を疑うたぐつた。健三は彼女を卑しんだ。

「じゃあの子に御父おとつツさんが何とittたい。あの子の方に余計口を利くかい、御前の方にかい」

何の答もしなかった健三の心には、ただ不愉快の念のみ募つた。しかし御常は其所そこで留まる女ではなかった。

「汁粉屋で御前をどっちへ坐らせたい。右の方かい、左の方かい」
嫉妬しつとから出る質問は何時まで経つても尽きなかった。その質問のう

ちに自分の人格を会釈なく露わして顧り見ない彼女は、十にも足りないわが養い子から、愛想を尽かされて毫も気が付かずにいた。

四十四

間もなく島田は健三の眼から突然消えて失くなった。河岸を向いた裏通りと賑かな表通りとの間に挟まっていた今までの住居も急にどこへか行ってしまった。御常とたった二人ぎりになった健三は、見馴れない変な宅の中うちに自分を見出だした。

その家の表には門口かどぐちに縄暖簾なわのれんを下げた米屋だか味噌屋だかがあった。彼の記憶はこの大きな店と、茹でた大豆とを彼に連想せしめた。

彼は毎日それを食った事をいまだに忘れずにいた。しかし自分の新らしく移った住居については何の影像イメジも浮かべ得なかった。「時」は綺麗きれにこの佻わびしい記念かたみを彼のために払い去ってくれた。

御常は会う人ごとに島田の話をした。口惜くやしい口惜くやしいといって泣いた。

「死んで崇たたってやる」

彼女の権幕は健三の心をますます彼女から遠ざける媒介なかだちとなるに過ぎなかった。

夫と離れた彼女は健三を自分一人の専有物にしようとした。また専有物だと信じていた。

「これからは御前一人が依怙たよりだよ。好いいいかい。確しつかりしてくれなくつ

ちやいけないよ」

こう頼まれるたびに健三はいい渋った。彼はどうしても素直な子供のように心持の好い返事を彼女に与える事が出来なかった。

健三を物にしようという御常の腹の中には愛に駆られる衝動よりも、むしろ慾よくに押し出される邪氣が常に働いていた。それが頑がんぜはない健三の胸に、何の理窟なしに、不愉快な影を投げた。しかしその他の点について彼は全くの無我夢中であつた。

二人の生活は僅わずかの間ましか続かなかつた。物質的の欠乏が原因になつたのか、または御常の再縁が現状の変化を余儀なくしたのか、年と齒しの行かない彼にはまるで解らなかつた。何しろ彼女はまた突然健三の眼から消えて失くなつた。そうして彼は何時の間にか彼の実家へ引

き取られていた。

「考えるとまるで他の身の上のようだ。自分の事とは思えない」

健三の記憶に上せた事相は余りに今の彼と懸隔していた。それでも彼は他人の生活に似た自分の昔を思い浮べなければならなかった。しかも或る不快な意味において思い浮べなければならなかった。

「御常さんて人はその時にあの波多野とかいう宅へまた御嫁に行つたんでしょうか」

細君は何年前か夫の所へ御常から来た長い手紙の上書をまだ覚えていた。

「そうだろうよ。己も能く知らないが」

「その波多野という人は大方まだ生きてるんでしょね」

健三は波多野の顔さえ見た事がなかった。生死しやうしなどは無論考えの中になかった。

「警部だつていうじゃありませんか」

「何んだか知らないね」

「あら、貴夫あなたが自分でそう御仰おつしやつたくせに」

「何時いつ」

「あの手紙を私わたくしに御見せになつた時よ」

「そうかしら」

健三は長い手紙の内容を少し思い出した。その中には彼女が幼い健三の世話をした時の辛苦ばかりが並べ立ててあつた。乳がないので最初からおじやだけで育てた事だの、下性げしやうが悪くつて寐小便ねしやうべんの始末に

困った事だの、凡てすべそうした顛末てんまつを、飽きるほど委くわしく述べた中に、
甲府こうふとかにいる親類の裁判官が、月々彼女に金を送ってくれるので、
今では大變しあわせ仕合だと書いてあつた。しかし肝心の彼女の夫が警部で
あつたかどうか、其所そこになると健三には全く覺がなかつた。

「ことによると、もう死んだかも知れないね」

「生きているかも分りませんわ」

二人の間には波多野の事ともつかず、また御常の事ともつかず、こ
んな問答が取り換わされた。

「あの人が不意に遣やつて来たように、その女の人、何時突然訪ねて
来ないとも限らないわね」

細君は健三の顔を見た。健三は腕組をしたなり黙っていた。

四十五

健三も細君も御常の書いた手紙の傾向をよく覚えていた。彼女とはさして縁故のない人ですら、親切に毎月いくらかずつの送金をしてくれるのに、小さい時分あれば世話になつて置きながら、今更知らん顔をしていられた義理でもあるまいといった風の筆意が、一頁ごとに見透かされた。

その時彼はこの手紙を東京にいる兄の許に送つた。勤先へこんなものを度々寄こされては迷惑するから、少し気を付けるように先方へ注意してくれと頼んだ。兄からはすぐ返事が来た。もともと養家先を離縁になつて、他家へ嫁に行つた以上は他人である、その上健三はその

養家さえ既に出てしまった後なのだから、今になって直接本人へ文通などされては困るという理由を持ち出して、先方を承知させたから安心しろと、その返事には書いてあった。

御常の手紙はその後^{ごと}ふつつり来なくなった。健三は安心した。しかしどこかに心持の悪い所があった。彼は御常の世話を受けた昔を忘れる訳に行かなかった。同時に彼女を忌み嫌う念は昔の通り変らなかった。要するに彼の御常に対する態度は、彼の島田に対する態度と同じ事であった。そうして島田に対するよりも一層嫌悪の念が劇^{はげ}しかった。

「島田一人でもう沢山なところへ、また新らしくそんな女が遣^やつて来られちゃ困るな」

健三は腹の中でこう思った。夫の過去について、それほど知識のない細君の腹の中はなおの事であつた。細君の同情は今その生家の方にばかり注がれていた。もとかかなりの地位にあつた彼女の父は、久しく浪人生活が続けた結果、漸々だんだん經濟上の苦境に陥いつて來たのである。

健三は時々宅うちへ話しに來る青年と対坐たいざして、晴々しい彼らの様子と自分の内面生活とを対照し始めるようになった。すると彼の眼に映ずる青年は、みんな前ばかり見詰めて、愉快に先へ先へと歩いて行くように見えた。

或日彼はその青年の一人に向つてこういった。

「君らは幸福だ。卒業したら何になろうとか、何をしようとか、そんな事ばかり考えているんだから」

青年は苦笑した。そうして答えた。

「それは貴方^{あなた}がた時代の事でしよう。今の青年はそれほど呑気^{のんき}でもありません。何^{なん}になろうとか、何^{なに}をしようとか思わない事は無論ないでしょうけれども、世の中が、そう自分の思い通りにならない事もまた能く承知^よしていますから」

なるほど彼の卒業した時代に比べると、世間は十倍も世知辛^{せちがら}くなっていた。しかしそれは衣食住に関する物質的の問題に過ぎなかった。従って青年の答には彼の思わくと多少喰^くい違った点があつた。

「いや君らは僕のように過去に煩らわされないから仕合せだというのさ」

青年は解しがたいという顔をした。

「あなただつて些^{ちつ}とも過去に煩らわされているようには見えませんよ。やっぱり己^{おれ}の世界はこれからだという所があるようですね」

今度は健三の方が苦笑する番になった。彼はその青年に仏蘭西^{フランス}のあの学者が唱え出した記憶に関する新説を話した。

人が溺^{おぼ}れかかったり、または絶壁から落^{おち}ようとする間際に、よく自分の過去全体を一瞬間の記憶として、その頭に描き出す事があるという事实に、この哲学者は一種の解釈を下したのである。

「人間は平生^{へいぜい}彼らの未来ばかり望んで生きているのに、その未来が咄^{とつ}嗟^さに起つたある危険のために突然塞^{ふさ}がれて、もう己^{すべ}は駄目だと事が極^{きま}ると、急に眼を転じて過去を振り向くから、そこで凡^{すべ}ての過去の経験が一度に意識に上^{のぼ}るのだというんだね。その説によると」

青年は健三の紹介を面白そうに聴いた。けれども事状を一向知らない彼は、それを健三の身の上に引き直して見る事が出来なかった。健三も一刹那いっせつなにわが全部の過去を思い出すような危険な境遇に置かれたものとして今の自分を考えるほどの馬鹿でもなかった。

四十六

健三の心を不愉快な過去に捲まき込む端緒いとくちになった島田は、それから五、六日ほどして、ついにまた彼の座敷にあらわれた。

その時健三の眼に映じたこの老人は正しく過去の幽霊であつた。また現在の人間でもあつた。それから薄暗い未来の影にも相違なかつ

た。

「どこまでこの影が己おれの身体からだに付いて回るだろう」

健三の胸は好奇心の刺戟しげきに促されるよりもむしろ不安の漣漪さざなみに揺れた。

「この間比田ひだの所をちよつと訪ねて見ました」

島田の言葉遣はこの前と同じように鄭重ていちょうであつた。しかし彼が何で比田の家へ足を運んだのか、その点になると、彼は全く知らん顔をして澄ましていた。彼の口ぶりはまるで無沙汰見舞ぶさたかたがたそつちへ用のあつたついでに立ち寄つた人の如くであつた。

「あの辺へんも昔と違って大分だいぶん変りましたね」

健三は自分の前に坐すわっている人の真面目まじめさの程度を疑うたぐつた。果して

この男が彼の復籍を比田まで頼み込んだのだろうか、また比田が自分たちと相談の結果通り、断然それを拒絶したのだろうか、健三はその明白な事実さえ疑わずにはいられなかった。

「もとはそら彼処あそこに瀑たきがあつて、みんな夏になると能く出掛けよたものですがね」

島田は相手に頓着とんじやくなくただ世間話を進めて行つた。健三の方では無論自分から進んで不愉快な問題に触れる必要を認めないので、ただ老人の迹あとに跟ついて引つ張られて行くだけであつた。すると何時の間にか島田の言葉遣が崩れて来た。しまいには彼は健三の姉を呼び捨てずにし始めた。

「御夏おなつも年を取つたね。尤もつとももう大分久しく会わないには違ないが。」

昔はあれでなかなか勝気な女で、能く私に喰つて掛つたり何かしたもののさ。その代り元々兄弟同様の間柄だから、いくら喧嘩をしたって、仲の直るのもまた早いには早い。が。何しろ困ると助けってくれって能く泣き付いて来るんで、私や可哀想だからその度びにいくらかずつ都合して遣つたよ」

島田のいう事は、姉が蔭で聴いていたらさぞ怒るだろうと思うように横柄であつた。それから手前勝手な立場からばかり見た歪んだ事実を他に押し付けようとする邪気に充ちていた。

健三は次第に言葉少なになつた。しまいには黙つたなり凝と島田の顔を見詰めた。

島田は妙に鼻の下の長い男であつた。その上往来などで物を見ると

きは必ず口を開けていた。だからちよつと馬鹿のようであつた。けれども善良な馬鹿としては決して誰の眼にも映ずる男ではなかつた。落ち込んだ彼の眼はその底で常に反対の何物かを語っていた。眉はむしろ険しかつた。狭くて高い彼の額の上にある髪は、若い時分から左右に分けられた例がなかつた。法印か何ぞのように常に後へ撫で付けられていた。

彼はふと健三の眼を見た。そうして相手の腹を読んだ。一旦横風の昔に返つた彼の言葉遣がまた何時の間にか現在の鄭寧さに立ち戻つて来た。健三に対して過去の己れに返ろう返ろうとする試みを遂に断念してしまつた。

彼は室の内をきよろきよろ見廻し始めた。殺風景を極めたその室の

中には生憎額あいにくも掛物も掛けていなかった。

「李鴻章りこうしょうの書は好きですか」

彼は突然こんな問を發した。健三は好きとも嫌きらともいい兼ねた。

「好きなら上げてても好よござんす。あれでも価値ねうちにしたら今じゃよっぱどするでしょう」

昔し島田は藤田東湖ふじたとうこの偽筆に時代を着けるのだといって、白髪蒼顔はくはつそうがん万死余云々と書いた半切はんせつの唐紙とうしを、台所の竈へつの上に釣るしていた事があつた。彼の健三にくれるという李鴻章も、どこの誰が書いたものか頗る怪すこぶしかった。島田から物を貰う氣の絶対になかった健三は取り合わずにいた。島田は漸ようやく歸つた。

四十七

「何しに來たんでしよう、あの人は」

目的^{あて}なしにただ來るはずがないという感じが細君には強くあつた。

健三も丁度同じ感じに多少支配されていた。

「解らないね、どうも。一体魚と獸^{さかなけだもの}ほど違ふんだから」

「何が」

「ああいう人と己^{おれ}などとはさ」

細君は突然自分の家族と夫との關係を思い出した。両者の間には自然の造つた溝があつて、御互を離隔していた。片意地な夫は決してそれを飛び超えてくれなかつた。溝を^{こしら}掩えたものの方で、それを埋める

のが当然じゃないかといった風の気分で何時までも押し通していた。里ではまた反対に、夫が自分の勝手にこの溝を掘り始めたのだから、彼の方で其所^{そこ}を平^{たい}にしたら好かろうという考えを有^もっていた。細君の同情は無論自分の家族の方にあつた。彼女はわが夫を世の中と調和する事の出来ない偏窟^{うち}な学者だと解釈していた。同時に夫が里と調和しなくなった原因の中に、自分が主要素として這入^{はい}っている事も認めていた。

細君は黙つて話を切り上げようとした。しかし島田の方にばかり気を取られていた健三にはその意味が通じなかつた。

「御前はそう思わないかね」

「そりゃあの人と貴夫^{あなた}となら魚と獣位違ふでしよう」

「無論外の人と己と比較していやしない」

話はまた島田の方へ戻つて来た。細君は笑いながら訊きいた。

「李鴻章の掛物をどうかいつてたのね」

「己に遣やろうかっていうんだ」

「御止およしなさいよ。そんな物を貰つてまた後からどんな無心を持ち懸けられるかも知れないわ。遣るっていうのは、大方口の先だけなんでしょう。本当は買ってくれていう気なんですよ、きつと」

夫婦には李鴻章の掛物よりもまだ外に買いたいものが沢山あった。

段々大きくなつて来る女の子に、相当の着物を着せて表へ出す事の出来ないのも、細君からいえば、夫の気の付かない心配に違なかつた。

二円五十銭の月賦で、この間拵あまがつばえた雨合羽の代を、月々洋服屋に払つ

ている夫も、あまり長閑のどかな心持になれようはずがなかった。

「復籍の事は何にもいい出さなかったようですね」

「うん何にもいわない。まるで狐きつねに抓つままれたようなものだ」

始めからこつちの気を引くためにわざとそんな突飛とつぴな要求を持ち出

したものか、または真面目まじめな懸合かけあいとして、それを比田ひだへ持ち込んだ

後、比田あとからきつぱり断られたので、始めて駄目さとだと覺つたものか、

健三にはまるで見当が付かなかった。

「どつちでしょう」

「到底解らないよ、ああいう人の考えは」

島田は實際どつちでも遣りかねない男であつた。

彼は三日ほどしてまた健三の玄関を開けた。その時健三は書齋あかに灯

火を点けて机の前に坐っていた。丁度彼の頭に思想上のある問題が一筋の端緒を見せかけた所であつた。彼は一瞬にそれを手近まで手繰り寄せようとして骨を折つた。彼の思索は突然截ち切られた。彼は苦い顔をして室の入口に手を突いた下女の方を顧みた。

「何もそう度々来て、他の邪魔をしなくつても好きそうなものだ」

彼は腹の中でこう呟やいた。断然面会を謝絶する勇氣を有たない彼は、下女を見たなり少時黙っていた。

「御通し申しますか」

「うん」

彼は仕方なしに答えた。それから「御奥さんは」と訊ねた。

「少し御気分が悪いと仰しゃって先刻から伏せっていらいしま

す」

細君の寐ねるときは歇私ヒステリー的里の起つた時に限るように健三には思えてならなかった。彼は漸ようやく立ち上つた。

四十八

電気燈のまだ戸こごとに点ともされない頃だったので、客間きやまには例いもの通り暗い洋燈ランプが点ついていた。

その洋燈は細長い竹の台の上に油壺あぶらつぼを簞はめ込むように拵こしらえたもので、鼓つづみの胴かの恰形かっこうに似た平たい底が畳へ据わるように出来ていた。

健三が客間へ出た時、島田はそれを自分の手元に引き寄せて心しんを出

したり引つ込ましたりしながら灯火あかりの具合を眺めていた。彼は改まつた挨拶あいさつもせず、「少し油煙がたまるようですね」といった。なるほど火屋ほやが薄黒く燻くすぶっていた。丸心まるじんの切方きりかたが平たいらに行かないところを、むやみに灯ひを高くすると、こんな変調を来すのがこの洋燈の特徴であつた。

「換えさせましょう」

家には同じ型のものが三つばかりあつた。健三は下女げじょを呼んで茶の間にあるのとり換えさせようとした。しかし島田は生返事なまかへじをするぎりで、容易やすに煤すすで曇つた火屋から眼を離さなかつた。

「どういう加減だろう」

彼は独り言をいって、草花の模様だけを不透明に擦すつた丸い蓋かさの隙

間を覗^{のぞ}き込んだ。

健三の記憶にある彼は、こんな事を能^よく気にするという点において、頗^{すこぶ}る几帳^{きちようめん}面な男に相違^{さむ}なかつた。彼はむしろ潔癖であつた。持つて生れた倫理上の不潔癖と金銭上の不潔癖の償いにでもなるように、座敷や縁側の塵^{ちり}を気にした。彼は尻^{しり}をからげて、拭^{ふき}掃除をした。跣^{はだし}足で庭へ出て要^いらざる所まで掃いたり水を打ったりした。

物が壊れると彼はきつと自分で修^な復^おした。あるいは修復そうとした。それがためにどの位な時間が要つても、またどんな労力が必要になつて来ても、彼は決して厭^{いと}わなかつた。そういう事が彼の性^{しょう}にあるばかりでなく、彼には手に握つた一銭銅貨の方が、時間や労力よりも遥かに大切に見えたのである。

「なにそんなものは宅うちで出来る。金を出して頼むがものはない。損だ」

損をするという事が彼には何よりも恐ろしかった。そうして目に見えない損はいくらしても解らなかった。

「宅うちの人はあんまり正直過ぎるんで」

御藤さんおふじは昔健三に向って、自分の夫を評するときに、こんな言葉を使った。世の中をまだ知らない健三にもその真実でない事はよく解っていた。ただ自分の手前、嘘うそと承知しながら、夫の品性を取り繕うのだらうと善意に解釈した彼は、その時御藤さんに向って何にもいわなかった。しかし今考えて見ると、彼女の批評にはもう少し慥たしかな根底があるらしく思えた。

「必竟^{ひつきよう}大きな損に氣のつかない所が正直なんだろう」

健三はただ金銭上の慾^{よく}を満たそうとして、その慾に伴なわないう程度の幼稚な頭腦を精一杯に働らかせている老人をむしろ憐れに思った。そうして凹^{くぼ}んだ眼を今擦^すり硝子^{ガラス}の蓋^{そぼ}の傍へ寄せて、研究でもする時のように、暗い灯を見詰めている彼を氣の毒な人として眺めた。

「彼はこうして老いた」

島田の一生を煎^{せん}じ詰めたような一句を眼の前に味わった健三は、自分果してどうして老ゆるのだろうかと考えた。彼は神という言葉が嫌^{きらひ}であつた。しかしその時の彼の心にはたしかに神という言葉が出た。そうして、もしその神が神の眼で自分の一生を通して見たならば、この強慾^{じやうよく}な老人の一生と大した変りはないかも知れないという氣

が強くした。

その時島田は洋燈の螺旋ねじを急に廻したと見えて、細長い火屋の中が、赤い火で一杯になった。それに驚ろいた彼は、また螺旋を逆に廻し過ぎたらしく、今度はただでさえ暗い灯火あかりをなおの事暗くした。

「どうもどこか調子が狂ってますね」

健三は手をたた敲いて下女に新しい洋燈を持って来させた。

四十九

その晩の島田はこの前来た時と態度の上において何の異なる所もなかった。応対にはどこまでも健三を独立した人と認めるような言葉ば

かり使った。

しかし彼はもう先達せんたつての掛物についてはまるで忘れているかの如くに見えた。李鴻章りこうしょうの李の字も口にしなかった。復籍の事はなお更であつた。噫おくびにさえ出す様子を見せなかった。

彼はなるべくただの話をしようにとした。しかし二人に共通した興味のある問題は、どこをどう探しても落ちているはずがなかった。彼のいう事の大部分は、健三に取って全くの無意味から余り遠く隔へだたつていると思えなかった。

健三は退屈した。しかしその退屈のうちには一種の注意が徹とおつていた。彼はこの老人が或日或物を持って、今より判明はつきりした姿で、きつと自分の前に現れてくるに違ないという予覺に支配された。その或物

がまた必ず自分に不愉快なもしくは不利益な形を具えているに違いないという推測にも支配された。

彼は退屈のうちに細いながらかなり鋭い緊張を感じた。そのせいか、島田の自分を見る眼が、さつき擦硝子の蓋を通して油煙に燻ぶつた洋燈の灯を眺めていた時とは全く変っていた。

「隙があつたら飛び込もう」

落ち込んだ彼の眼は鈍いくせに明らかにこの意味を物語っていた。

自然健三はそれに抵抗して身構えなければならなくなった。しかし時によると、その身構えをさらりと投げ出して、飢えたような相手の眼に、落付を与えて遣りたくなる場合もあった。

その時突然奥の間で細君の唸るような声がした。健三の神経はこの

声に対して普通の人以上の敏感を有^もっていた。彼はすぐ耳を峙^{そば}だてた。

「誰か病気ですか」と島田が訊^きいた。

「ええ妻^{さい}が少し」

「そうですか、それはいけませんね。どこが悪いんです」

島田はまだ細君の顔を見た事がなかった。何時どこから嫁に来た女かさえ知らないらしかった。従って彼の言葉にはただ挨拶^{あいさつ}があるだけであつた。健三もこの人から自分の妻に対する同情を求めようとは思つていなかった。

「近頃は時候が悪いから、能^よく気を付けないといけませんね」

子供は疾^とうに寐^ね付いた後^{あと}なので奥は寂^{しん}としていた。下女^{げじよ}は一番懸け

離れた台所の傍そばの三畳にいらしかった。こんな時に細君をたった一人で置くのが健三には何より苦しかった。彼は手を叩たたいて下女を呼んだ。

「ちよつと奥へ行つて奥さんの傍すわに坐つててくれ」

「へええ」

下女は何のためだか解らないといった様子をして間の襖ふすまを締めた。健三はまた島田の方を向き直った。けれども彼の注意はむしろ老人を離れていた。腹の中で早く帰つてくれれば好いいと思うので、その腹が言葉にも態度にもありありと現れた。

それでも島田は容易に立たなかつた。話の接穂つぎほがなくなつて、手持無沙汰ぶさたで仕方なくなつた時、始めて座蒲団ざふとんから滑り落ちた。

「どうも御邪魔をしました。御忙がしいところを。いずれまたその内」

細君の病気については何事もいわなかった彼は、沓脱^{くつぬぎ}へ下りてからまた健三の方を振り向いた。

「夜分なら大抵御暇ですか」

健三は生返事をしたなり立っていた。

「実は少し御話したい事があるんですが」

健三は何の御用ですかとも聞き返さなかった。老人は健三の手に持った暗い灯影^{ひかげ}から、鈍い眼を光らしてまた彼を見上げた。その眼にはやつぱりどこかに隙があつたら彼の懷に潜^{もぐ}り込もうという人の悪い厭^{いや}な色か動いていた。

「じゃ御免」

最後に格子こうしを開けて外へ出た島田はこういつてとうとう暗がりに消えた。健三の門には軒燈さえ点ついていなかった。

五十

健三はすぐ奥へ来て細君の枕元に立った。

「どうかしたのか」

細君は眼を開けて天井を見た。健三は蒲団ふとんの横からまたその眼を見みお下ろした。

襖ふすまの影に置かれた洋燈ランプの灯ひは客間のよりも暗かった。細君の眸ひとみがど

こに向つて注がれているのか能く分らない位暗かつた。

「どうかしたのか」

健三は同じ問をまた繰り返さなければならなかつた。それでも細君は答えなかつた。

彼は結婚以来こういう現象に何度となく遭遇した。しかし彼の神経はそれに慣らされるには余りに鋭敏過ぎた。遭遇するたびに、同程度の不安を感じるのが常であつた。彼はすぐ枕元に腰を卸した。

「もうあっちへ行つても好い。此所には己が^{おれ}いるから」

ぼんやり蒲団の裾に^{すわ}坐つて、退屈そうに健三の様子を眺めていた下女^よは無言のまま立ち上つた。そうして「御休みなさい」と敷居の所へ手を突いて御辞儀をしたなり襖を立て切つた。後には赤い筋を引いた

光るものが畳の上に残った。彼は眉まゆを顰ひそめながら下女の振り落して行つた針を取り上げた。何時もなら婢おんなを呼び返して小言こごとをいって渡すところを、今の彼は黙つて手に持ったまま、しばらく考えていた。彼はしまいにその針をぷつりと襖に立てた。そうしてまた細君の方へ向き直つた。

細君の眼はもう天井を離れていた。しかし判然はつきりどこを見ているとも思えなかった。黒い大きな瞳子ひとみには生きた光があつた。けれども生きた働きが欠けていた。彼女は魂と直接じかに繋がつながつていないような眼を一杯に開けて、漫然と瞳孔ひとみの向いた見当を眺めていた。

「おい」

健三は細君の肩を揺ゆつた。細君は返事をせずになだ首だけをそろり

と動かして心持健三の方に顔を向けた。けれども其所そこに夫の存在を認める何らの輝きもなかった。

「おい、己だよ。分るかい」

こういう場合に彼の何時でも用いる陳腐で簡略でしかもぞんざいなこの言葉のうちには、他ひとに知れないで自分にばかり解わかっている憐憫れんびんと苦痛と悲哀があつた。それから跪ひざままずいて天に禱いのる時の誠と願もあつた。

「どうぞ口を利いてくれ。後生だから己の顔を見てくれ」

彼は心のうちでこういつて細君に頼むのである。しかしその痛切な頼みを決して口へ出していおうとはしなかった。感傷センチメンタル的な気分気分に支配されやすいくせに、彼は決して外表デモンストラチヴ的になれない男であつた。

細君の眼は突然平生の我に帰った。そうして夢から覚めた人のように健三を見た。

「貴夫^{あなた}？」

彼女の声は細くかつ長かった。彼女は微笑しかけた。しかしまだ緊張している健三の顔を認めた時、彼女はその笑を止めた。

「あの人はもう帰ったの」

「うん」

二人はしばらく黙っていた。細君はまた頸^{くび}を曲げて、傍^{そば}に寐^ねている子供の方を見た。

「能く寐ているのね」

子供は一つ床の中に小さな枕を並べてすやすや寐ていた。

健三は細君の額の上に自分の右の手を載せた。

「水で頭でも冷して遣やろうか」

「いいえ、もう好よござんす」

「大丈夫かい」

「ええ」

「本当に大丈夫かい」

「ええ。貴夫ももう御休みなさい」

「己はまだ寐る訳に行かないよ」

健三はもう一遍書斎へ入って静かな夜よを一人更ふかさなければならな
かった。

五十一

彼の眼が冴^さえている割に彼の頭は澄み渡らなかつた。彼は思索の綱を中断された人のように、考察の進路を遮ぎる霧の中で苦しんだ。

彼は明日^{あした}の朝多くの人より一段高い所に立たなければならぬ憐^{あわ}れな自分の姿を想い見た。その憐れな自分の顔を熱心に見詰めたり、または不得意な自分のいう事を真面目^{まじめ}に筆記したりする青年に対して済まない気がした。自分の虚栄心や自尊心を傷^{きず}けるのも、それらを超越する事の出来ない彼には大きな苦痛であつた。

「明日^{あした}の講義もまた纏^{まと}まらないのかしら」

こう思うと彼は自分の努力が急に厭^{いや}になつた。愉快に考えの筋道が

運んだ時、折々何者にか煽動せんどうされて起る、「己おれの頭は悪くない」という自信も己惚うぬぼれも忽ち消えてしまった。同時にこの頭の働からきを攪かき乱す自分の周囲についての不平も常時ふだんよりは高まって来た。

彼はしまいに投げるように洋筆ペンを放り出した。

「もうやめだ。どうでも構わない」

時計はもう一時過ぎていた。洋燈ランプを消して暗闇くらやみを縁側伝いに廊下へ出ると、突当りつきあたの奥の間の障子二枚だけが灯ひに映って明るかった。健三はその一枚を開けて内に入った。

子供は犬ころのように塊かたまって寐ねていた。細君も静かに眼を閉じて仰向あおむけに眠っていた。

音のしないように気を付けてその傍そばに坐すわった彼は、心持頸くびを延ばし

て、細君の顔を上から覗き込んだ。それからそつと手を彼女の寐顔の
上に翳した。彼女は口を閉じていた。彼の掌には細君の鼻の穴から出
る生暖かい呼息が微かに感ぜられた。その呼息は規則正しかった。ま
た穏やかだった。

彼は漸く出した手を引いた。するともう一度細君の名を呼んで見な
ければまだ安心が出来ないという気が彼の胸を衝いて起った。けれど
も彼は直その衝動に打勝った。次に彼はまた細君の肩へ手を懸けて、
再び彼女を揺り起そうとしたが、それもやめた。

「大丈夫だろう」

彼は漸く普通の人の断案に帰着する事が出来た。しかし細君の病氣
に対して神経の鋭敏になっている彼には、それが何人もこういう場合

に取らなければならぬ尋常の手續きのようになされたのである。

細君の病氣には熟睡が一番の薬であつた。長時間彼女の傍に坐つて、心配そうにその顔を見詰めている健三に何よりも有難いその眠りが、静かに彼女の^{まぶた}瞼の上に落ちた時、彼は天から降る甘露をまのあたり見るような氣が常にした。しかしその眠りがまた余り長く続き過ぎると、今度は自分の視線から隠された彼女の眼がかえつて不安の種になつた。ついに^{まつげ}睫毛の^{とざ}鎖している奥を見るために、彼は^{たわい}正体なく寐入つた細君を、わざわざ^{ゆす}揺り起して見る事が折々あつた。細君がもつと寐かして置いてくれれば^い好いのにという訴えを疲れた顔色に現わして重い瞼を開くと、彼はその時始めて後悔した。しかし彼の神経はこんな氣の毒な^{まね}真似をしてまでも、彼女の実在を確かめなければ承知し

なかつたのである。

やがて彼は寐衣ねまきを着換えて、自分の床に入つた。そうして濁りながら動いているような彼の頭を、静かな夜の支配に任せた。夜はその濁りを清めてくれるには余りに暗過ぎた、しかし騒がしいその動きを止めるには充分静かであつた。

あくるあさ
翌朝彼は自分の名を呼ぶ細君の声で眼を覚ました。

あなた
「貴夫もう時間ですよ」

まだ床を離れない細君は、手を延ばして彼の枕元から取つた袂時計たもとどけいを眺めていた。下女げじよが俎板まないたの上で何か刻む音が台所の方で聞こえた。

おんな
「婢はもう起きてるのか」

さつき
「ええ。先刻起しに行つたんです」

細君は下女を起して置いてまた床の中に這入ったのである。健三はすぐ起き上がった。細君も同時に立った。

昨夜の事は二人ともまるで忘れたように何にもいわなかった。

五十二

二人は自分たちのこの態度に対して何の注意も省察も払わなかった。二人は二人に特有な因果関係を有っている事を冥々の裡に自覚していた。そうしてその因果関係が一切の他人には全く通じないのだという事も能く呑み込んでいた。だから事状を知らない第三者の眼に、自分たちがあるいは変に映りはしまいかという疑念さえ起さなかった。

た。

健三は黙って外へ出て、例の通り仕事をした。しかしその仕事の真
際中に彼は突然細君の病気を想像する事があつた。彼の眼の前に夢を
見ているような細君の黒い眼が不意に浮んだ。すると彼はすぐ自分の
立っている高い壇から降りて宅へ帰らなければならぬような気がし
た。あるいは今にも宅から迎が来るような心持になつた。彼は広い室
の片隅にいて真ん向うの突当りにある遠い戸口を眺めた。彼は仰向い
て兜の鉢金を伏せたような高い丸天井を眺めた。仮漆で塗り上げた角
材を幾段にも組み上げて、高いものを一層高く見えるように工夫した
その天井は、小さい彼の心を包むに足りなかつた。最後に彼の眼は自
分の下に黒い頭を並べて、神妙に彼のいう事を聴いている多くの青年

の上に落ちた。そうしてまた卒然として現実に帰るべく彼らから余儀なくされた。

これほど細君の病気に悩まされていた健三は、比較的島田のために崇^{たた}られる恐れを抱^{いだ}かなかつた。彼はこの老人を因^{いん}業^{ごう}で強^{ごう}慾^{よく}な男と思っていた。しかし一方ではまたそれらの性癖を充分發揮する能力がないものとしてむしろ見^み縊^{くび}つてもいた。ただ要^いらぬ会談に惜い時間を潰^{つぶ}されるのが、健三には或種類の人の受ける程度より以上の煩いになった。

「何をいつて来る気かしら、この次は」

襲^おわれる事を予期して、暗^{あん}にそれを苦にするような健三の口振^{くちぶり}が、細君の言葉を促がした。

「どうせ分っているじゃありませんか。そんな事を気になさるより早く絶交した方がよっぽど得ですわ」

健三は心の裡で細君のいう事を肯が^{うけ}った。しかし口ではかえって反対な返事をした。

「それほど気にしちゃいないさ、あんな者。もともと恐ろしい事なんかないんだから」

「恐ろしいって誰もいやしませんわ。けれども面倒臭^{めんどくさ}いにや違ういでしょう、いくら貴夫^{あなた}だつて」

「世の中にはただ面倒臭い位な単純な理由でやめる事の出来ないものがいくらでもあるさ」

多少片意地の分子を含んでいるこんな会話を細君と取り換わせた健

三は、その次島田の来た時、例^{いつも}よりは忙がしい頭を抱えているにもか
かわらず、ついに面会を拒絶する訳に行かなかつた。

島田のちと話したい事があるといったのは、細君の推察通りやつぱ
り金の問題であつた。隙^{すき}があつたら飛び込もうとして、この間から覬^{ねらい}
を付けていた彼は、何時まで待つても際限がないとでも思つたもの
か、機会のあるなしに頓着^{とんじゃく}なく、ついに健三に肉薄^{にくはく}し始めた。
「どうも少し困るので。外にどこといつて頼みに行く所もない私^{わたし}なん
だから、是非一つ」

老人の言葉のどこかには、義務として承知してもらわなくっちゃ困
るといった風の横着さが潜^{ひそ}んでいた。しかしそれは健三の神経を自尊
心の一角において傷^{いた}め付けるほど強くも現われていなかった。

健三は立つて書斎の机の上から自分の紙入を持って来た。一家の會計を司どつていない彼の財囊は無論輕かつた。空のまま硯箱の傍に幾日も横たわっている事さえ珍らしくはなかつた。彼はその中から手に触れるだけの紙幣を攫み出して島田の前に置いた。島田は変な顔をした。

「どうせ貴方の請求通り上げる訳には行かないんです。それでもありつたけ悉皆上げたんですよ」

健三は紙入の中を開けて島田に見せた。そうして彼の歸つたあとで、空の財布を客間へ放り出したまままた書斎へ入った。細君には金を遣つた事を一口もいわなかつた。

五十三

翌日^{あくるひ}例刻に帰った健三は、机の前に坐^{すわ}つて、大事らしく何時もの所に置かれた昨日^{きのう}の紙入に眼を付けた。革で拵^{こし}らえた大型のこの二つ折は彼の持物としてむしろ立派過ぎる位上等な品であつた。彼はそれを倫敦^{ロンドン}の最も賑^{にぎ}やかな町で買ったのである。

外国から持つて帰った記念が、何の興味も惹^ひかなくなりつつある今の彼には、この紙入も無用の長物と見える外はなかった。細君^{なげ}が何故^{なぜ}丁寧^{ていねい}にそれを元の場所へ置いてくれたのだらうかとさえ疑つた彼は、皮肉な一瞥^{いちべつ}を空っぽうの人物に与えたぎり、手も触れずに幾日かを過ごした。

その内何かで金の要^いる日が来た。健三は机の上の紙入を取り上げて細君の鼻の先へ出した。

「おい少し金を入れてくれ」

細君は右の手で物指^{ものさし}を持ったまま夫の顔を下から見上げた。

「這^{はい}入^{はい}つてるはずですよ」

彼女はこの間島田の帰ったあとで何事も夫から聴こうとしなかった。それで老人に金を奪^とられたことも全く夫婦間の話題^{のぼ}に上^{のぼ}っていないかった。健三は細君が事状を知らないでこういうのかと思った。

「あれはもう遣^やつちやつたんだ。紙入は疾^とうから空^とっぽうになつてゐるんだよ」

細君は依然として自分の誤解に気が付かないらしかった。物指を畳

の上へ投げ出して手を夫の方へ差し延べた。

「ちよつと拝見」

健三は馬鹿々々しいという風をして、それを細君に渡した。細君は中を検^{あら}ためた。中からは四、五枚の紙幣^{さつ}が出た。

「そらやつぱり入ってるじゃありませんか」

彼女は手垢^{てあか}の付いた皺^{しわ}だらけの紙幣を、指の間に挟んで、ちよつと胸のあたりまで上げて見せた。彼女の挙動は自分の勝利に誇るものの如く微^{かす}かな笑に伴なつた。

「何時入れたのか」

「あの人の歸つた後です」

健三は細君の心遣^{うれ}を嬉しく思うよりもむしろ珍らしく眺めた。彼の

理解している細君はこんな気の利いた事を滅多にする女ではなかったのである。

「己おれが内所ないしょで島田に金を奪とられたのを気の毒とでも思つたものかしら」

彼はこう考えた。しかし口へ出してその理由わけを彼女に訊きき糺ただして見る事はしなかった。夫と同じ態度をついに失わずにいた彼女も、自ら進んで己おのれを説明する面倒あえを敢てしなかった。彼女の填補てんぽした金ばかりして黙つて受取られ、また黙つて消費されてしまった。

その内細君の御腹おなかが段々大きくなって来た。起居たちいに重苦しそうな呼吸きをし始めた。気分も能く変化よした。

「妾わたくし今度んだはことによると助からないかも知れませんよ」

彼女は時々何に感じてかこういつて涙を流した。大抵は取り合わずにいる健三も、時として相手にさせられなければ済まなかった。

「何故^{なぜ}だい」

「何故だかそう思われて仕方がないんですもの」

質問も説明もこれ以上には上^{のぼ}る事の出来なかった言葉のうちに、ぼんやりした或ものが常に潜んでいた。その或ものは単純な言葉を伝わって、言葉の届かない遠い所へ消えて行つた。鈴^{りん}の音^ねが鼓膜の及ばない幽^{かす}かな世界に潜り込むように。

彼女は悪阻^{つわり}で死んだ健三の兄の細君の事を思い出した。そうして自分が長女を生む時に同じ病で苦しんだ昔と照し合せて見たりした。もう二、三日食物が通らなければ滋養灌腸^{かんちよう}をするはずだった際どいところ

ろを、よく通り抜けたものだなどと考えると、生きている方がかえって偶然のような気がした。

「女は詰らないものね」

「それが女の義務なんだから仕方がない」

健三の返事は世間並であつた。けれども彼自身の頭で批判すると、全くの出鱈目^{でたらめ}に過ぎなかつた。彼は腹の中で苦笑した。

五十四

健三の気分にも上^{あが}り下^{さが}りがあつた。出任せにもせよ細君の心を休めるような事ばかりはいつていなかつた。時によると、不快そうに寐^ねて

いる彼女の体^{てい}たらくが癪^{しゃく}に障^{さや}って堪^{こた}らなくなつた。枕元^{まくらもと}に突^つつ立^たつたまま、わざと慳貪^{けんどん}に要^いらざる用^{もち}を命^{めい}じて見^みたりした。

細君も動^{うご}かなかつた。大きな腹^{はら}を置^おへ着^きけたなり打^うつとも蹴^けるとも勝手にしろという態度^{たいど}をとつた。平生^{へいぜい}からあまり口数^{くすう}を利^きかない彼女は益^{ますます}沈黙^{しんもく}を守^{まも}つて、それが夫^おの氣^きを焦^い立^らたせるのを目^めの前^{まえ}に見^みながら澄^すましていた。

「つまりしぶといのだ」

健三の胸^{むね}にはこんな言葉^{ことば}が細君^{すべ}の凡^{すべ}ての特色^{とくしき}でもあるかのように深く刻^きみ付^つけられた。彼は外^{ほか}の事^{こと}をまるで忘^{わす}れてしまわなければならなかつた。しぶといという観^{かん}念^{ねん}だけがあらゆる注意^{ちうい}の焦^き点^{てん}になつて来た。彼はよそを真闇^{まっくら}にして置^おいて、出来るだけ強烈^{きやうりやう}な憎^{にく}悪^{あく}の光^{ひかり}をこの

四字の上に投げ懸けた。細君はまた魚か蛇のように黙ってその憎悪を受取った。従つて人目には、細君が何時でも品格のある女として映る代りに、夫はどうしても氣違染みた癩癪持かんしゃくもちとして評価されなければならなかった。

「貴夫あなたがそう邪慳じゃけんになさると、また歇私ヒステリー的里を起しますよ」

細君の眼からは時々こんな光が出た。どういふものか健三は非道ひどくその光を怖れた。同時に劇はげしくそれを悪にくんだ。我慢な彼は内心に無事を祈りながら、外部うわべでは強しいて勝手にしろという風を装った。その強硬な態度のどこかに何時でも仮装に近い弱点があるのを細君は能よく承知していた。

「どうせ御産で死んでしまうんだから構やしない」

彼女は健三に聞えよがしに眩くらやいた。健三は死んじまえといいたくなつた。

或晩彼はふと眼を覚まして、大きな眼を開いて天井を見詰っている細君を見た。彼女の手には彼が西洋から持つて歸つた髪剃かみそりがあつた。彼女が黒檀エボニーの鞘さやに折り込まれたその刃を真直まっすぐに立てずに、ただ黒い柄えだけ握にぎっていたので、寒い光は彼の視覚を襲わずに済んだ。それでも彼はぎよつとした。半身を床の上に起して、いきなり細君の手から髪剃もを撈もぎ取つた。

「馬鹿な真似をするな」

かういうと同時に、彼は髪剃を投げた。髪剃は障子に簾はめ込んだ硝ガラ子スに中あたつてその一部分を摧くだいて向う側の縁えんに落ちた。細君は茫然ぼうぜんとし

て夢でも見ている人のように一口も物をいわなかった。

彼女は本当に情に逼せまつて刃物三昧はものざんまいをする気なのだろうか、または病

気の発作に自己の意志を捧げべく余儀なくされた結果、無我夢中で切

れものを弄もてあそぶのだろうか、あるいは単に夫に打ち勝とうとする女の

策略からこうして人を驚かすのだろうか、驚ろかすにしてもその真意

は果してどこにあるのだろうか。自分に対する夫を平和で親切な人に

立ち返らせるつもりなのだろうか、またはただ浅墓な征服慾に駆いられ

ているのだろうか、——健三は床の中で一つの出来事を五いっすじ条にも六むすじ条

にも解釈した。そうして時々眠れない眼をそつと細君の方に向けてそ

の動静をうかがった。寐ねているとも起きているとも付かない細君は、

まるで動かなかつた。あたかも死を銜てらう人のようであつた。健三はま

た枕の上でまた自分の問題の解決に立ち帰った。

その解決は彼の実生活を支配する上において、学校の講義よりも遙かに大切であつた。彼の細君に対する基調は、まったく全その解決一つでちゃんと定められなければならなかつた。今よりずっと単純であつた昔、彼は一図に細君の不可思議な挙動を、病のためとのみ信じ切つてゐた。その時代には発作の起るたびに、神の前に己れを懺悔する人の誠を以て、彼は細君の膝下しつか ひざまに跪ひざまずいた。彼はそれを夫として最も親切でまた最も高尚な処置と信じていた。

「今だつてその原因が判然はつきり分りさえすれば」

彼にはこういう慈愛の心が充ち満ちていた。けれども不幸にしてその原因は昔のように単純には見えなかつた。彼はいくらでも考えなけ

ればならなかった。到底解決の付かない問題に疲れて、とろとろと眠るとまたすぐ起きて講義をしに出掛けなければならなかった。彼は昨^{ゆう}夕^べの事について、ついに一言も細君^{ひつじ}に口を利く機会を得なかった。細君も日の出と共にそれを忘れてしまったような顔をしていた。

五十五

こういう不愉快な場面の後^{あと}には大抵仲裁者としての自然が二人の間に這入^{はい}って来た。二人は何時となく普通夫婦の利くような口を利き出した。

けれども或時の自然は全くの傍観者に過ぎなかった。夫婦はどこま

で行つても背中合せのまままで暮した。二人の關係が極端な緊張の度合に達すると、健三はいつも細君に向つて生家へ歸れといった。細君の方ではまた歸ろうが歸るまいがこつちの勝手だという顔をした。その態度が憎らしいので、健三は同じ言葉を何遍でも繰り返して憚^{はげ}らなかつた。

「じゃ当分子供を伴^つれて宅^{うち}へ行つていましょう」

細君はこういつて一旦里へ歸つた事もあつた。健三は彼らの食料を毎月送^{まい}つて遣^やるといふ条件^{もと}の下に、また昔のような書生生活に立ち歸れた自分を喜んだ。彼は比較的広い屋敷に下女^{げじよ}とたつた二人ぎりになつたこの突然の変化を見て、少しも淋^{さび}しいとは思わなかつた。

「ああ晴^{せい}々^{せい}して好^いい心持だ」

彼は八畳の座敷の真中に小さな餉台ちやぶだいを据えてその上で朝から夕方までノートを書いた。丁度極暑の頃だったので、身体からだの強くない彼は、よく仰向あおむけになつてばかりと畳の上に倒れた。何時替えたとも知れない時代の着いたその畳には、彼の脊中せなかを蒸すような黄色い古びが心しんまで透つていた。

彼のノートもまた暑苦しいほど細かな字で書き下くだされた。蠅はえの頭と
いうより外に形容のしようのないその草稿を、なるべくだけ余計拵こしらえ
るのが、その時の彼に取つては、何よりの愉快であつた。そして苦痛
であつた。また義務であつた。

巣鴨すがもの植木屋の娘とかいう下女は、彼のために二、三の盆栽を宅か
ら持つて来てくれた。それを茶の間の縁えんに置いて、彼が飯を食う時給

仕をしながら色々な話をした。彼は彼女の親切を喜こんだ。けれども彼女の盆栽を軽蔑けいべつした。それはどこの縁日へ行っても、二、三十銭出せば、鉢ごと買える安価な代物しろものだったのである。

彼は細君の事をかつて考えずにノートばかり作っていた。彼女の里へ顔を出そうなどという気はまるで起らなかった。彼女の病氣に対する懸念ことごとも悉く消えてしまった。

「病氣になつても父母が付いているじゃないか。もし悪ければ何とかいつて来るだろう」

彼の心は二人一所にいる時よりも遙はるかに平静であつた。

細君の關係者に会わないのみならず、彼はまた自分の兄や姉にも会に行かなかつた。その代り向うでも来なかつた。彼はたった一人

で、日中の勉強につづく涼しい夜を散歩に費やした。そうして継布の
あたたつた青い蚊帳かやの中に入つて寐たね。

一カ月あまりすると細君が突然遣つて来た。その時健三は日のか
ぎつた夕暮の空の下に、広くもない庭先を逍遙あちこちしていた。彼の歩みが
書斎の縁側の前へ来た時、細君は半分朽ち懸けた枝折戸しおりどの影から急に
姿を現わした。

「貴夫故あなたもとのようになつて下さらなくつて」

健三は細君の穿はいている下駄げたの表が変にささくれて、その後うしろの方が
如何いかにも見苦しく擦すり減らされているのに気が付いた。彼は憐れあわに
なつた。紙入の中から三枚の一元紙幣を出して細君の手に握らせた。

「見つともないからこれで下駄でも買ったら好いだろう」

細君が帰ってから幾日いくか目か経った後のち、彼女の母は始めて健三を訪ずれた。用事は細君が健三に頼んだのと大同小異で、もう一遍彼らを引取ってくれという主意を畳の上で布ふえん衍したに過ぎなかった。既に本人に帰りたい意志があるのを拒絶するのは、健三から見ると無情な挙動ふるまいであつた。彼は一も二もなく承知した。細君はまた子供を連れて駒込こまごめへ帰つて来た。しかし彼女の態度は里へ行く前と毫ごうも違つていなかった。健三は心のうちで彼女の母に騙だまされたような気がした。

こうした夏中の出来事を自分だけで繰り返して見るたびに、彼は不愉快になつた。これが何時まで続くのだろうかと考えたりした。

同時に島田はちよいちよい健三の所へ顔を出す事を忘れなかった。

利益の方面で一度手掛りを得た以上、放したらそれつきりだという懸念がなおさら彼を蒼蠅くした。うるさ健三は時々書斎に入って、例の紙入を老人の前に持ち出さなければならなかった。

「い好い紙入ですね。へええ。外国のものはやつぱりどこか違いますね」

島田は大きな二つ折を手にとって、さも感服したらしく、裏表を打返して眺めたりした。

「失礼ながらこれでどの位します。あちらでは」

「たしか十志シリシグだっただと思います。日本の金にすると、まあ五円位なものでしょう」

「五円？——五円は随分好い価ねですね。浅草あさくさの黒船町くろふねちょうに古くから私わたしの知ってる袋物屋があるが、彼所あそこならもつとずっと安く拵こしらえてくれますよ。こんだ要いる時にや、私が頼んで上げましょう」

健三の紙入は何時も充実していなかった。全く空虚からの時もあった。そういう場合には、仕方がないので何時まで経つても立ち上がらなかった。島田も何かに事寄せて尻しりを長くした。

「小遣を遣やらないうちは帰らない。厭いやな奴だ」

健三は腹の内で憤った。しかしいくら迷惑を感じても細君の方から特別に金を取って老人に渡す事はしなかった。細君もその位な事ならといった風をして別に苦情を鳴らさなかった。

そうこうしているうちに、島田の態度が段々積極的になって来た。

二十、三十と纏まとった金を、平氣に向うから請求し始めた。

「どうか一つ。私もこの年になって倚かかる子はなし、依怙たよりにするのは貴方あなた一人なんだから」

彼は自分の言葉遣いの横着さ加減にさえ氣が付いていなかった。それでも健三がむつとして黙っていると、凹くぼんだ鈍い眼を狡猾こうかつらしく動かして、じろじろ彼の様子を眺める事を忘れなかった。

「これだけの生活くらしをしていて、十や二十の金の出来ないはずはない」
彼はこんな事まで口へ出していった。

彼が帰ると、健三は厭な顔をして細君に向った。

「ありや成し崩しに己おれを侵蝕しんしょくする氣なんだね。始め一度に攻め落そうとして断られたもんだから、今度は遠巻きにしてじりじり寄つて来よ

うってんだ。実に厭な奴だ」

健三は腹が立ちさえすれば、よく実にとか一番とか大とかいう最大級を使つて鬱憤うつぶんの一端を洩もらしたがる男であつた。こんな点になると細君の方はしぶとい代りに大分落付だいぶおちついていた。

「貴夫あなたが引つ掛るから悪いのよ。だから始めから用心して寄せ付けないうようになされば好いのに」

健三はその位の事なら最初から心得ているといわぬばかりの様子を、むつとした頬ほおと唇とに見せた。

「絶交しようと思えば何時だつて出来るさ」

「しかし今まで付合っただけが損になるじゃありませんか」

「そりや何の関係もない御前から見ればそうさ。しかし己は御前とは

違うんだ」

細君には健三の意味が能く通じなかった。

「どうせ貴夫の眼から見たら、妾なんぞは馬鹿でしょうよ」

健三は彼女の誤解を正してやるのさえ面倒になった。

二人の間に感情の行違ゆきちがひでもある時は、これだけの会話すら交換されなかった。彼は島田の後影を見送ったまま黙もくつてすぐ書齋へ入った。

そこで書物も読まず筆も執らずただ凝じつと坐すわっていた。細君の方でも、家庭と切り離されたようなこの孤独な人に何時いつまでも構かまう気色けしきを見せなかった。夫が自分の勝手で座敷牢ざしきろうへ入っているのだから仕方がない位に考えて、まるで取り合ずにいた。

五十七

健三の心は紙屑^{かみくず}を丸めたようにくしゃくしゃした。時によると肝癰^{かんしやく}の電流を何かの機会に応じて外^{ほか}へ洩^もらさなければ苦しくって居堪^{いたた}まれなくなつた。彼は子供が母に強請^{せび}つて買つてもらつた草花の鉢などを、無意味に縁側から下へ蹴飛^{けと}ばして見たりした。赤ちやけた素焼^{すやき}の鉢が彼の思い通りにがらがらと破^{われ}るのさえ彼には多少の満足になつた。けれども残酷^{むご}たらしく摧^{くだ}かれたその花と莖^{あわ}の憐^{あわ}れな姿を見るや否や、彼はすぐまた一種の果敢^{はか}ない氣分に打ち勝たれた。何にも知らない我子の、嬉^{うれ}しがっている美しい慰みを、無慈悲に破壊したのは、彼らの父であるという自覚は、なおさら彼を悲しくした。彼は半ば自分

の行為を悔いた。しかしその子供の前にわが非を自白する事は敢てし得なかつた。

「己の責任じゃない。必竟こんな氣違じみた真似を己にさせるものは誰だ。そいつが悪いんだ」

彼の腹の底には何時でもこういう弁解が潜んでいた。

平静な会話は波だった彼の氣分を沈めるに必要であつた。しかし人を避ける彼に、その会話の届きようはずはなかつた。彼は一人いて一人自分の熱で燻ぶるような心持がした。常でさえ有難くない保険会社の勧誘員などの名刺を見ると、大きな声をして罪もない取次の下女を叱つた。その声は玄関に立っている勧誘員の耳にまで明らかに響いた。彼はあとで自分の態度を恥た。少なくとも好意を以て一般の人類

に接する事の出来ない己おのれを怒いかった。同時に子供の植木鉢を蹴飛ばした場合と同じような言訳を、堂々と心の裡うちで読み上げた。

「己おれが悪いのじゃない。己の悪くない事は、仮令たといあの男に解とっていないくつても、己には能く解よっている」

無信心な彼はどうしても、「神には能く解とっている」という事が出来なかった。もしそういい得たならばどんなに仕合せだろうという気さえ起らなかった。彼の道徳は何時でも自己に始まった。そうして自己に終るぎりであつた。

彼は時々金の事を考えた。何故物質的なぜの富を目標めやすとして今日こんにちまで働いて来なかったのだらうと疑う日もあつた。

「己だつて、専門にその方ばかり遣やりや」

彼の心にはこんな己惚おのぼれもあつた。

彼はけち臭い自分の生活状態を馬鹿らしく感じた。自分より貧乏な親類の、自分より切り詰めた暮し向に悩んでいるのを気の毒に思つた。極めて低級な慾望で、朝から晩まで齷齪あくせくしているような島田をさえ憐れに眺めた。

「みんな金が欲しいのだ。そうして金より外には何にも欲しくないのだ」

こう考えて見ると、自分が今まで何をして来たのか解らなくなつた。

彼は元来儲もうける事の下手へたな男であつた。儲けられてもその方に使う時間を惜がる男であつた。卒業したてに、悉ことごとく他の口ほかを断つて、ただ

一つの学校から四十円貰^{もら}つて、それで満足していた。彼はその四十円の半分を阿爺^{おやじ}に取られた。残る二十円で、古い寺の座敷を借りて、芋や油揚げ^{あぶらげ}ばかり食っていた。しかし彼はその間に遂に何事も仕出かさなかつた。

その時分の彼と今の彼とは色々な点において大分^{だいぶ}変っていた。けれども経済に余裕^{ゆとり}のないのと、遂に何事も仕出かさないのとは、どこまで行っても変りがなさそうに見えた。

彼は金持になるか、偉くなるか、二つのうちどつちかに中途半端な自分を片付けたくなつた。しかし今から金持になるのは迂闊^{うかつ}な彼に取つてもう遅かつた。偉くならうとすればまた色々な塵勞^{わづらい}が邪魔をした。その塵勞の種をよくよく調べて見ると、やっぱり金のないのが大

原因になつていた。どうして好いか解らない彼はしきりに焦れた。金の力で支配出来ない真に偉大なものが彼の眼に這入つて来るにはまだ大分間があつた。

五十八

健三は外国から歸つて来た時、既に金の必要を感じた。久しぶりにわが生れ故郷の東京に新らしい世帯を持つ事になった彼の懷中には一片の銀貨さえなかった。

彼は日本を立つ時、その妻子を細君の父に託した。父は自分の邸内にある小さな家を空けて彼らの住居に充てた。細君の祖父母が亡くな

るまでいたその家は狭いながらさほど見苦しくもなかった。張交はりまぜの襖ふすまには南湖なんこの画えだの鵬齋ぼうさいの書だの、すべて亡くなつた人の趣味を偲しのばせる記念かたみと見るべきものさえ故もとの通り貼はり付けてあつた。

父は官吏であつた。大して派出はでな暮しの出来る身分ではなかつたけれども、留守中手元に預かつた自分の娘や娘の子に、苦しい思いをさせるほど窮してもいなかつた。その上健三の細君へは月々いくらかの手当が公けから下りた。健三は安心してわが家族を後に遺した。

彼が外国にいるうち内閣が變つた。その時細君の父は比較的安全な閑職からまた引張出されて劇はげしく活動しなければならぬ或ある位置に就いた。不幸にしてその新らしい内閣はすぐ倒れた。父は崩壞の渦うちの中に捲まき込まれなければならなかつた。

遠い所でこの変化を聴いた健三は、同情に充ちた眼を故郷の空に向けた。けれども細君の父の経済状態に関しては別に顧慮する必要のないものとして、殆んど心を悩ませなかった。

迂闊な彼は帰ってから其所に注意を払わなかった。また気も付かなかった。彼は細君が月々貰う二十円だけでも子供二人に下女を使つて充分遣つて行ける位に考えていた。

「何しろ家賃が出ないんだから」

こんな呑気な想像が、実際を見た彼の眼を驚愕で丸くさせた。細君は夫の留守中に自分の不斷着をことごとく着切ってしまった。仕方がないので、しまいには健三の置いて行った地味な男物を縫い直して身に纏った。同時に蒲団からは綿が出た。夜具は裂けた。それでも傍に

見ている父はどうして遣る訳にも行かなかつた。彼は自分の位地を失つた後、^{あと}相場に手を出して、多くもない貯蓄を悉く^{ことごと}亡くしてしまつたのである。

首の回らないほど高い襟^{カラ}を掛けて外国から歸つて来た健三は、この惨澹^{みじめ}な境遇に置かれたわが妻子を黙つて眺めなければならなかつた。ハイカラな彼はアイロニーのために手^て非道^{ひど}く打ち据えられた。彼の唇は苦笑する勇氣さえ有^もたなかつた。

その内彼の荷物が着いた。細君に指輪一つ買つて来なかつた彼の荷物は、書籍だけであつた。狭苦しい隠居所のなかで、彼はその箱の蓋^{ふた}さえ開ける事の出来ないのを馬鹿らしく思った。彼は新らしい家を探し始めた。同時に金の工面もしなければならなかつた。

彼は唯一の手段として、今まで継続して来た自分の職を辞した。彼はその行為に伴なつて起る必然な結果として、一時賜金いちじしきんを受取る事が出来た。一年勤めれば役をやめた時に月給の半額をくれるという規定に従つて彼の手に入ったその金額は、無論大したものではなかった。けれども彼はそれで漸やっと日常生活に必要な家具家財ととのを調べた。

彼は僅わずばかりの金を懷かにして、或る古い友達と一所に方々の道具屋などを見て歩いた。その友達がまた品物の如何いかんにかかわらずむやみに価値ねぎ切り倒す癖を有つていたので、彼はただ歩くために少なからぬ時間を費やさされた。茶盆、烟草盆タバコぼん、火鉢ひばち、井鉢どんぶりばち、眼いに入るものはいくらでもあつたが、買えるのは滅多に出て来なかつた。これだけに負けて置けと命令するようにいつて、もし主人がその通りにしないと、友達

は健三を店先に残したまま、さつさと先へ歩いて行つた。健三も仕方なしに後を追懸^{おっかけ}なければならなかつた。たまに愚図々々していると、彼は大きな声を出して遠くから健三を呼んだ。彼は親切な男であつた。同時に自分の物を買うのか他の物^{ひと}を買うのか、その区別^{わきま}を弁えていないように猛烈な男であつた。

五十九

健三はまた日常使用する家具の外に、本棚だの机だのを新調しなければならなかつた。彼は洋風の指物^{さしもの}を渡世^{とせ}にする男の店先に立つて、しきりに算盤^{そろばん}を弾^{はじ}く主人と談判をした。

彼の誂あつらえた本棚には硝子戸ガラスども後部うしろも着いていなかった。塵埃ほこりの積る位は懷中に余裕のない彼の意とする所ではなかった。木がよく枯れていないので、重い洋書を載せると、棚板が気の引けるほど撓しなった。

こんな粗末な道具ばかりを揃えるのにさえ彼は少からぬ時間を費やした。わざわざ辞職して貰もらった金は何時の間にかもうなくなっていた。迂闊うかつな彼は不思議そうな眼を開いて、索然たる彼の新居を見廻した。そうして外国にいる時、衣服を作る必要に逼せまられて、同宿の男から借りた金はどうして返して好いいか分らなくなってしまったように思ひ出した。

そこへその男からもし都合が付くなら算段してもらいたいという催促状が届いた。健三は新らしく拵こしらえた高い机の前に坐すわって、少時しばらく彼の

手紙を眺めていた。

僅わずかの間とはいいいながら、遠い国で一所いっしょに暮したその人の記憶は、健三に取って淡い新しさを帯びていた。その人は彼と同じ学校の出身であつた。卒業の年もそう違わなかつた。けれども立派な御役人として、ある重要な事項取調のためという名義もとの下に、官命で遣やつて来たその人の財力と健三の給費との間には、殆ほとんど比較にならないほどの懸隔があつた。

彼は寢室の外に応接間も借りていた。夜になると繻子しゅすで作った刺繡ぬいとりのある綺麗きれいな寝衣ナイトガウンを着て、暖かそうに暖炉の前で書物などを読んでいた。北向の狭苦しい部屋で押し込められたように凝じつと竦すくんでいる健三は、ひそかに彼の境遇を羨うらやんだ。

その健三には昼食を節約した憐れな経験さえあつた。ある時の彼は表へ出た歸掛に途中で買ったサンドウィッチを食いながら、広い公園の中を目的もなく歩いた。斜めに吹きかける雨を片々の手に持った傘で防けつつ、片々の手で薄く切った肉と麵麩を何度にも頬張るのが非常に苦しかった。彼は幾たびか其所にあるベンチへ腰を卸そうとしては躊躇した。ベンチは雨のために悉く濡れていたのである。

ある時の彼は町で買って来たビスケットの缶を午になると開いた。そうして湯も水も吞まずに、硬くて脆いものをぼりぼり噛み摧いては、生唾の力で無理に嚥み下した。

ある時の彼はまた馭者や労働者と一所に如何わしい一膳飯屋で形ばかりの食事を済ました。其所の腰掛の後部は高い屏風のように切立つ

ているので、普通の食堂の如く、広い室^{へや}を一目に見渡す事は出来なかつたが、自分と一列に並んでいるものの顔だけは自由に眺められた。それは皆な何時湯に入つたか分らない顔であつた。

こんな生活をしている健三が、この同宿の男の眼にはさも氣の毒に映つたと見えて、彼は能く健三を午餐^{ひるめし}に誘い出した。錢湯へも案内した。茶の時刻には向うから呼びに来た。健三が彼から金を借りたのはこうして彼と大分^{だいぶん}懇意になつた時の事であつた。

その時彼は反故^{ほご}でも棄^すてるように無雜作な態度を見せて、五磅^{ポンド}のバシクノート^{シクノート}を二枚健三の手に渡した。何時返してくれとは無論いわなかつた。健三の方でも日本へ歸つたらどうにかなるだろう位に考えた。

日本へ歸つた健三は能くこのバンクノートの事を覚えていた。けれども催促状を受取るまでは、それほど急に返す必要が出て来ようとは思わなかった。行き詰つた彼は仕方なしに、一人の古い友達の所へ出掛けて行つた。彼はその友達の大した金持でない事を承知していた。しかし自分よりも少しは融通の利く地位にある事も呑み込んでいた。友達は果して彼の請求を容れて、要るだけの金を彼の前に揃えてくれた。彼は早速それを外国で恩を受けた人の許へ返しに行つた。新らしく借りた友達へは月に十円ずつの割で成し崩しに取ってもらふ事に極めた。

こんな具合にして漸と東京に落付いた健三は、物質的に見た自分の、如何にも貧弱なのに気が付いた。それでも金力を離れた他の方面において自分が優者であるという自覚が絶えず彼の心に往来する間は幸福であつた。その自覚が遂に金の問題で色々に攪き乱されてくる時、彼は始めて反省した。平生何心なく身に着けて外へ出る黒木綿の紋付さえ、無能力の証拠のように思われ出した。

「この己をまた強請りに来る奴がいるんだから非道い」

彼は最も質の悪いその種の代表者として島田の事を考えた。

今の自分がどの方角から眺めても島田より好い社会的地位を占めてゐるのは明白な事実であつた。それが彼の虚栄心に少しの反響も与えないのもまた明白な事実であつた。昔し自分を呼び捨てにした人から

今となつて鄭寧^{ていねい}な挨拶^{あいさつ}を受けるのは、彼に取つて何の満足にもならなかつた。小遣^{こづかい}の財源のように見込まれるのは、自分を貧乏人^{みみな}と見做している彼の立場から見て、腹が立つだけであつた。

彼は念のために姉の意見を訊^{たず}ねて見た。

「一体どの位困つてるんでしょうね、あの男は」

「そうさね。そう度々無心をいつて来るようじゃ、随分苦しいのかも知れないね。だけど健ちゃんだってそうそう他^{ひと}にばかり貢^{みつ}いでいた日にや際限がないからね。いくら御金が取れたつて」

「御金がそんなに取れるように見えますか」

「だって宅^{うち}なんぞに比べれば、御前さん、御金がいくらでも取れる方じゃないか」

姉は自分の宅の活計くらしを標準にしていた。相変らず口数の多い彼女は、比田ひだが月々貰もらうものを満足に持つて歸かへった例ためしのない事や、俸給の少ない割に交際費の要いる事や、宿直が多いので弁当代だけでも随分の額たかに上のぼる事や、毎月の不足はやつと盆暮の賞与で間に合あわせている事などを詳しく健三に話して聞きかせた。

「その賞与だつて、そつくり私あたしの手に渡してくれるんじゃないんだからね。だけど近頃じゃ私たち二人はまあ隠居見みたようなもので、月々食料を彦ひこさんの方へ遣やつて賄まかなつてもらつてるんだから、少しは樂にならなけりやならない訳わけさ」

養子と經濟を別々にしながら一所の家うちに住んでいた姉夫婦は、自分たちの搗ついた餅もちだの、自分たちの買かつた砂糖だのという特別な食物くいものを

有^もつていた。自分たちの所へ来た客に出す御馳走^{ごちそう}などもきつと自分たちの懷中から払う事になっているらしかった。健三は殆^{ほと}んど考えの及ばないような眼付をして、極端に近い一種の個人主義の下に存在しているこの一家の經濟狀態を眺めた。しかし主義も理窟も有たない姉にはまたこれほど自然な現象はなかつたのである。

「健ちゃんなんざ、こんな真似^{まね}をしなくつても済むんだから好いやあね。それに腕があるんだから、稼ぎさいすりゃいくらでも欲しいだけの御金は取れるしさ」

彼女のいう事を黙つて聞いていると、島田などはどこへ行つたか分らなくなつてしまいがちであつた。それでも彼女は最後に付け加えた。

「まあ好いやね。面倒臭めんどくさくなったら、その内都合の好い時に上げましょうとか何とかいつて歸してしまえば。それでも蒼蠅うるさいなら留守を御遣いよ。構う事はないから」

この注意は如何いかにも姉らしく健三の耳に響いた。

姉から要領を得られなかった彼はまた比田を捉つかまえて同じ質問を掛けて見た。比田はただ、大丈夫というだけであつた。

「何しろ故もとの通りあの地面と家作かさくを有つてゐるんだから、そう困つていない事は慥たしかでさあ。それに御藤さんの方へは御縫おぬいさんの方からちゃんちゃんと送金はあるしさ。何でも好い加減な事をいつて来るに違ちがひないから放つて御置きなさい」

比田のいう事もやっぱり好い加減の範圍を脱し得ない上うわつ調子ちようしのも

のには相違なかった。

六十一

しまいに健三は細君に向った。

「一体どういふんだろう、今の島田の実際の境遇っていうのは。姉に訊きいても比田に訊いても、本当の所が能よく分らないが」

細君は気のなさそうに夫の顔を見上げた。彼女は産に間もない大きな腹を苦しそうに抱えて、朱塗しゅぬりの船底枕ふなぞこまくらの上に乱れた頭を載せていた。

「そんなに気になさるなら、御自分で直じかに調べて御覧になるが好いい

じゃありませんか。そうすればすぐ分るでしょう。御姉^{おあね}えさんだつて、今あの人と交際^{つきあ}つていらつしやらないんだから、そんな確^{たしか}な事の知れているはずがないと思いますわ」

「己^{おれ}にはそんな暇なんかないよ」

「それじゃ放つて御置きになればそれまででしょう」

細君の返事には、男らしくもないという意味で、健三を非難する調子があつた。腹で思っている事でもそうむやみに口へ出していわない性質^{たち}に出来上つた彼女は、自分の生家^{さと}と夫との面白くない間柄についてさえ、余り言葉に現わしてつべこべ弁じ立てなかつた。自分と関係のない島田の事などはまるで知らないふりをして澄ましている日も少なくなかつた。彼女の持った心の鏡に映る神経質な夫の影は、いつも

度胸のない偏窟^{へんくつ}な男であつた。

「放つて置け？」

健三は反問した。細君は答えなかつた。

「今までだつて放つて置いてるじゃないか」

細君はなお答えなかつた。健三はふいと立つて書斎へ入つた。

島田の事に限らず二人の間にはこういう光景が能く繰り返された。

その代り前後の關係で反対の場合も時には起つた。――

「御縫^{せきずい}さんが脊髄病^{びよう}なんだそうだ」

「脊髄病^むじゃ六^むずかしいでしょう」

「とても助かる見込はないんだとき。それで島田が心配しているんだ。あの人が死ぬと柴野^{しばの}と御藤^{おふじ}さんとの縁が切れてしまうから、今ま

で毎月送ってくれた例の金が来なくなるかも知れないってね」

「可^{かわ}哀^い想^{そう}ね今から脊髄病なんぞに罹^かっちゃ。まだ若いんでしよう」

「己^{おれ}より一つ上だって話したじゃないか」

「子供はあるの」

「何でも沢山あるような様子だ。幾^{いく}人^{たり}だか能く訊^きいて見ないが」

細君は成人しない多くの子供を後へ遺して死^しに行く、まだ四十に充^みたない夫人の心持を想像に描いた。間近^{せま}に逼^{せま}ったわが産の結果も新たに氣遣われ始めた。重^なそう^{さけ}な腹を眼の前に見ながら、それほど心配もしてくれない男の氣分が、情^{なさけ}なくもありまた羨^{うらや}ましくもあつた。夫はまるで氣が付かなかつた。

「島田がそんな心配をするのも必^{ひつ}竟^{きよう}は平^{へい}生^{ぜい}が悪^いからなんだろうよ。

何でも嫌われているらしいんだ。島田にいわせると、その柴野という男が酒食さけくらいで喧嘩けんか早くつぱやつて、それで何時まで経つても出世が出来なくつて、仕方がないんだそうだけれども、どうもそればかりじゃないらしい。やっぱり島田の方が愛想あいそを尽かされているに違いないんだ」

「愛想を尽かされなくつたつて、そんなに子供が沢山あっちゃどうする事も出来ないでしょう」

「そうさ。軍人だから大方己と同じように貧乏しているんだろうよ」

「一体あの人はどうしてその御藤さんて人と――」

細君は少し躊躇ちゆうちよした。健三には意味が解らなかった。細君はいい直した。

「どうしてその御藤さんて人と懇意になつたんでしょう」

御藤さんがまだ若い未亡人びぼうじんであつた頃、何かの用で扱所あつかいじよへ出なければならぬ事の起つた時、島田はそういう場所へ出つけない女一人を、氣の毒に思つて、色々親切に世話をして遣やつたのが、二人の間に關係の付く始まりだと、健三は小さい時分に誰かから聴いて知つてゐた。しかし戀愛という意味をどう島田に応用して好いか、今の彼には解らなかつた。

「慾よくも手伝つたに違ないね」

細君は何ともいわなかつた。

不治ふじの病氣に悩まされているという御縫さんについての報知たよりが健三の心を和やわげた。何年ぶりにも顔を合せた事のない彼とその人とは、度々会わなければならなかった昔でさえ、殆ほとんど親しく口を利いた例ためしがなかった。席に着くときも座を立つときも、大抵は黙礼を取り換わせるだけで済ましていた。もし交際という文字をこんな間柄にも使ひ得るならば、二人の交際は極めて淡くそうして軽いものであつた。強烈な好いい印象のない代りに、少しも不快の記憶に濁にごされていないその人の面影おもかげは、島田や御常のそれよりも、今の彼に取とつて遥たつとかに尊たつとかつた。人類に対する慈愛の心を、硬くなりかけた彼から唆そそり得る点において。また漠然として散漫な人類を、比較はつきり的判明した一人の代表者に縮めてくれる点において。——彼は死のうとしているその人の姿を、

同情の眼を開いて遠くに眺めた。

それと共に彼の胸には一種の利害心が働いた。何時起るかも知れない御縫さんの死は、狡猾こうかつな島田にまた彼を強請せびる口実を与えるに違なかつた。明らかにそれを予想した彼は、出来る限りそれを避けたいと思つた。しかし彼はこの場合どうして避けるかの策略を講ずる男ではなかつた。

「衝突して破裂するまで行くより外に仕方がない」

彼はこう観念した。彼は手を拱こまぬいで島田の来るのを待ち受けた。その島田の来る前に突然彼の敵かたきの御常が訪ねて来きようとは、彼も思い掛けなかつた。

細君は何時もの通り書斎すわに坐すわっている彼の前に出て、「あの波多はた

野^のつて御婆^{おばあ}さんがとうとう遣^やつて来ましたよ」といった。彼は驚ろくよりもむしろ迷惑^{おくびよう}そうな顔をした。細君にはその態度が愚^{おろ}々々している臆^{おく}病^{びよう}もののように見えた。

「御会いになりますか」

それは、会うなら会う、断るなら断る、早くどっちかに極^きめたら好^すかろうという言葉の遣^{つか}い方であつた。

「会うから上げろ」

彼は島田の来た時と同じ挨拶^{あいさつ}をした。細君は重苦^{おも}しそうに身を起して奥へ立つた。

座敷へ出た時、彼は粗末な衣服を身に纏^{まと}つて、丸まっちく坐^まつて一人の婆さんを見た。彼の心で想像していた御常とは全く変^かつてい

るその質朴な風采が、島田よりも遙かに強く彼を驚ろかした。

彼女の態度も島田に比べるとむしろ反対であつた。彼女はまるで身分の懸隔でもある人の前へ出たような様子で、鄭寧に頭を下げた。言葉遣も慇懃を極めたものであつた。

健三は小供の時分能く聞かされた彼女の生家の話を思い出した。田舎にあつたその住居も庭園も、彼女の叙述によると、善を尽し美を尽した立派なものであつた。床の下を水が縦横に流れているという特色が、彼女の何時でも繰り返す重要な点であつた。南天の柱——そういう言葉もまだ健三の耳に残っていた。しかし小さい健三はその宏大な屋敷がどこの田舎にあるのかまるで知らなかった。それから一度も其所へ連れて行かれた覚えがなかった。彼女自身も、健三の知っている限

り、一度も自分の生れたその大きな家へ帰った事がなかった。彼女の性格を臆おぼろげ気ながら見抜くように、彼の批評眼がだんだん肥こえて来た時、彼はそれもまた彼女の空想から出る例の法螺ほらではないかと考え出した。

健三は自分を出来るだけ富有に、上品に、そして善良に、見せたがったその女と、今彼の前に畏かしこまって坐っている白髪頭の御婆さんしらがあたまとを比較して、時間の齎もたらした対照に不思議そうな眼を注いだ。

御常は昔から肥ふとり肉じしの女であつた。今見る御常も依然として肥つていた。どっちかというと、昔よりも今の方がかえつて肥つてはいはしまいかと疑うたがれる位であつた。それにもかかわらず、彼女は全く変化していた。どこから見ても田舎育ちの御婆さんであつた。多少誇張してい

えば、籠かごに入れた麦焦むぎこがしを背中へ脊負しよつて近在から出て来る御婆さんであつた。

六十三

「ああ変つた」

顔を見合せた刹那せつなに双方は同じ事を一度に感じ合つた。けれどもわざわざ訪ねて来た御常の方には、この変化に対する予期と準備が充分にあつた。ところが健三にはそれが殆んど欠けていた。従つて不意に打たれたものは客よりもむしろ主人であつた。それでも健三は大して驚ろいた様子を見せなかつた。彼の性質が彼にそうしろと命令する外

に、彼は御常の技巧から溢れ出る戯曲的動作を恐れた。今更この女の遣る芝居を事新らしく観せられるのは、彼に取って堪えがたい苦痛であつた。なるべくなら彼は先方の弱点を未然に防ぎたかつた。それは彼女のためでもあり、また自分のためでもあつた。

彼は彼女から今までの経歴をあらまし聞き取つた。その間には人世と切り離す事の出来ない多少の不幸が相応に纏綿しているらしく見えた。

島田と別れてから二度目に嫁づいた波多野と彼女との間にも子が生れなかつたので、二人は或所から養女を貰つて、それを育てる事にした。波多野が死んで何年目にか、あるいはまだ生きている時分にか、それは御常もいわなかつたが、その貰い娘に養子が来たのである。

養子の商売は酒屋であつた。店は東京のうちでも随分繁華な所にあつた。どの位な程度の活計くらしをしていたものか能く分らないが、困つたとか、窮したとかいう弱い言葉は御常の口を洩もれなかつた。

その内養子が戦争に出て死んだので、女だけでは店が持ち切れなくなつた。親子はやむをえずそれを畳んで、郊外近くに住んでいる或身縁りを頼りに、ずっと辺鄙へんぴな所へ引越した。其所そこで娘に二度目の夫が出るまでは、死んだ養子の遺族へ毎年下がる扶助料だけで活計くらしを立てて行つた。……

御常の物語りは健三の予期に反してむしろ平静であつた。誇張した身ぶりだの、仰山な言葉遣だの、当込あてこみの台詞せりふだのは、それほど多く出て来なかつた。それにもかかわらず彼は自分とこの御婆おばあさんの間に、

少しの気脈も通じていない事に気が付いた。

「ああそうですか、それはどうも」

健三の挨拶は簡単であつた。普通の受答えとしても短過ぎるこの一句を彼女に与えたぎりで、彼は別段物足りなさを感じ得なかつた。

「昔の因果が今でもやっぱり崇たつているんだ」

こう思つた彼はさすがに好い心持がしなかつた。どつちかというと泣きたがらない質たちに生れながら、時々は何故なぜ本当に泣ける人や、泣ける場合が、自分の前に出て来てくれないのかと考えるのが彼の持前であつた。

「己おれの眼は何時でも涙が湧わいて出るように出来ているのに」

彼は丸まっちくなつて座蒲団ざぶとんの上に坐すわっている御婆さんの姿を熟視

した。そうして自分の眼に涙を宿す事を許さない彼女の性格を悲しく観じた。

彼は紙入の中にあつた五円紙幣を出して彼女の前に置いた。

「失礼ですが、車へでも乗つて御帰り下さい」

彼女はそういう意味で訪問したのではないといつて一応辞退した上、健三からの贈りものを受け納めた。気の毒な事に、その贈り物の中には、疎^{うと}い同情が入っているだけで、露^{あら}わな真心は籠^{こも}っていないかつた。彼女はそれを能く承知しているように見えた。そうして何時の間にか離れ離れになつた人間の心と心は、今更取り返しの付かないものだから、諦^{あきら}めらめるより外に仕方がないという風にふるまつた。彼は玄関に立つて、御常の歸つて行く後姿を見送つた。

「もしあの憐あわれな御婆さんが善人であつたなら、私は泣く事が出来たろう。泣けないまでも、相手の心をもつと満足させる事が出来たろう。零落した昔しの養い親を引き取つて死水しにみずを取つて遣る事も出来たろう」

黙つてこう考えた健三の腹の中は誰も知る者がなかった。

六十四

「とうとう遣やつて来たのね、御婆おばあさんも。今までは御爺おじいさんだけだったのが、御爺さんと御婆さんと二人になったのね。これからは二人ふたありに崇たたられるんですよ、貴夫あなたは」

細君の言葉は珍らしく乾燥はしやいでいた。笑談じょうたんとも付かず、冷評ひやかしとも付かないその態度が、感想に沈んだ健三の気分を不快に刺戟しげきした。彼は何とも答えなかった。

「またあの事をいったでしよう」

細君は同じ調子で健三に訊きいた。

「あの事は何だい」

「貴夫が小さいうち寐ね小便しょうべんをして、あの御婆さんを困らしたって事よ」

健三は苦笑さえしなかった。

けれども彼の腹の中には、御常なげが何故なぜそれをいわなかったかの疑問が既に横よこたわっていた。彼女の名前を聞いた刹那せつなの健三は、すぐその弁

口に思い到^{いた}った位、御常は能く喋^{しゃべ}舌る女であつた。ことに自分を護^{まも}る事に巧みな技倆^{ぎりよう}を有^もつていた。他の口車^{ひと}に乗せられやすい、また見え透いた御世辞^{おせじ}を嬉^{うれ}しがりがちな健三の実父は、何時でも彼女を賞^ほめる事を忘れなかつた。

「感心な女だよ。だいち身^{しん}上^{しょう}持^{もち}が好^いいからな」

島田の家庭に風波の起つた時、彼女はあるだけの言葉を父の前に並べ立てた。そうしてその言葉の上にまた悲しい涙と口惜^{くや}しい涙とを多量に振り掛けた。父は全く感動した。すぐ彼女の味方になつてしまつた。

御世辞が上手だという点において健三の父は彼の姉をも大変可^か愛^{あい}がつていた。無心に来られるたんびに、「そうそうは己^{おれ}だつて困る

よ」とか何とかいいながら、いつか入用いりようだけの金子きんすは手文庫から取出されていた。

「比田はあんな奴だが、御夏が可愛想かわいそうだから」

姉の帰った後で、父は何時でも弁解らしい言葉を傍はたのものに聞こえるようにいった。

しかしこれほど父を自由にした姉の口先は、御常に比べると遙かに下手へたであつた。真しやかまことという点において遠く及ばなかつた。實際十六、七になつた時の健三は、彼女と接触した自分以外のもので、果してその性格を見抜いたものが何人あるだろうか、一時疑つて見た位、彼女の口は旨うまかつた。

彼女に会うときの健三が、心中迷惑を感じたのは大部分この口に

あつた。

「御前を育てたものはこの私わたしだよ」

この一句を二時間でも三時間でも布ふ衍えんして、幼少の時分恩へきえんになった記憶をまた新らしく復習させられるのかと思うと、彼は辟易へきえんした。

「島田は御前の敵かたきだよ」

彼女は自分の頭の中に残っているこの古い主観を、活動写真のように誇張して、また彼の前に露さらけ出すに極きまっていた。彼はそれにも辟易へきえんしない訳に行かなかつた。

どっちを聴くにしても涙が交まじるに違なかつた。彼は装飾的に使用されるその涙を見るに堪えないような心持がした。彼女は話す時に姉のような大きな声を出す女ではなかつた。けれども自分の必要と思う場

合には、その言葉に厭^{いや}らしい強い力を入れた。円朝^{えんちよう}の人情^{にんじよう}嘶^{ばなし}に出て来る女が、長い火箸^{ひばし}を灰の中に突き刺し突き刺し、他に騙^{ひと}された恨^{だま}を述^{うらみ}べて、相手を困らせるのとほぼ同じ態度でまた同じ口調であつた。

彼の予期が外れた時、彼はそれを仕合せと考えるよりもむしろ不思議に思う位、御常の性格が牢^{ろう}として崩すべからざる判明^{はつきり}した一種の型になつて、彼の頭のどこかに入つていたのである。

細君は彼のために説明した。

「三十年^{ちか}近くにもなる古い事じゃありませんか。向うだつて今となりや少しは遠慮があるでしょう。それに大抵の人はもう忘れてしまひまさあね。それから人間の性質だつて長い間には少しずつ變つて行きますからね」

遠慮、忘却、性質の変化、それらのものを前に並べて考えて見ても、健三には少しも合点がてんが行かなかつた。

「そんな淡泊あっさりした女じゃない」

彼は腹の中でこういうわなければどうしても承知が出来なかつた。

六十五

御常を知らない細君はかえつて夫の執拗しつおうを笑つた。

「それが貴方あなたの癖だから仕方がない」

平生へいぜい彼女の眼に映る健三の一部分はたしかにこうなのであつた。こ
とに彼と自分の生家さととの關係について、夫のこの悪い癖へきが著るしく出

ているように彼女は思っていた。

「己^{おれ}が執拗なのじゃない、あの女が執拗なのだ。あの女と交際^{つきあ}った事のない御前には、己の批評の正しさ加減が解らないからそんなあべこべをいうのだ」

「だって現に貴夫^{あなた}の考えていた女とはまるで違った人になって貴夫の前へ出て来た以上は、貴夫の方で昔の考えを取り消すのが当然じゃありませんか」

「本当に違った人になったのなら何時でも取り消すが、そうじゃないんだ。違ったのは上部^{うわべ}だけで腹の中は故^{もと}の通りなんだ」

「それがどうして分るの。新らしい材料も何にもないのに」

「御前に分らないでも己にはちゃんと分ってるよ」

「随分独断的ね、貴夫も」

「批評が中^{あた}つてさえいれば独断的で一向^{さしつかえ}差支ないものだ」

「しかしもし中^{あた}つていなければ迷惑する人が大分^{だいぶん}出て来るでしょう。

あの御婆^{おばあ}さんは私^{わたくし}と関係のない人だから、どうしても構いませんけれども」

健三には細君の言葉が何を意味しているのか能^よく解った。しかし細君はそれ以上何もいわなかった。腹の中で自分の父母兄弟を弁護している彼女は、表向^{おもてむき}夫^やと遣^やり合^あつて行ける所まで行く気はなかった。彼女は理智に富^たんだ性質^ちではなかった。

「面倒臭^{めんどくさ}い」

少し込み入^たった議論の筋道^{たど}を辿^たらなければならなくなると、彼女は

きつとこういつて当面の問題を投げた。そうして解決を付けるまで進まないために起る面倒臭さは何時までも辛抱した。しかしその辛抱は自分自身に取って決して快よいものではなかった。健三から見るとなおさら心持が悪かった。

「執拗しつおうだ」

「執拗しつおうだ」

二人は両方で同じ非難の言葉を御互の上に投げかけ合った。そうして御互に腹の中にある蟠わだかまりを御互の素振そぶりから能く読んだ。しかもその非難に理由のある事もまた御互に認め合わなければならなかった。

我慢な健三は遂に細君の生家へ行かなくなった。何故行かないとも訊きかず、また時々行ってくれとも頼まずにただ黙っていた細君は、依

然として「面倒臭い」を心の中に繰り返す^{うち}ぎりで、少しもその態度を改めようとしなかった。

「これで沢山だ」

「己もこれで沢山だ」

また同じ言葉が双方の胸のうちでしばしば繰り返された。

それでも護謄^{ゴムひも}紐のように弾力性のある二人の間柄には、時により日によつて多少の伸縮^{のびぢぢみ}があつた。非常に緊張して何時切れるか分らないほどに行き詰つたかと思うと、それがまた自然の勢で徐々^{そろそろ}元へ戻つて来た。そうした日^{ひより}和^いの好い精神状態が少し継続すると、細君の唇から暖かい言葉が洩^もれた。

「これは誰の子？」

健三の手を握って、自分の腹の上に載せた細君は、彼にこんな問を掛けたりした。その頃細君の腹はまだ今のようには大きくなかった。しかし彼女はこの時既に自分の胎内に蠢めき掛けていた生の脈搏を感じ始めたので、その微動を同情のある夫の指頭に伝えようとしたのである。

「喧嘩けんかをするのはつまり両方が悪いからですね」

彼女はこんな事もいった。それほど自分が悪いと思っていない頑固がんこな健三も、微笑するより外に仕方がなかった。

「離れればいくら親しくつてもそれぎりになる代りに、一所にいさえすれば、たとい敵同志かたきでもどうにかこうにかなるものだ。つまりそれが人間なんだろう」

健三は立派な哲理でも考え出したように首を捻^{ひね}った。

六十六

御常や島田の事以外に、兄と姉の消息も折々健三の耳に入った。

まいとし
毎年時候が寒くなるときつと身体^{からだ}に故障の起る兄は、秋口からまた風邪^{かぜ}を引いて一週間ほど局を休んだ揚句、気分^{きぶん}の悪いのを押して出勤した結果、幾日^{いくか}経つても熱^{ねつ}が除^とれないで苦しんでいた。

「つい無理をするもんだから」

無理をして月給の寿命を長くするか、養生をして免職の時期を早めるか、彼には二つの内どっちかを択^{えら}ぶより外に仕方がないように見え

たのである。

「どうも肋膜らしいっていうんだがね」

彼は心細い顔をした。彼は死を恐れた。肉の消滅について何人よりも強い畏怖の念を抱いていた。そうして何人よりも強い速度で、その肉塊を減らして行かなければならなかった。

健三は細君に向っていった。――

「もう少し平気で休んでいられないものかな。責めて熱の失くなるまでも好いから」

「そうしたいのは山々なんでしょうけれども、やッぱりそうは出来ないんでしょう」

健三は時々兄が死んだあとの家族を、ただ活計の方面からのみ眺め

る事があつた。彼はそれを残酷ながら自然の眺め方として許していた。同時にそういう観察から逃れる事の出来ない自分に対して一種の不快を感じた。彼は苦い塩を嘗めた。

「死にやしまいな」

「まさか」

細君は取り合わなかつた。彼女はただ自分の大きな腹を持て余してばかりいた。生家と縁故のある産婆が、遠い所から俥に乗って時々遣て来た。彼はその産婆が何をしに来て、また何をして帰って行くのか全く知らなかつた。

「腹でも揉むのかい」

「まあそうです」

細君ははかばかしい返事さえしなかった。

その内兄の熱がころりと除れた^と。

「御^ご祈^ぎ禱^{とう}をなすつたんですつて」

迷信家の細君は加^か持^じ、祈^き禱^{とう}、占^うい、神^{かみ}信^{しん}心^{じん}、大抵の事を好いてい

た。

「御前が勧めたんだろう」

「いいえそれが私^{わたくし}なんぞの知らない妙な御祈^ご禱^{とう}なのよ。何でも髪^{かみ}剃^{そり}を

頭の上へ載せて遣るんですつて」

健三には髪^{かみ}剃^{そり}の御蔭^{ごかげ}で、しこじらした体熱が除れようとも思えな
かった。

「気のせいで熱が出るんだから、気のせいでそれがまた直^{すぐ}除れるんだ

ろうよ。髪剃でなくったって、杓子しゃくしでも鍋蓋なべぶたでも同じ事さ」

「しかしいくら御医者ごいしやの薬を飲んでも癒なおらないもんだから、試しに遣やつて見たらどうだろうって勧められて、とうとう遣やる氣になつたんですって、どうせ高い御祈祷ごきとう代を払はつたんじゃないんでしょう」

健三は腹の中で兄を馬鹿だと思つた。また熱の除れるまで薬を飲む事の出来ない彼の内状を氣の毒に思つた。髪剃の御蔭でも何でも熱が除れさえすればまず仕合せだとも思つた。

兄が癒ると共に姉がまた喘息ぜんそくで悩み出した。

「またかい」

健三は我知らずこういつて、ふと女房の持病を苦にしない比田の様子を想い浮べた。

「しかし今度は何時こんだもより重いんですって。ことによると六むずかしいかも知れないから、健三に見舞に行くようにそういつてくれて仰おつしっていました」

兄の注意を健三に伝えた細君は、重苦しそうに自分の尻しりを畳の上に着けた。

「少し立っていると御腹おなかの具合が変になって来て仕方がないんです。手なんぞ延ばして棚に載っているものなんかとても取れやしません」

産せまが逼るほど妊婦は運動すべきものだ位に考えていた健三は意外な顔をした。下腹部だの腰の周囲の感じがどんなに退儀であるかは全く彼の想像の外ほかにあった。彼は活動を強しいる勇氣も自信も失なつた。

「私とても御見舞には参れませんよ」

「無論御前は行かなくつても好い。己が行くから」

六十七

その頃の健三は宅^{うち}へ帰ると甚しい倦怠^{けんたい}を感じた。ただ仕事をした結果とばかりは考えられないこの疲労が、一層彼を出不精にした。彼はよく昼寐^{ひるね}をした。机に倚^よつて書物を眼の前に開けている時ですら、睡魔に襲われる事がしばしばあった。愕然^{がくぜん}として仮寐^{うたたね}の夢から覚めた時、失われた時間を取り返さなければならぬという感じが一層強く彼を刺撃^{しげき}した。彼は遂に机の前を離れる事が出来なくなつた。括^くり付けられた人のように書齋に凝^{じつ}としていた。彼の良心はいくら勉強が出

来なくつても、いくら愚図々々していても、そういう風に凝と坐^{すわ}つて
いろと彼に命令するのである。

かくして四、五日は徒^{いたず}らに過ぎた。健三が漸^{ようや}く津^つの守坂^{かみざか}へ出掛けた
時は六^むずかしいかも知れないといった姉が、もう回復期に向つてい
た。

「まあ結構です」

彼は尋常^{あいさつ}の挨拶をした。けれども腹の中では狐^{きつね}にでも抓^{つま}まれたよう
な気がした。

「ああ、でも御蔭さまでね。——姉さんなんざあ、生きていたつてど
うせ他^{ひと}の厄介になるばかりで何の役にも立たないんだから、好い加減
な時分に死ぬと丁度好いんだけれども、やっぱり持って生れた寿命だ

と見えてこればかりは仕方がない」

姉は自分のいう裏を健三から聴きたい様子であつた。しかし彼は黙つて烟草タバコを吹かしていた。こんな些細ささいの点にも姉弟きょうだいの氣風の相違は現われた。

「でも比田のいるうちは、いくら病身でも無能やぐざでも私あたしが生きていて遣やらないと困るからね」

親類は亭主孝行という名で姉を評し合つていた。それは女房の心尽しなどに対して余りに無頓着むとんじやく過ぎる比田を一方に置いてこの姉の態度を見ると、むしろ氣の毒な位親切だつたからである。

「私あたしや本当に損な生れ付でね。良人うちとはまるであべこべなんだから」
姉の夫思ひは全く天性に違なかつた。けれども比田が時として理の

徹とおらない我儘わがままをいい募るように、彼女は訳の解らない実意じついで立をしてかえって夫を厭いやがらせる事があつた。それに彼女は縫針ぬいはりの道を心得ていなかった。手習てならひをさせても遊芸を仕込んでも何一つ覚える事の出来なかつた彼女は、嫁に来てから今日こんにちまで、ついで夫の着物一枚縫ためしつた例がなかつた。それでいて彼女は人一倍勝気な女であつた。子供の時分強情を張つた罰として土蔵の中に押し込められた時、小用こように行きたいからは非出してくれ、もし出さなければ倉の中で用を足すが好いかといて、網戸うちそとの内外で母と論判をした話はいまだに健三の耳に残つていた。

そう思うと自分とは大變懸け隔はらちがひつたようである、その実どこか似通つた所のあるこの腹違はらちがひの姉の前に、彼は反省を強しいられた。

「姉はただ露骨なだけなんだ。教育の皮を剥けば己だって大した変りはないんだ」

平生の彼は教育の力を信じ過ぎていた。今の彼はその教育の力でどうする事も出来ない野生的な自分の存在を明らかに認めた。かく事実の上において突然人間を平等に視た彼は、不断から輕蔑していた姉に対して多少極りの悪い思をしなければならなかった。しかし姉は何にも気が付かなかつた。

「御住さんはどうです。もう直生れるんだろう」

「ええ落こちそうな腹をして苦しがつています」

「御産は苦しいもんだからね。私も覺があるが」

久しく不妊性と思われていた姉は、片付いて何年目かになって始め

て一人の男の子を生んだ。年齒としを取ってからういざんの初産だったので、当人も傍はたのものも大分だいぶん心配した割に、それほどふんべんの危険もなく胎児を分娩したぶんべんが、その子はすぐ死んでしまった。

「軽はずみをしないように用心おしよ。——宅でも彼子あれがいると少しは依怙たよりになるんだがね」

六十八

姉の言葉には昔し亡くしたわが子に対する思い出の外に、今の養子に飽き足らない意味も含まれていた。

「彦ちゃんがもう少し確乎しっかりしていてくれると好いいいんだけれども」

彼女は時々傍はたのものにこんな述懐を洩もらした。彦ちゃんは彼女の予期するような大した働き手でないにせよ、至極しごく穏やかな好人物であった。朝っぱらから酒を飲まなくっちゃいられない人だという噂うわさを耳にした事はあるが、その他の点たについて深い交渉を有もたない健三には、どこが不足なのか能く解よらなかつた。

「もう少し御金を取ってくれると好いんだけどもね」

無論彦ちゃんは養父母を樂に養えるだけの収入を得ていなかつた。

しかし比田も姉も彼を育てた時の事を思えば、今更そんな贅沢ぜいたくのいえた義理でもなかつた。彼らは彦ちゃんをどこの学校へも入れて遣やらなかつた。僅わずかばかりでも彼が月給を取るようになったのは、養父母に取つてむしろ僥倖ぎやうこうといわなければならなかつた。健三は姉の不平に対

して眼に見えるほどの注意を払いかねた。昔し死んだ赤ん坊については、なおの事同情が起らなかった。彼はその生顔いきがおを見た事がなかった。その死顔しにかおも知らなかった。名前さえ忘れてしまった。

「何とかいいましたね、あの子は」

「作太郎さくたろうさ。あすこに位牌いはいがあるよ」

姉は健三のために茶の間の壁を切り抜いて拵こしらえた小さい仏壇を指し示した。薄暗いばかりでなく小汚こぎたないその中には先祖からの位牌が五つ六つ並んでいた。

「あの小さい奴がそうですか」

「ああ、赤ん坊のだからね、わざと小さく拵こしらえたんだよ」

立って行って戒名かいみを読む気にもならなかった健三は、やはり故もとの所

に坐^{すわ}ったまま、黒塗^{くろぬり}の上に金字で書いた小形の札のようなものを遠くから眺めていた。

彼の顔には何の表情もなかった。自分の二番目の娘が赤痢^{かか}に罹^{かか}つて、もう少しで命を奪^とられるところだった時の心配と苦痛さえ聯想^{れんそう}し得^えなかった。

「姉さんもこんなじゃ何時あなるか分らないよ、健ちゃん」

彼女は仏壇から眼を放して健三を見た。健三はわざとその視線を避^さけた。

心細い事を口にしながら腹の中では決して死ぬと思っていない彼女のいい草には、世間並の年寄と少し趣を異にしている所があつた。慢性の病気が何時までも継続するように、慢性の寿命がまた何時までも

継続するだろうと彼女には見えたのである。

其所^{そこ}へ彼女の癩性^{かんしょう}が手伝った。彼女はどんなに氣息^{いきぐる}苦しくつても、いくら他^{ひと}から忠告されても、どうしても居^いながら用を足そうといわなかった。這^はうようにしてでも廁^{かわや}まで行^いった。それから子供の時から習慣^{くせ}で、朝はきつと肌^{はだぬぎ}拔^はになつて手水^{ちようず}を遣^{つか}った。寒い風が吹こうが冷たい雨が降ろうが決してやめなかった。

「そんな心細い事をいわずに、出来るだけ養生をしたら好いでしよう」

「養生はしているよ。健ちゃんから貰^{もら}う御小遣^{ごせうせん}の中で牛乳だけはきつと飲^きむ事に極^きめているんだから」

田舎^{いなか}ものが米の飯を食うように、彼女は牛乳を飲^いむのが凡^{すべ}ての養生

でもあるかのような事をいった。日に日に損なわれて行くわが健康を意識しつつ、この姉に養生を勧める健三の心の中にも、「他事じやない」という馬鹿らしさが遠くに働らいていた。

「私も近頃は具合が悪くってね。ことによると貴方より早く位牌になるかも知れませんよ」

彼の言葉は無論根のない笑談として姉の耳に響いた。彼もそれを承知の上でわざと笑った。しかし自ら健康を損いつつあると確に心得ながら、それをどうする事も出来ない境遇に置かれた彼は、姉よりもかえって自分の方を憐んだ。

「己のは黙って成し崩しに自殺するのだ。気の毒だといってくれるものは一人もありやしない」

彼はそう思つて姉の凹^{くぼ}み込んだ眼と、瘦^こけた頬^ほと、肉のない細い手とを、微笑しながら見ていた。

六十九

姉は細かい所に気の付く女であつた。従つて細かい事にまでよく好奇心を働^{はたら}かせたが^つた。一面において馬鹿正直な彼女は、一面においてまた変^まな廻^{まわ}り氣^きを出す癖^もを有^もつていた。

健三が外国から歸つて來た時、彼女は自家の生計について、他^{ひと}の同情に訴^うえ得^えるような憐^{あわ}れ^れつ^つぽい事實を彼の前に並べた。しまいに兄の口を借りて、いくらでも好^いいから月々自分の小遣として送^{おく}つてくれま

いかという依頼を持ち出した。健三は身分相応な額を定めた上、また兄の手を経て先方へその旨を通知してもらう事にした。すると姉から手紙が来た。長さんちやうの話では御前さんが月々いくらくら私わたしに遣やるという事だが、実際御前さんの、呉れるといった金高かねだかはどの位なのか、長さんに内所ないしよでちよつと知らせてくれないかと書いてあつた。姉はこれから毎月中取次なかとつぎをする役に当るかも知れない兄の心事を疑ぐつたのである。

健三は馬鹿々々しく思った。腹立しくも感じた。しかし何より先に浅間あさましかつた。「黙っている」と怒鳴り付けて遣りたくなつた。彼の姉に宛あてた返事は、一枚の端書に過ぎなかつたけれども、こうした彼の氣分を能く現よわしていた。姉はそれぎり何ともいって来なかつた。

無筆^{むひつ}な彼女は最初の手紙さえ他に頼んで書いてもらったのである。

この出来事が健三に対する姉を前よりは一層遠慮がちにした。何でも蚊^きでも訊きたがる彼女も、健三の家庭については、当り障りのない事の外、多く口を開かなかった。健三も自分ら夫婦の間柄を彼女の前で問題にしようなどとはかつて想い^{いた}到らなかった。

「近頃御住さんはどうだい」

「まあ相変らずです」

会話はこの位で切り上げられる場合が多かった。

間接に細君の病氣を知っている姉の質問には、好奇心以外に、親切から来る懸念も大分^{だいぶん}交っていた。しかしその懸念は健三に取って何の役にも立たなかった。従って彼女の眼に見える健三は、何時も親しみ

がたい無愛想な変人に過ぎなかった。

淋しい心持で、姉の家を出た健三は、足に任せて北へ北へと歩いて行つた。そうしてついぞ見た事もない新開地のような汚ない、町の中へ入つた。東京で生れた彼は方角の上において、自分の今踏んでいる場所を能く弁えていた。けれども其所には彼の追憶を誘う何物も残つていなかった。過去の記念が悉く彼の眼から奪われてしまった大地の上を、彼は不思議そうに歩いた。

彼は昔あつた青田と、その青田の間を走る真直な径とを思い出した。田の尽る所には三、四軒の藁葺屋根が見えた。菅笠を脱いで床几に腰を掛けながら、心太を食っている男の姿などが眼に浮んだ。前には野原のように広い紙漉場があつた。其所を折れ曲つて町つづきへ出

ると、狭い川に橋が懸っていた。川の左右は高い石垣で積み上げられているので、上から見下す水の流れには存外の距離があつた。橋の袂たもとにある古風な銭湯の暖簾のれんや、その隣の八百屋やおやの店先に並んでいる唐茄とうな子すなどが、若い時の健三によく広重ひろしげの風景画を聯想れんそうさせた。

しかし今では凡てすべのものが夢のように悉く消え失せていた。残っているのはただ大地ばかりであつた。

「何時こんなに變つたんだろう」

人間の変つて行く事にのみ氣を取られていた健三は、それよりも一層劇はげしい自然の變り方に驚ろかされた。

彼は子供の時分比田ひだと将棋を差した事を偶然思いだした。比田は盤に向うと、これでも所沢ところざわの藤吉さんとうきちの御弟子だからなというのが癖で

あつた。今の比田も将棋盤を前に置けば、きつと同じ事をいいそうな男であつた。

「己自身は必竟おれ ひつきようどうなるのだろう」

衰ろえるだけで案外変らない人間のさまと、変るけれども日に栄えて行く郊外の様子とが、健三に思いがけない対照の材料を与えた時、彼は考えない訳に行かなかつた。

七十

元氣のない顔をして宅うちへ帰つて来た彼の様子がすぐ細君の注意を惹ひいた。

「御病人はどうなの」

あるゆる人間が何時か一度は到着しなければならぬ最後の運命を、彼女は健三の口から判然聞こうとするように見えた。健三は答を与える先に、まず一種の矛盾を意識した。

「何もう好いんだ。寐てはいるが危篤でも何でもないんだ。まあ兄貴に騙されたようなものだね」

馬鹿らしいという気が幾分か彼の口振に出た。

「騙されてもその方がいくら好いか知れやしませんわ、貴夫。もしも
の事でもあつて御覧なさい、それこそ……」

「兄貴が悪いんじゃない。兄貴は姉に騙されたんだから。その姉はまた病気に騙されたんだ。つまり皆な騙されているようなものさ、世の

中は。一番利口なのは比田かも知れないよ。いくら女房が煩らったつて、決して騙されないんだからね」

「やっぱり宅にいないの」

「いるもんか。尤も非道く悪かった時はどうだか知らないが」

健三は比田の振下げている金時計と金鎖の事を思い出した。兄はそれを天麴羅てんぷらだろうといって陰で評していたが、当人はどこまでも本物らしく見せびらかしたがつた。金着せきんぎにせよ、本物にせよ、彼がどこでいくらで買ったのか知るものは誰もなかった。こういう点に掛けては無頓着むとんじやくでいられない性分の姉も、ただ好い加減にその出処を推察するに過ぎなかった。

「月賦で買ったに違ないよ」

「ことによると質の流れかも知れない」

姉は聴かれもしないのに、兄に向つて色々な説明をした。健三には殆ど問題にならない事が、彼らの間に想像の種を幾個でも卸した。そうされればされるほどまた比田は得意らしく見えた。健三が毎月送る小遣さえ時々借りられてしまふくせに、姉はついに夫の手元に入る、または現在手元にある、金高きんだかを決して知る事が出来なかった。

「近頃は何でも債券を二、三枚持っているようだよ」

姉の言葉はまるで隣の宅の財産でもいい中あでてるように夫から遠ざかつていた。

姉をこういう地位に立たせて平気でいる比田は、健三から見ると領解しがたい人間に違なかつた。それがやむをえない夫婦関係のように

心得て辛抱している姉自身も健三には分らなかった。しかし金銭上あくまで秘密主義を守りながら、時々姉の予期に釣り合わないようなものを買い込んだり着込んだりして、妄みだりに彼女を驚ろかせたがる料簡りようけんに至っては想像さえ及ばなかった。妻に対する虚栄心の発現、焦じらされながらも夫を腕利うでぎきと思う妻の満足。——この二つのものだけでは到底充分な説明にならなかった。

「金の要いる時も他人、病気の時も他人、それじゃただ一所いっしょにいるだけじゃないか」

健三の謎なぞは容易に解けなかった。考える事の嫌きらな細君はまた何という評も加えなかった。

「しかし己おれたち夫婦も世間から見れば随分変ってるんだから、そう他ひと

の事ばかりとやかくいっちゃいられないかも知れない」

「やっぱり同なじ事ですわ。みんな自分だけは好いと思ってるんだから」

健三はすぐ癪しゃくに障った。

「御前でも自分じゃ好いつもりでいるのかい」

「いますとも。貴夫あなたが好いと思っていらっしゃる通りに」

彼らの争いは能くよこういう所から起った。そうして折角穏やかに静まっている双方の心を攪かき乱した。健三はそれを慎みの足りない細君の責せめに帰した。細君はまた偏窟で強情な夫のせいだとばかり解釈した。

「字が書けなくっても、裁縫しごとが出来なくっても、やっぱり姉のような

亭主孝行な女の方が己は好きだ」

「今時そんな女がどこの国にいるもんですか」

細君の言葉の奥には、男ほど手前勝手なものはないという大きな反
感が横よこたわっていた。

七十一

筋道の通った頭を有もっていない彼女には存外新らしい点があった。

彼女は形式的な昔風の倫理観に囚とらわれるほど嚴重な家庭に人とならな
かった。政治家を以て任じていた彼女の父は、教育に関して殆ほとんど無
定見であつた。母はまた普通の女のように八釜やかましく子供を育て上る性た

質でなかつた。彼女は宅うちにいて比較的自由的な空気を呼吸した。そうして学校は小学校を卒業しただけであつた。彼女は考えなかつた。けれども考えた結果を野性的に能く感じていた。

「単に夫という名前が付いているからというだけの意味で、その人を尊敬しなくてはならないと強いられても自分には出来ない。もし尊敬を受けなければ、受けられるだけの實質を有つた人間になつて自分の前に出て来るが好い。夫という肩書などはなくつても構わないから」

不思議にも學問をした健三の方はこの点においてかえつて旧式であつた。自分は自分のために生きて行かなければならないという主義を實現したがりながら、夫のためにのみ存在する妻を最初から假定して憚はばからなかつた。

「あらゆる意味から見て、妻は夫に従属すべきものだ」

二人が衝突する大根は此所^{おおね　ここ}にあつた。

夫と独立した自己の存在を主張しようとする細君を見ると健三はすぐ不快を感じた。ややともすると、「女のくせに」という氣になつた。それが一段劇^{はげ}しくなると忽ち^{たちま}「何を生意氣な」という言葉に変化した。細君の腹には「いくら女だつて」という挨拶^{あいさつ}が何時でも貯^{たくわ}えてあつた。

「いくら女だつて、そう踏み付にされて堪^{たま}るものか」

健三は時として細君の顔に出るこれだけの表情を明かに読んだ。

「女だから馬鹿にするのではない。馬鹿だから馬鹿にするのだ、尊敬されたければ尊敬されるだけの人格を拵^{こしら}えるがいい」

健三の論理^{ロジック}は何時の間にか、細君が彼に向つて投げる論理^{ロジック}と同じものになつてしまつた。

彼らはかくして円い輪^{まる}の上をぐるぐる廻つて歩いた。そうしていくら疲れても気が付かなかつた。

健三はその輪の上にはたりと立ち留^{どま}る事があつた。彼の留る時は彼の激昂^{げきこう}が静まる時に外ならなかつた。細君はその輪の上でふと動かなくなる事があつた。しかし細君の動なくなる時は彼女の沈滞^とが融け出す時に限つていた。その時健三は漸^{ようや}く怒号をやめた。細君は始めて口を利き出した。二人は手を携えて談笑しながら、やはり円い輪の上を離れる訳に行かなかつた。

細君が産をする十日ばかり前に、彼女の父が突然健三を訪問した。

生憎^{あいにく}留守だった彼は、夕暮に帰ってから細君にその話を聞いて首を傾
むけた。

「何か用でもあったのかい」

「ええ少し御話したい事があるんですって」

「何だい」

細君は答えなかった。

「知らないのかい」

「ええ。また二、三日うちに上^{あが}つて能く御話をするからって帰りまし
たから、今度参^{じか}つたら直に聞いて下さい」

健三はそれより以上何もいう事が出来なかった。

久しく細君の父を訪ねないでいた彼は、用事のあるなしにかかわら

ず、向うがわざわざこつちへ出掛けて来ようなどとは夢にも予期しなかった。その不審が例より彼の口数を多くする原因になった。それとは反対に細君の言葉はかえって常よりも少なかった。しかしそれは彼がよく彼女において発見する不平や無愛嬌から来る寡言とも違っていた。

夜は何時の間にやら全くの冬に変化していた。細い燈火の影を凝と見詰めていると、灯は動かないで風の音だけが烈しく雨戸に当った。ひゅうひゅうと樹木の鳴るなかに、夫婦は静かな洋燈を間に置いて、しばらく森と坐っていた。

「今日父が来きようました時、外套がいとうがなくって寒さそうでしたから、貴方あなたの古いのを出して遣やりました」

田舎いなかの洋服屋こしらで拵こしらえたその二重廻にじゅうまわしは、殆ほとんど健三の記憶から消えかかっている位古ふるかった。細君がどうしてまたそれを彼女の父に与えたものか、健三には理解出来なかつた。

「あんな汚きたらしいもの」

彼は不思議というよりもむしろ恥かしい気がした。

「いいえ。喜よろこんで着て行きました」

「御父おとつさんは外套えきを有もっていないのかい」

「外套えきどころじゃない、もう何にも有あっちゃいないんです」

健三は驚おどろろいた。細い灯ひに照らされた細君の顔が急に憐あわれに見え

た。

「そんなに窮こまっているのかなあ」

「ええ。もうどうする事も出来ないんですって」

口数の寡すくない細君は、自分の生家に関する詳しい話を今まで夫の耳に入れずに通して来たのである。職に離れて以来の不如意を薄々知うすうすっていたながら、まさかこれほどとも思わずにいた健三は、急に眼を転じてその人の昔を見なければならなかった。

彼は絹帽シルクハットにフロックコートで勇ましく官邸せきもんの石門を出て行く細君の父の姿を鮮やかに思い浮べた。堅木かたぎを久きゆうの字形じがたに切り組んで作ったその玄関ゆかの床は、つるつる光って、時によると馴なれない健三の足を滑すべらせた。前に広い芝生しばふを控えた応接間を左へ折れ曲ると、それと接つづ続いた。

て長方形の食堂があつた。結婚する前健三は其所で細君の家族のものと一緒に晚餐ばんさんの卓に着いた事をいまだに覚えていた。二階には畳が敷いてあつた。正月の寒い晩、歌留多カルタに招かれた彼は、そのうちの一間で暖たかい宵を笑い声の裡うちに更ふかした記憶もあつた。

西洋館に続いて日本建にほんだても一棟付ひとつむねいていたこの屋敷には、家族の外に五人の下女げじよと二人の書生が住んでいた。職務柄客の出入でいりの多いこの家の用事には、それだけの召仕めしつかいが必要かも知れなかったが、もし経済が許さないとすれば、その必要も充たみされるはずはなかった。

健三が外国から帰つて来た時ですら、細君の父はさほど困っているようには見えなかった。彼が駒込こまごめの奥に住居すまいを構えた当座、彼の新宅を訪ねた父は、彼に向つてこういった。――

「まあ自分の宅を有つうちもという事が人間にはどうしても必要ですね。しかしそう急にも行くまいから、それは後廻しにして、精々貯蓄せいぜいを心掛けたら好いでしょう。二、三千円の金を有っていないと、いざという場合に、大変困るもんだから。なに千円位出来ればそれで結構です。それを私に預けて御置きなされると、一年位経つうちには、じき倍にして上げますから」

貨殖の道に心得の足りない健三はその時不思議の感に打たれた。

「どうして一年のうちに千円が二千円になり得るだろう」

彼の頭ではこの疑問の解決がとても付かなかった。利慾を離れる事の出来ない彼は、驚愕きょうがくの念を以て、細君の父にのみあつて、自分には全く欠乏している、一種の怪力かいりよくを眺めた。しかし千円拵こしらえて預ける見

込の到底付かない彼は、細君の父に向つてその方法を訊きく氣にもならずについ今日こんにちまで過ぎたのである。

「そんなに貧乏するはずがないだろうじゃないか。何ぼ何だつて」

「でも仕方がありませんわ、廻まわり合せあわせだから」

産という肉体の苦痛を眼前に控えている細君の氣息遣いきづかいはただでさえ重々おもおもしかった。健三は黙つて氣の毒そうなその腹と光沢つやの悪いその頬ほおとを眺めた。

昔し田舎で結婚した時、彼女の父がどこからか浮世絵風の美人を描かいた下等な団扇うちわを四、五本買つて持つて來たので、健三はその一本をぐるぐる廻しながら、随分俗なものだと評したら、父はすぐ「所相応だろう」と答えた事があつたが、健三は今自分がその地方で作つた外

套を細君の父に遣つて、「阿爺相応おやじだろう」という気にはとてもなれなかつた。いくら困つたつてあんなものと思うとむしろ情なさけなくなつた。

「でもよく着られるね」

「見つともなくつても寒いよりは好いでしょう」

細君は淋さびしそうに笑つた。

七十三

中一日置いて彼が来た時、健三は久しぶりで細君の父に会つた。年輩からいっても、経歴から見ても、健三より遥かに世間馴れた父

は、何時も自分の娘婿に対して鄭寧ていねいであつた。或時は不自然に陥る位鄭寧過ぎた。しかしそれが彼を現すべわす凡てではなかつた。裏側には反對のものが所々に起伏していた。

官僚式に出来上つた彼の眼には、健三の態度が最初から頗すいふる横着に見えた。超えてはならない階段を無躰ぶしつけに飛び越すようにも思われた。

その上彼はむやみに自みづから任じているらしい健三の高慢ちきな所を喜こばなかつた。頭にある事を何でも口外はばかして憚らない健三の無作法も氣に入らなかつた。乱暴とより外に取りようのない一徹一凶な点も非難の標ま的になつた。

健三の稚氣を輕蔑けいべつした彼は、形式の心得もなく無茶苦茶に近付いて来きようとする健三を表面上鄭寧な態度で遮つた。すると二人は其所そこで

留まつたなり動けなくなつた。二人は或る間隔を置いて、相手の短所を眺めなければならなかつた。だから相手の長所も判明と理解する事が出来悪くなつた。そうして二人とも自分の有っている欠点の大部分には決して気が付かなかつた。

しかし今の彼は健三に対して疑もなく一時的の弱者であつた。他に頭を下げる事の嫌な健三は窮迫の結果、余儀なく自分の前に出て来た彼を見た時、すぐ同じ眼で同じ境遇に置かれた自分を想像しない訳に行かなかつた。

「如何にも苦しいだろう」

健三はこの一念に制せられた。そうして彼の持ち来した金策談に耳を傾むけた。けれども好い顔はし得なかつた。心のうちでは好い顔を

し得ないその自分を呪^{のろ}っていた。

「金の話だから好い顔が出来ないんじゃない。金とは独立した不愉快のために好い顔が出来ないのです。誤解してはいけません。^{わたくし}私はこんな場合に敵討^{かたきうち}をするような卑怯^{ひきよう}な人間とは違います」

細君の父の前にこれだけの弁解がしたくって堪^{こた}えなかった健三は、黙^{もく}って誤解の危険を冒すより外に仕方がなかった。

このぶ^ぶっき^きら^ら棒^{ぼう}な健三に比べると、細君の父はよほど鄭寧であつた。また落付^{おちつ}いていた。^{はた}傍^{はた}から見れば遙に紳士らしかった。

彼は或人の名を挙げた。

「向うでは貴方^{あなた}を知つてるといいますが、貴方も知つてるんでしょうね」

「知っています」

健三は昔し学校にいた時分にその男を知っていた。けれども深い交^{つき}際はなかつた。卒業して独^あ乙^いへ行つて歸つて来たら、急に職業がえをして或^{ある}大きな銀行へ入つたとか人の噂^{うわさ}に聞いた位より外に、彼の消息は健三に伝わっていなかつた。

「まだ銀行にいるんですか」

細君の父は点頭^{うなず}いた。しかし二人がどこでどう知り合になつたのか、健三には想像さえ付かなかつた。またそれを詳しく訊^きいて見たところ^きが仕方がなかつた。要点はただその人が金を貸してくれるか、くれないかの問題にあつた。

「で当人のいうには、貸しても好い、好いが慥^{たしか}な人を証人に立てても

らいたいとこういふんです」

「なるほど」

「じゃ誰を立てたら好いのかと聞くと、貴方ならば貸しても好いと、向うでわざわざ指名した訳なんです」

健三は自分自身を慥なものと認めるには躊躇ちゆうちよしなかった。しかし自分自身の財力に乏しい事も職業の性質上他ひとに知れていなければならなはずだと考えた。その上細君の父は交際範囲の極めて広い人であった。平生彼の口にする知合しりあいのうちには、健三よりどの位世間から信用されて好いか分らないほど有名な人がいくらでもいた。

「何故なぜ私の判が必要なんでしょう」

「貴方なら貸そうというのです」

健三は考えた。

七十四

彼は今日まで証書を入れて他から金を借りた経験のない男であつた。つい義理で判を捺ついて遣やつたのが本で、立派な腕を有もちながら、生涯社会の底に沈んだまま、藻掻もがき通しに藻掻もがいている人の話は、いくら迂闊うかつな彼の耳にもしばしば伝えられていた。彼は出来るなら自分の未来に関わるような所作を避けたいと思つた。しかし頑固な彼の半面にはいたつて気の弱い煮え切らない或物が能く働よらきたがつた。この場合断然連印を拒絶するのは、彼に取つて如何いかにも無情で、冷刻

で、心苦しかった。

「私でなくっちゃいけないのでしょいか」

「貴方あなたなら好いいいというんです」

彼は同じ事を二度訊きいて同じ答こえを二度受けた。

「どうも変ですね」

世事に疎い彼は、細君の父がどこへ頼んでも、もう判を押してくれるものがないので、しまいに仕方なしに彼の所へ持つて来たのだという明白な事情さえ推察し得なかった。彼は親しく交際つきあった事もないその銀行家からそれほど信用されるのがかえって怖くなつた。

「どんな目に逢あわされるか分りやしない」

彼の心には未来における自己の安全という懸念が充分に働らいた。

同時にただそれだけの利害心でこの問題を片付けてしまうほど彼の性格は単純に出来ていなかった。彼の頭が彼に適当な解決を与えるまで彼は逡巡^{しゅんじゅん}しなければならなかった。その解決が最後に来た時ですら、彼はそれを細君の父の前に持ち出すのに多大の努力を払った。

「印を捺^おす事はどうも危険ですからやめたいと思います。しかしその代り私の手で出来るだけの金を調^{ととの}えて上げましょう。無論貯蓄のない私の事だから、調えるにしたところで、どうせどこからか借りるより外に仕方がないのですが、出来るなら証文を書いたり判を押したりするような形式上の手続きを踏む金は借りたくないのです。私の有^もっている狭い交際の方面で安全な金を工面した方が私には心持が好いのですから、まずそっちの方を一つ中^{あた}って見ましょう。無論御入用^{おいりよう}だけの

額は駄目です。私の手で調のえる以上、私の手で返さなければならぬ額は無論の事です。身分不相当の借金は出来ません」
いくらでも融通が付けば付いただけ助かるといった風の苦しい境遇に置かれた細君の父は、それより以上健三を強いなかった。

「どうぞそれじゃ何分」

彼は健三の着古した外套に身を包んで、寒い日の下を歩いて帰って行った。書齋で話を済めた健三は、玄関からまた同じ書齋に戻ったなり細君の顔を見なかった。細君も父を玄関に送り出した時、夫と並んで沓脱くつぬぎの上に立っただけで、遂に書齋へは入って来なかった。金策の事は黙々のうちに二人に了解されていたながら、遂に二人の間の話題に上らずにしまった。

けれども健三の心には既に責任の荷があつた。彼はそれを果すために動かなければならなかつた。彼は世帯を持つときに、火鉢ひばちや烟草盆タバコぼんを一所に買つて歩いてもらつた友達の宅うちへまた出掛けた。

「金を貸してくれないかね」

彼は藪やぶから棒に質問を掛けた。金などを有つていない友達ともは驚ろいた顔をして彼を見た。彼は火鉢に手を翳かざしながら友達の前に逐一事情を話した。

「どうだろう」

三年間支那のある学堂きょうべんで教鞭を取つていた頃に蓄えた友達の金は、みんな電鉄でんてつか何かの株に變形していた。

「じゃ清水しみずに頼んで見てくれないか」

友達の妹婿に当る清水は、下町のかなり繁華な場所で、病院を開いていた。

「さあどうかなあ。あいつもその位な金はあるだろうが、動かせるようになってるかしら。まあ訊いて見てやろう」

友達の好意は幸い徒^む勞^だにならずに済んだ。健三の借り受けた四百円の金が、細君の父の手に入ったのは、それから四、五日経って後^{のち}の事であつた。

七十五

「己^{おれ}は精一杯の事をしたのだ」

健三の腹にはこういう安心があつた。従つて彼は自分の調達した金の価値について余り考えなかつた。さぞ嬉しいだろうとも思わない代りに、これ位の補助が何の役に立つものかという氣も起さなかつた。それがどの方面にどう消費されたかの問題になると、全くの無知識で澄ましていた。細君の父も其所まで内状を打ち明けるほど彼に接近して来なかつた。

従来の牆壁を取り払うにはこの機会があまりに脆弱過ぎた。もしくは二人の性格があまりに固着し過ぎていた。

父は健三よりも世間的に虚栄心の強い男であつた。なるべく自分を他に能く了解させようと力めるよりも、出来るだけ自分の価値を明るい光線に触てさせたがる性質であつた。従つて彼を圍繞する妻子近親

に對する彼の様子は幾分か誇大に傾むきがちであつた。

境遇が急に失意の方面に一転した時、彼は自分の平生を顧みない訳に行かなかつた。彼はそれを糊塗ことするため、健三に向つて能あたう限りさあらぬ態度を装つた。それで遂に押し通せなくなつた揚句、彼はとうとう健三に連印を求めたのである。けれども彼がどの位の負債にどう苦しめられているかという巨細こさいの事實は、遂に健三の耳に入いらなかつた。健三も訊きかなかつた。

二人は今までの距離を保つたままで互に手を出し合つた。一人が渡す金を一人が受け取つた時、二人は出した手をまた引き込めた。傍はたでそれを見ていた細君は黙つて何ともいわなかつた。

健三が外国から歸つた当座の二人は、まだこれほどに離れていな

かった。彼が新宅を構えて間もない頃、彼は細君の父がある鉱山事業に手を出したという話を聞いて驚ろいた事があつた。

「山を掘るんだって？」

「ええ、何でも新らしく会社を^{こしら}えらるんだそうです」

彼は眉を^{まゆ}顰^{ひそ}めた。同時に彼は父の怪力に幾分かの信用を置いてい

た。

「^{うま}旨く行くのかね」

「どうですか」

健三と細君との間にこんな簡単な会話が取り換わされた後、^{のち}彼はそ

の用事を帯びて北国^{ほっこく}のある都会へ向けて出発したという父の報知を細

君から受け取った。すると一週間ばかりして彼女の母が突然健三の所

へ遣^やつて来た。父が旅先で急に病気に罹^{かか}ったので、これから自分も行かなければならないと思うが、それについて旅費の都合は出来まいかというのが母の用向^{ようむき}であつた。

「ええええ旅費位どうでもして上^{あげ}ますから、すぐ行つて御上なさい」宿屋に寐^ねている苦しい人と、汽車で立つて行く寒い人とを心^{しん}から氣の毒に思つた健三は、自分のまだ見た事もない遠くの空の佗^わびしさまで想像の眼に浮べた。

「何しろ電報が来ただけで、詳しい事はまるで分りませんのですから」

「じゃなお御心配でしょう。なるべく早く御立ちになる方が好^いいでしょう」

幸いにして父の病気は軽かった。しかし彼の手を着けかけたという
鉾山事業はそれぎり立消たちぎえになってしまった。

「まだ何にも見付からないのかね、口は」

「あるにはあるようですけれども旨うまく纏まとまらないんですって」

細君は父がある大きな都会の市長の候補者になった話をして聞かせた。その運動費は財力のある彼の旧友の一人が負担してくれているようであつた。しかし市の有志家はくしやくが何名か打ち揃そろって上京した時に、有名な政治家のある伯爵ふむきに会つて、父の適不適を問い訊ただしたら、その伯爵がどうも不向ふむきだろうと答えたので、話はそれぎりをやめになったのだそうである。

「どうも困るね」

「今に何とかなるでしょう」

細君は健三よりも自分の父の方を遥かに余計信用していた。健三も例の怪力かいりよくを知らないではなかった。

「ただ気の毒だからそういうだけさ」

彼の言葉に嘘うそはなかった。

七十六

けれどもその次に細君の父が健三を訪問した時には、二人の關係がもう変っていた。みづか自ら進んで母に旅費を用立ようだった女婿むすめむこは、一步退しりぞかなければならなかった。彼は比較的遠い距離に立って細君の父を眺め

た。しかし彼の眼に漂よう色は冷淡でも無頓着でもなかった。むしろ黒い瞳から閃めこうとする反感の稲妻であつた。力めてその稲妻を隠そうとした彼は、やむをえずこの鋭どく光るものに冷淡と無頓着の仮装を着せた。

父は悲境にいた。まのあたり見る父は鄭寧であつた。この二つののが健三の自然に圧迫を加えた。積極的に突掛る事の出来ない彼は控えなければならなかつた。単なる無愛想の程度で我慢すべく余儀なくされた彼には、相手の苦しい現状と慇懃な態度とが、かえつてわが天真の流露を妨げる邪魔物になつた。彼からいえば、父はこういう意味において彼を苦しめに來たと同じ事であつた。父からいえば、普通の人としてさえ不都合に近い愚劣な応対ぶりを、自分の女婿に見出すの

は、堪えがたい馬鹿らしさに違なかつた。前後と関係のないこの場だけの光景を眺める傍観者の眼にも健三はやはり馬鹿であつた。それを承知している細君にすら、夫は決して賢い男ではなかつた。

「わたくし私も今度という今度は困りました」

最初にこういった父は健三からはかばかしい返事すら得なかつた。

父はやがて財界で有名な或人の名を挙げた。その人は銀行家でもあり、また実業家でもあつた。

「実はこの間ある人の周旋で会つて見ましたが、どうかうま旨く出来そうですよ。三井と三菱を除けば日本ではまあ彼所位あそこなもんですから、使用人になつたからといって、別に私の体面に関わる事ありませんし、それに仕事をする区域も広いようですから、面白く働けるだろう

と思うんです」

この財力家によつて細君の父に予約された位地というのは、関西にある或^{ある}私立の鉄道会社の社長であつた。会社の株の大部分を一人で所有しているその人は、自分の意志のままに、其所^{そこ}の社長を選ぶ特権を有していたのである。しかし何十株か何百株かの持主として、予^{あらかじめ}じめ資格を作つて置かなければならない父は、どうして金の工面をするだろう。事状に通じない健三にはこの疑問さえ解けなかつた。

「一時必要な株数だけを私の名儀に書換てもらふんです」

健三は父の言葉に疑を挟むほど、彼の才能を見縊^{みくび}つていなかった。

彼と彼の家族とを目下の苦境から解脱^{げだつ}させるという意味においても、その成功を希望しない訳に行かなかつた。しかし依然として元の立場

に立っている事も改める訳に行かなかつた。彼の挨拶あいさつは形式的であつた。そうして幾分か彼の心の柔らかい部分をわざと堅苦しくした。老巧な父はまるで其所に注意を払わないように見えた。

「しかし困る事に、これは今が今という訳に行かないのです。時機があるものですからな」

彼は懷からまた一枚の辞令見たようなものを出して健三に見せた。それには或保険会社が彼に顧問を囑託するという文句と、その報酬として月々彼に百円を贈与するという条件が書いてあつた。

「今御話した一方の方が出来たらこれはやめるか、または出来ても続けてやるか、その辺はまだ分らないんですが、とにかく百円でも当座のしの凌ぎにはなりますから」

昔し彼が政府の内意で或官職を抛なげうつた時、当路の人は山陰道筋のあ
る地方の知事なら転任させても好よいという条件を付けた事があつた。
しかし彼は断然それを斥しりぞけた。彼が今大して隆盛でもない保険会社
から百円の金を貰もらつて、別に厭いやな顔をしないのも、やはり境遇の変化
が彼の性格に及ぼす影響に相違なかつた。

こうした懸け隔てのない父の態度は、ややともすると健三を自分の
立場から前へ押し出そうとした。その傾向を意識するや否や彼はまた
後戻りをしなければならなかつた。彼の自然は不自然らしく見える彼
の態度を倫理的に認可したのである。

細君の父は事務家であつた。ややともすると仕事本位の立場からばかり人を評価したがつた。乃木^{のぎ}將軍が一時台灣總督になつて間もなくそれをやめた時、彼は健三に向つてこんな事をいつた。――

「個人としての乃木さんは義に堅く情に篤^{あつ}く実に立派なものです。しかし總督としての乃木さんが果して適任であるかどうかという問題になると、議論の余地がまだ大分^{だいぶん}あるように思います。個人の徳は自分に親しく接触する左右のものには能く及^よぶかも知れませんが、遠く離れた被治者に利益を与えようとするには不充分です。其所^{そこ}へ行くとやっぱり手腕ですね。手腕がなくなつちや、どんな善人でもただ坐^{すわ}っているより外に仕方がありませんからね」

彼は在職中の關係から或会の事務一切を管理していた。侯爵^{こうしやく}を会頭

に頂くその会は、彼の力で設立の主意を綺麗きれいに事業の上で完成した後、彼の手元に二万円ほどの剰余金を委ねた。ゆだ官途に縁がなくなつてから、不如意に不如意の続いた彼は、ついその委託金に手を付けた。そうして何時の間にか全部を消費してしまつた。しかし彼は自家の信用を維持するために誰にもそれを打ち明けなかつた。従つて彼はこの預金から当然生まれて来る百円近くの利子を毎月調達して、まいげちようだつ体面を繕ろわなければならなかつた。自家の経済よりもかえつてこの方を苦に病んでいた彼が、公生涯の持続に絶対に必要なその百円を、月々保険会社から貰うようになつたのは、当時の彼の心中に立入つて考えて見ると、全く嬉しいうれに違なかつた。

よほど後あとになつて始めてこの話を細君から聴いた健三は、彼女の父

に對して新たな同情を感じただけで、不徳義漢として彼を惡む氣は更に起らなかった。そういう男の娘と夫婦になつてゐるのが恥ずかしいなどとは更に思わなかつた。しかし細君に對しての健三は、この點に關して殆んど無言であつた。細君は時々彼に向つていつた。――

「妾わたし、どんな夫でも構いませんわ、ただ自分に好くしてくれさえすれば」

「泥棒でも構わないのかい」

「ええええ、泥棒だろうが、詐欺師だろうが何でも好いわ。ただ女房を大事にしてくれれば、それで沢山なのよ。いくら偉い男だつて、立派な人間だつて、宅うちで不親切じゃ妾にや何にもならないんですもの」

實際細君はこの言葉通りの女であつた。健三もその意見には賛成で

あった。けれども彼の推察は月の暈かさのように細君の言外まで滲にじみ出した。学問ばかりに屈託くつたくしている自分を、彼女がこういう言葉でよそながら非難するのだという臭においがどこやらでした。しかしそれよりも遙かに強く、夫の心を知らない彼女がこんな態度で暗あんに自分の父を弁護するのではないかという感じが健三の胸を打った。

「己おれはそんな事で人と離れる人間じゃない」

自分を細君に説明しようと力つとめなかった彼も、独りで弁解の言葉を繰り返す事は忘れなかった。

しかし細君の父と彼との交情に、自然の溝渠みぞが出来たのは、やはり父の重きを置き過ぎている手腕の結果としか彼には思えなかった。

健三は正月に父の所へ礼に行かなかった。恭賀新年という端書だけ

を出した。父はそれを寛^{ゆる}仮^かさなかつた。表向それを咎^{とが}める事もしなかつた。彼は十二、三になる末の子に、同じく恭賀新年という曲りくねった字を書かして、その子の名前で健三に賀状の返しをした。こういう手腕で彼に返報する事を巨細^{こさい}に心得ていた彼は、何故^{なぜ}健三が細君の父たる彼に、賀正^{がせい}を口ずから述べなかつたかの原因については全く無反省であつた。

一事は万事に通じた。利が利を生み、子に子が出来た。二人は次第に遠ざかつた。やむをえないで犯す罪と、遣^やらんでも済むのにわざと遂行する過失との間に、大變な區別を立てている健三は、性質^{たち}の宜^{よろ}しくないこの余裕を非常に惡^{にく}み出した。

七十八

「与^{くみ}しやすい男だ」

実際において与しやすい或物を多量に有^もっていると自覚しながらも、健三は他^{ひと}からこう思われるのが癪^{しゃく}に障^{さや}った。

彼の神経はこの肝癪^{かんしゃく}を乗り越えた人に向つて鋭どい懐しみを感じた。彼は群衆のうちにあつて直^{すぐ}そういう人を物色する事の出来る眼を有^もっていた。けれども彼自身はどうしてもその域に達せられなかった。だからなおそういう人が眼に着いた。またそういう人を余計尊敬したくなつた。

同時に彼は自分を罵^{ののし}った。しかし自分を罵らせるようにする相手を

ば更に烈しく罵った。^{はげ}

かくして細君の父と彼との間には自然の造った溝渠が次第に出来上った。彼に対する細君の態度も暗に^{あん}それを手伝ったには相違なかった。

二人の間柄がすれすれになると、細君の心は段々生家の方へ傾いて行つた。生家でも同情の結果、冥々^{めいめい}の裡^{うち}に細君の肩を持たなければならなくなった。しかし細君の肩を持つという事は、或場合において、健三を敵とするという意味に外ならなかった。二人は益離れるだけであつた。^{ますます}

幸にして自然は緩和剤としての歇私^{ヒステリー}的里を細君に与えた。発作は都合よく二人の関係が緊張した間際に起つた。健三は時々便所へ通う廊

下に俯伏うつぶせになつて倒れている細君を抱き起して床の上まで連れて来た。真夜中に雨戸を一枚明けた縁側の端はじに蹲踞うずくまっている彼女を、後うしろから両手で支えて、寢室へ戻つて来た経験もあつた。

そんな時に限つて、彼女の意識は何時でも朦朧もうろうとして夢よりも分別がなかつた。瞳孔どうこうが大きく開いていた。外界はただ幻影まぼろしのように映るらしかつた。

枕辺まくらべに坐すわつて彼女の顔を見詰めている健三の眼には何時でも不安が閃ひらめいた。時としては不憫ふびんの念が凡すべてに打ち勝つた。彼は能よく気の毒な細君の乱れかかつた髪に櫛くしを入れて遣やつた。汗ばんだ額を濡ぬれ手拭てぬぐいで拭ふいて遣つた。たまには氣たしかを確たしかにするために、顔へ霧を吹き掛けたり、口移しに水を飲ませたりした。

発作の今よりも劇^{はげ}しかった昔の様も健三の記憶を刺戟^{しげき}した。

或時の彼は毎夜細^{ひも}い紐で自分の帯と細君の帯とを繋^{つな}いで寐^ねた。紐の長さを四尺ほどにして、寐返^{ねがえ}りが充分出来るように工夫されたこの用意は、細君の抗議なしに幾晩も繰り返された。

或時の彼は細君の鳩尾^{みぞおち}へ茶碗^{ちやわん}の糸底を宛^{あて}がつて、力任せに押し付けた。それでも踏^ぞん反り返ろうとする彼女の魔力をこの一点で喰^くい留めなければならぬ彼は冷たい油汗を流した。

或時の彼は不思議な言葉を彼女の口から聞かされた。

「御天道さまが来^{おてんとう}ました。五色^{しき}の雲へ乗^のつて来^こました。大変よ、貴^{あな}夫^た」

「妾^{わたし}の赤ん坊は死^しんじまった。妾の死んだ赤ん坊が来^こたから行^いかな

くつちやならない。そら其所そこにいるじゃありませんか。桔槔はねつるべの中に。
妾ちよつと行つて見て来るから放して下さい」

流産してから間もない彼女は、抱き竦すくめにかかる健三の手を振り
払つて、こういうながら起き上がろうとしたのである。……

細君の発作は健三に取つての大いなる不安であつた。しかし大抵の
場合にはその不安の上に、より大いなる慈愛の雲が霰たなびいていた。彼
は心配よりも可哀想かわいそうになつた。弱い憐あわれなものの前に頭を下げ、出
来得る限り機嫌を取つた。細君も嬉うれしそうな顔をした。

だから発作に故意だろうという疑の掛からない以上、また余りに肝かんし
癪やくが強過ぎて、どうしても勝手にしろという氣にならない以上、最後に
その度数が自然の同情を妨げて、何でそう己おれを苦しめるのかという不

平が高まらない以上、細君の病気は二人の仲を和らげる方法として、健三に必要であつた。

不幸にして細君の父と健三との間にはこういう重宝な緩和剤が存在していなかった。従つて細君が本で出来た両者の疎隔は、たとい夫婦関係が常に復した後でも、ちよつと埋める訳に行かなかつた。それは不思議な現象であつた。けれども事実には相違なかつた。

七十九

不合理な事の嫌な健三は心の中でそれを苦に病んだ。けれども別にどうする了簡も出さなかつた。彼の性質はむきでもあり一図でもあつ

たと共に頗る消極的な傾向を帯びていた。

「己おれにそんな義務はない」

自分に訊きいて、自分に答を得た彼は、その答を根本的なものと信じた。彼は何時までも不愉快の中で起臥きがする決心をした。成行なりゆきが自然に解決を付けてくれるだろうとさえ予期しなかった。

不幸にして細君もまたこの点においてどこまでも消極的な態度を離れなかった。彼女は何か事件があれば動く女であつた。他ひとから頼まれて男より邁進まいしんする場合もあつた。しかしそれは眼前に手で触れられるだけの明瞭めいりような或物を捉つかまえた時に限っていた。ところが彼女の見た夫婦関係には、そんな物がどこにも存在していなかった。自分の父と健三の間にもこれというほどの破綻はたんは認められなかった。大きな具象的

な変化でなければ事件と認めない彼女はその他^たを閑却した。自分と、自分の父と、夫との間に起る精神状態の動揺は手の着けようのないものだと観じていた。

「だって何にもないじゃありませんか」

裏面にその動揺を意識しつつ彼女はこう答えなければならなかった。彼女に最も正当と思われたこの答が、時として虚偽の響をもつて健三の耳を打つ事があつても、彼女は決して動かなかつた。しまいになおの事消極的に練り堅めて行つた。

かくして夫婦の態度は悪い所で一致した。相互の不調和を永続するためにと評されても仕方のないこの一致は、根強い彼らの性格から割

り出されていた。偶然というよりもむしろ必然の結果であつた。互に顔を見合せた彼らは、相手の人相で自分の運命を判断した。

細君の父が健三の手で調達ちようだつされた金を受取つて歸つてから、それを特別の問題ともしなかつた夫婦は、かえつて余事を話し合つた。

「産婆は何時頃生れるというのかい」

「何時はつきりつて判然いいもしませんが、もう直じきですわ」

「用意は出来てるのかい」

「ええ奥の戸棚の中に入っています」

健三には何が這入はいつてゐるのか分らなかつた。細君は苦しうに大きな溜息ためいきを吐いた。

「何しろこう重苦しくつちや堪らない。早く生れてくれなくつちや」

「今度は死ぬかも知れないっていつてたじゃないか」

「ええ、死んでも何でも構わないから、早く生んじまいたいわ」

「どうも御気の毒さまだな」

「好いわ、死ねば貴夫あなたのせいだから」

健三は遠い田舎いなかで細君が長女を生んだ時の光景を憶い出した。不安

そうに苦い顔をしていた彼が、産婆から少し手を貸してくれといわれ

て産室へ入った時、彼女は骨に応えるような恐ろしい力でいきなり健

三の腕に獅噛しがみ付いた。そうして拷問でもされる人のように唸うなった。

彼は自分の細君が身体からだの上に受けつつある苦痛を精神的に感じた。自分が罪人ではないかという気さえした。

「産をするのも苦しいだろうが、それを見ているのも辛いものだぜ」

「じゃどこかへ遊びにでもいらっしやいな」

「一人で生めるかい」

細君は何とも答えなかった。夫が外国へ行っている留守に、次の娘を生んだ時の事などはまるで口にしなかった。健三も訊いて見ようとは思わなかった。生れ付心配性な彼は、細君の唸り声うなを余所よそにして、ぶらぶら外を歩いていられるような男ではなかった。

産婆が次に顔を出した時、彼は念を押した。

「一週間以内かね」

「いえもう少し後あとでしょう」

健三も細君もその気でいた。

八十

日取が狂って予期より早く産気づいた細君は、苦しそうな声を出して、傍に寐ている夫の夢を驚ろかした。

「先刻から急に御腹が痛み出して……」

「もう出そうなのかい」

健三にはどの位な程度で細君の腹が痛んでいるのか分らなかった。

彼は寒い夜の中に夜具から顔だけ出して、細君の様子をそつと眺めた。

「少し撫って遣ろうか」

起き上る事の臆劫な彼は出来るだけ口先で間に合せようとした。彼

は産についての経験をただ一度しか有^もっていなかった。その経験も大方は忘れていた。けれども長女の生れる時には、こういう痛みが、潮の満干^{みちひ}のように、何度も来たり去ったりしたように思えた。

「そう急に生れるもんじゃないだろうな、子供ってものは。一仕切痛^{ひとしきり}んではまた一仕切治まるんだろう」

「何だか知らないけれども段々痛くなるだけですわ」

細君の態度は明らかに彼女の言葉を証拠立てた。凝^{じつ}と蒲団^{ふとん}の上に落^{おち}付^っいていられない彼女は、枕を外して右を向いたり左へ動いたりした。男の健三には手の着けようがなかった。

「産婆を呼ぼうか」

「ええ、早く」

職業柄産婆の宅には電話が掛つていたけれども、彼の家にそんな気の利いた設備のあらうはずはなかった。至急を要する場合が起るたびに、彼は何時でも掛りつけの近所の医者 of 所へ馳け付けけるのを例にしていた。

初冬の暗い夜はまだ明け離れるのに大分間があつた。彼はその人とその人の門を敲く下女の迷惑を察した。しかし夜明まで安閑と待つ勇氣がなかった。寢室の襖を開けて、次の間から茶の間を通つて、下女部屋の入口まで来た彼は、すぐ召使の一人を急ぎ立てて暗い夜の中へ追い遣つた。

彼が細君の枕元へ歸つて来た時、彼女の痛みは益劇しくなつた。彼の神経は一分ごとに門前で停る車の響を待ち受けなければならぬほ

どに緊張して来た。

産婆は容易に来なかった。細君の唸る声うなが絶間たえまなく静かな夜へやの室を不安に攪かき乱した。五分経つか経たないうちに、彼女は「もう生れま
す」と夫に宣告した。そうして今まで我慢に我慢を重ねて泳こらえて来た
ような叫び声を一度に揚げると共に胎児ふんべんを分娩した。

「確しつかりしろ」

すぐ立って蒲団すその裾すその方に廻った健三は、どうして好いいか分らな
かった。その時例の洋燈ランプは細長い火蓋ほやの中で、死のように静かな光を
薄暗く室内に投げた。健三の眼を落している辺あたりは、夜具しまがらの縞柄はつさえ判
明きりしないぼんやりした陰で一面に裏つまれていた。

彼は狼狽ろうばいした。けれども洋燈を移して其所そこを輝てらすのは、男子の見る

べからざるものを強^しいて見るような心持がして気が引けた。彼はやむをえず暗中に摸索した。彼の右手は忽ち^{たちま}一種異様の触覚をもつて、今まで経験した事のない或物に触れた。その或物は寒天のようにぷりぷりしていた。そうして輪廓からいっても恰好^{かつこう}の判然しない何かの塊^{かたまり}に過ぎなかった。彼は気味の悪い感じを彼の全身に伝えるこの塊を軽く指頭で撫^なでて見た。塊りは動きもしなければ泣きもしなかった。ただ撫でるたんびにぷりぷりした寒天のようなものが剥^はげ落ちるように思えた。もし強く抑えたり持ったりすれば、全体がきつと崩れてしまうに違ないと彼は考えた。彼は恐ろしくなって急に手を引込^{ひっこ}めた。

「しかしこのままにして放つて置いたら、風邪^{かぜ}を引くだろう、寒さで凍^こえてしまうだろう」

死んでいるか生きているかさえ弁別みわけのつかない彼にもこういう懸念が湧わいた。彼は忽ち出産の用意が戸棚うちの中に入れてあるといった細君の言葉を思い出した。そうしてすぐ自分の後部うしろにある唐紙からかみを開けた。彼は其所から多量の綿を引き摺ずり出した。脱脂綿という名さえ知らなかった彼は、それをむやみに千切ちぎって、柔かい塊の上に載せた。

八十一

その内待まちに待った産婆が来たので、健三は漸ようやく安心して自分の室へやへ引き取った。

夜よは間もなく明けた。赤子あかごの泣く声が家の中の寒い空気を顫ふるわせ

た。

「御安産で御目出とう御座います」

「男かね女かね」

「女の御子さんで」

産婆は少し気の毒そうに途中で句を切った。

「また女か」

健三にも多少失望の色が見えた。一番目が女、二番目が女、今度生れたのもまた女、都合三人の娘の父になった彼は、そう同じものばかり生んでどうする気だろうと、心の中うちで暗あんに細君を非難した。しかしそれを生ませた自分の責任には思いたい到達いたらなかった。

田舎いなで生まれた長女は肌理きめの濃こまやかな美しくい子であった。健三は

よくその子を乳母車うばぐるまに乗せて町の中を後うしろから押して歩いた。時によると、天使のように安らかな眠に落ちた顔を眺めながら宅うちへ帰って来た。しかし当あてににならないのは想像の未来であつた。健三が外国から帰った時、人に伴つられて彼を新橋しんばしに迎えたこの娘は、久しぶりに父の顔を見て、もっと好いい御父おとうさまかと思つたと傍はたのものに語つた如く、彼女自身の容貌もしばらく見ないうちに悪い方に变化していた。彼女の顔は段々丈たけが詰つつて来た。輪廓かどに角が立つた。健三はこの娘の容貌うちの中にいつか成長しつつある自分の相好そうごうの悪い所を明らかに認めなければならなかつた。

次女は年が年中腫物できものだらけの頭をしていた。風通しが悪いからだろ
うというのが本もとで、とうとう髪かみの毛をじよぎじよぎに剪きつてしまつ

た。顴の短かい眼の大きなその子は、海坊主うみぼうずの化物ばけもののような風をして、其所そこいらをうろうろしていた。

三番目の子だけが器量好く育とうとは親の慾目にも思えなかった。

「ああいうものが続々生れて来て、必竟ひつきようどうするんだろう」

彼は親らしくもない感想を起した。その中には、子供ばかりではない、こういう自分や自分の細君なども、必竟ひつきようどうするんだろうという意味も臆氣おぼろげに交まじっていた。

彼は外へ出る前にちよつと寢室へ顔を出した。細君は洗い立てのシーツの上に穩ねかに寐ねていた。子供も小さい附属物のように、厚い綿の入った新調の夜具蒲団ふとんに包くるまれたまま、傍に置いてあつた。その子供は赤い顔をしていた。昨夜暗闇で彼の手に触れた寒天のような肉塊

とは全く感じの違うものであった。

一切も綺麗きれいに始末しまつされていた。其所そこいらには汚よごれ物の影ものさえ見えなかった。夜来やらいの記憶は跡方もない夢らしく見えた。彼は産婆の方を向いた。

「蒲団は換えて遣やったのかい」

「ええ、蒲団も敷布も換えて上げました」

「よくこう早く片付けられるもんだね」

産婆は笑うだけであつた。若い時から独身で通して来たこの女の声や態度はどことなく男らしかった。

「貴夫あなたがむやみに脱脂綿を使って御しまいになったものだから、足りなくって大変困りましたよ」

「そうだろう。随分驚ろいたからね」

こう答えながら健三は大して気の毒な思いもしなかった。それよりも多量に血を失なつて蒼い顔あおをしている細君の方が懸念の種になった。

「どうだ」

細君は微かに眼かすを開けて、枕の上で軽く肯うなずいた。健三はそのまま外へ出た。

例刻に歸つた時、彼は洋服のままでもた細君の枕元すわに坐つた。

「どうだ」

しかし細君はもう肯うなずかなかつた。

「何だか変なようです」

彼女の顔は今朝見た折と違って熱で火照^{ほて}っていた。

「心持が悪いのかい」

「ええ」

「産婆を呼びに遣ろうか」

「もう来るでしょう」

産婆は来るはずになっていた。

八十二

やがて細君の腋^{わき}の下に験温器^{あて}が宛^{あて}がわれた。

「熱が少し出ましたね」

産婆はこういつて度盛どもりの柱の中に上のぼった水銀を振り落した。彼女は比較的言葉寡ずくなであつた。用心のため産科の医者みを呼んで診てもらつたらどうだという相談さえせずに歸つてしまつた。

「大丈夫なのかな」

「どうですか」

健三は全くの無知識であつた。熱さえ出ればすぐ産褥熱さんじよくねつじゃなからうかという危懼きぐの念を起した。母から掛り付けて来た産婆に信賴している細君の方がかえつて平氣であつた。

「どうですか、御前の身体からだじゃないか」

細君は何とも答えなかつた。健三から見ると、死んだつて構わないという表情がその顔に出ているように思えた。

「人がこんなに心配して遣^やるのに」

この感じを翌^ある日まで持ち続けた彼は、何時もの通り朝早く出て行^いった。そうして午後に歸^かつて来て、細君の熱がもう退^さめている事に気が付いた。

「やっぱり何でもなかったのかな」

「ええ。だけど何時また出て来るか分りませんわ」

「産をすると、そんなに熱が出たり引^ひつ込んだりするものかね」

健三は真面目^{まじめ}であつた。細君は淋^{さび}しい頬^ほに微笑^{ほお}を洩^もらした。

熱は幸^{さいわい}にしてそれぎり出^でなかつた。産後の経過は先ず順当に行^いつ

た。健三は既定の三週間を床の上に過^すすべく命ぜられた細君の枕元へ来て、時々話をしながら坐^{すわ}つた。

「今度は死ぬ死ぬっていいながら、平気で生きているじゃないか」

「死んだ方が好ければ何時でも死にます」

「それは御随意だ」

夫の言葉を笑談じょうだん半分に聴いていられるようになった細君は、自分の

生命に対して鈍いながらも一種の危険を感じたその当時を顧みなければならなかった。

「実際今度は死ぬと思ったんですもの」

「どういう訳で」

「訳はないわ、ただ思うのに」

死ぬと思ったのかえって普通の人より軽い産をして、予想と事実が丁度裏表になった事さえ、細君は気に留めていなかった。

「御前は呑氣のんきだね」

「貴夫あなたこそ呑氣よ」

細君は嬉うれしそうに自分の傍そばに寐ねている赤ん坊の顔を見た。そうして指の先で小さい頬片ほっぺたを突つついて、あやし始めた。その赤ん坊はまだ人間の体裁を具えた眼鼻めはなを有もつているとはいえないほど変な顔をしていた。

「産が軽いだけあって、少し小さ過ぎるようだね」

「今に大きくなりますよ」

健三はこの小さい肉の塊りが今の細君のように大きくなる未来を想像した。それは遠い先にあった。けれども途中で命の綱が切れない限り何時か来るに相違なかった。

「人間の運命はなかなか片付かないもんだな」

細君には夫の言葉があまりに突然過ぎた。そうしてその意味が解らなかつた。

「何ですって」

健三は彼女の前に同じ文句を繰り返すべく余儀なくされた。

「それがどうしたの」

「どうもしないけれども、そうだからそうだというのさ」

「詰らないわ。他ひとに解らない事さえいいや、好いいかと思つて」

細君は夫を捨ててまた自分の傍に赤ん坊を引き寄せた。健三は厭いやな顔もせずに書斎へ入つた。

彼の心のうちには死なない細君と、丈夫な赤ん坊の外に、免職にな

ろうとしてならずにいる兄の事があつた。喘息で斃れようとしてまだ斃れずにいる姉の事があつた。新らしい位地が手に入るようでまだ手に入らない細君の父の事があつた。その他島田の事も御常の事もあつた。そうして自分とこれらの人々との関係が皆なまだ片付かずにいるという事もあつた。

八十三

子供は一番気楽であつた。生きた人形でも買ってもらつたように喜んで、閑さ^{ひま}えあると、新らしい妹^{いも}の傍^{そば}に寄りたがつた。その妹の瞬^{またた}き一つさえ驚嘆の種になる彼らには、噫^{くさめ}でも欠^{あくび}でも何でもかでも不可思

議な現象と見えた。

「今にどんなになるだろう」

当面に忙殺ぼうさいされる彼らの胸にはかつてこうした問題が浮かばなかった。自分たち自身の今にどんなになるかをすら領解し得ない子供らは、無論今にどうするだろうなどと考えるはずがなかった。

この意味で見た彼らは細君よりもなお遠く健三を離れていた。外から帰った彼は、時々洋服も脱がずに、敷居の上に立ちながら、ぼんやりこれらの一団を眺めた。

「また塊かたまりっているな」

彼はすぐ踵きびすを回めくらして部屋の外へ出る事があつた。

時によると彼は服も改めずにすぐ其所そこへ胡坐あぐらをかいた。

「こう始終湯婆ゆたんぼばかり入れていちゃ子供の健康に悪い。出してしまえ。第一いくつ入れるんだ」

彼は何にも解らないくせに好いい加減な小言こごとをいつてかえつて細君から笑われたりした。

日が重なつても彼は赤ん坊を抱いて見る気にならなかった。それでいて一つ室へやに塊かたまりっている子供と細君とを見ると、時々別な心持を起した。

「女は子供を専領してしまふものだね」

細君は驚ろいた顔をして夫を見返した。其所そこには自分が今まで無自觉で実行して来た事を、夫の言葉で突然悟らされたような趣もあった。

「何で藪やぶから棒にそんな事を仰おつしやるの」

「だってそうじゃないか。女はそれで氣に入らない亭主かたきうちに敵討かたきうちをするつもりなんだろう」

「馬鹿を仰おやい。子供が私の傍そばへばかり寄り付くのは、貴夫あなたが構かまい付けて御遣おやりなさらないからです」

「己おれを構かまい付けなくさせたものは、取とりも直たださず御前ごぜんだろう」

「どうでも勝手になさい。何ぞというひがと僻ひがみばかりいつて。どうせ口の達者な貴夫かなには敵かたいませんから」

健三はむしろ真面目まじめであつた。僻くちがうしやみとも口巧者くちがうしやとも思わなかつた。

「女は策略が好きだからいけない」

細君は床の上で寐返ねがえりをしてあちらを向いた。そうして涙をぽたぽ

たと枕の上に落した。

「そんなに何も私を虐めなくつても……」

細君の様子を見ていた子供はすぐ泣き出しそうにした。健三の胸は重苦しくなった。彼は征服されると知りながらも、まだ産褥を離れ得ない彼女の前に慰藉の言葉を並べなければならなかった。しかし彼の理解力は依然としてこの同情とは別物であつた。細君の涙を拭いてやった彼は、その涙で自分の考えを訂正する事が出来なかった。

次に顔を合せた時、細君は突然夫の弱点を刺した。

「貴夫何故その子を抱いて御遣りにならないの」

「何だか抱くと険呑だからさ。頸でも折ると大変だからね」

「嘘を仰しやい。貴夫には女房や子供に対する情合が欠けているんで

すよ」

「だって御覧な、ぐたぐたして抱き慣けない男に手なんか出せやしないじゃないか」

実際赤ん坊はぐたぐたしていた。骨などはどこにあるかまるで分らなかった。それでも細君は承知しなかった。彼女は昔し一番目の娘にみずぼうそう水疱瘡の出来た時、健三の態度が俄かに一変した実例を証拠に挙げた。

「それまで毎日抱いて遣っていたのに、それから急に抱かなくなったじゃありませんか」

健三は事実を打ち消す気もなかった。同時に自分の考えを改めようとしなかった。

「何といたって女には技巧があるんだから仕方がない」
彼は深くこう信じていた。あたかも自分自身は凡てすべの技巧から解放された自由の人であるかのように。

八十四

退屈な細君は貸本屋から借りた小説を能く床の上で読んだ。時々枕元に置いてある厚紙の汚らしいその表紙が健三の注意を惹く時、彼は細君に向って訊いた。

「こんなものが面白いのかい」

細君は自分の文学趣味の低い事を嘲あざけられるような気がした。

「いいじゃありませんか、貴夫あなたに面白くなくったって、私わたくしにさえ面白
けりや」

色々な方面において自分と夫の隔離を意識していた彼女は、すぐこ
んな口が利きたくなつた。

健三の所へ嫁とぐ前の彼女は、自分の父と自分の弟と、それから官邸
に出入でいりする二、三の男を知っているぎりであつた。そうしてその人々
はみんな健三とは異ちがつた意味で生きて行くものばかりであつた。男性
に対する観念をその数人から抽象して健三の所へ持つて来た彼女は、
全く予期と反対した一個の男を、彼女の夫において見出した。彼女は
そのどつちかが正しくなければならぬと思つた。無論彼女の眼には
自分の父の方が正しい男の代表者の如くに見えた。彼女の考えは單純

であつた。今にこの夫が世間から教育されて、自分の父のように、型が變つて行くに違ないという確信を有^もつていた。

案に相違して健三は頑強^{がんきやう}であつた。同時に細君の膠着力^{こうちやくりよく}も固かつた。二人は二人同志で輕蔑^{けいべつ}し合つた。自分の父を何かにつけて標準に置きたがる細君は、ややともすると心の中で夫に反抗した。健三はまた自分を認めない細君を忌々^{いまいま}しく感じた。一刻な彼は遠慮なく彼女を眼下^{みくだ}に見下す態度を公けにして憚^{はばか}らなかつた。

「じゃ貴夫が教えて下されば好^いいのに。そんなに他^{ひと}を馬鹿にばかりなさらないで」

「御前の方に教えてもらおうという気がないからさ。自分はもうこれで一人前だという腹があつちや、己^{おれ}にやどうする事も出来ないよ」

誰が盲従するものかという気が細君の胸にあると同時に、到底啓発しようがないではないかという弁解が夫の心に潜んでいた。二人の間に繰り返されるこうした言葉争いは古いものであった。しかし古いだけで埒らちは一向開かなかつた。

健三はもう飽きたという風をして、手摺てずれのした貸本を投げ出した。

「読むなというんじゃない。それは御前の随意だ。しかし余あんまり眼を使わないようにしたら好いだろう」

細君は裁縫しごとが一番好きであつた。夜眼よるが冴さえて寐ねられない時などは、一時でも二時でも構わずに、細い針の目を洋燈ラングの下に運ばせていた。長女か次女が生れた時、若い元氣に任せて、相当の時期が経過しないうちに、縫物を取上げたのが本もとで、大變視力を悪くした経験も

あつた。

「ええ、針を持つのは毒ですけども、本位構わないでしょう。それも始終読んでいるんじゃないから」

「しかし疲れるまで読み続けない方が好かろう。でないと後で困る」

「なに大丈夫です」

まだ三十に足りない細君には過労の意味が能く解らなかつた。彼女は笑って取り合わなかつた。

「御前が困らなくつても己が困る」

健三はわざと手前勝手らしい事をいった。自分の注意を無にする細君を見ると、健三はよくこんな言葉遣いをしたがつた。それがまた夫の悪い癖の一つとして細君には数えられていた。

同時に彼のノートは益ますます細かくなつて行つた。最初蠅はえの頭位であつた字が次第に蟻ありの頭ほどに縮まつて来た。何故なぜそんな小さな文字を書かなければならないのかとさえ考えて見なかつた彼は、殆んど無意味に洋筆ペンを走らせてやまなかつた。日の光りの弱つた夕暮の窓の下、暗い洋燈ランプから出る薄い灯火ともしびの影、彼は暇さえあれば彼の視力を濫費らんぴして顧みなかつた。細君に向つてした注意をかつて自分に払わなかつた彼は、それを矛盾とも何とも思わなかつた。細君もそれで平氣らしく見えた。

細君の床が上げられた時、冬はもう荒れ果てた彼らの庭に霜柱の錐^{きり}を立てようとしていた。

「大変荒れた事、今年は例^{いつも}より寒いようね」

「血が少なくなったせいで、そう思うんだろう」

「そうでしょうかしら」

細君は始めて気が付いたように、両手を火鉢^{ひばち}の上に翳^{かざ}して、自分の爪^{つめ}の色を見た。

「鏡を見たら顔の色でも分りそうなものなのにね」

「ええ、そりゃ分ってますわ」

彼女は再び火の上に差し延べた手を返して蒼白^{あおしろ}い頬^{ほお}を二、三度撫^なでた。

「しかし寒い事も寒いんでしょう、今年は」

健三には自分の説明を聴かない細君が可笑しく見えた。

「そりや冬だから寒いに極ま^{きま}っているさ」

細君を笑う健三はまた人よりも一倍寒がる男であつた。ことに近頃の冬は彼の身体に厳しく中^{あた}つた。彼はやむをえず書斎に炬燵^{こたつ}を入れて、両膝^{りょうひざ}から腰のあたりに浸^しみ込む冷^{ひえ}を防いだ。神経衰弱の結果こう感ずるのかも知れないとさえ思わなかつた彼は、自分に対する注意の足りない点において、細君と異^{かわ}る所がなかつた。

毎朝夫を送り出してから髪に櫛^{くし}を入れる細君の手には、長い髪の毛が何本となく残つた。彼女は梳^すくたびに櫛の齒に絡^{から}まるその抜毛を残り惜^{おしげ}気に眺めた。それが彼女には失なわれた血潮よりもかえって大切

らしく見えた。

「新らしく生きたものを拵^{こしら}え上げた自分は、その償いとして衰えて行かなければならない」

彼女の胸には微^{かす}かにこういう感じが湧^わいた。しかし彼女はその微かな感じを言葉に纏^{まと}めるほどの頭を有^もっていなかった。同時にその感じには手柄をしたという誇りと、罰を受けたという恨みと、が交^{まじ}っていた。いずれにしても、新らしく生れた子が可愛^{かあい}くなるばかりであった。

彼女はぐたぐたして手応^{てごた}えのない赤ん坊を手際よく抱き上げて、その丸い頬^{ほお}へ自分の唇を持って行つた。すると自分から出たものはどうしても自分の物だという気が理窟なしに起つた。

彼女は自分の傍わきにその子を置いて、また裁たちもの板の前に坐すわった。そうして時々針の手をやめては、暖かそうに寐ねているその顔を、心配そうに上から覗のぞき込んだ。

「そりゃ誰の着物だい」

「やっぱりこの子のです」

「そんなにいくつも要いるのかい」

「ええ」

細君は黙って手を運ばしていた。

健三は漸やっと気が付いたように、細君の膝ひざの上に置かれた大きな模様のある切地きれじを眺めた。

「それは姉から祝ってくれたんだろう」

「そうです」

「下らない話だな。金もないのに止せば好いのに」

健三から貰^{もら}った小遣^{うち}の中を割^さいて、こういう贈り物をしなければ気の済まない姉の心持が、彼には理解出来なかった。

「つまり己^{おれ}の金で己^{おれ}が買ったと同じ事になるんだからな」

「でも貴夫^{あなた}に対する義理だと思っていらっしゃるんだから仕方がありませんわ」

姉は世間でいう義理を克明に守り過ぎる女であった。他^{ひと}から物を貰えばきつとそれ以上のものを贈り返そうとして苦しがつた。

「どうも困るね、そう義理々々って、何が義理だかさっぱり解りやしない。そんな形式的な事をするより、自分の小遣^{ひだ}を比田^{ひだ}に借りられない。

いような用心でもする方がよっぽど増しだ」

こんな事に掛けると存外無神経な細君は、強いて姉を弁護しようともしなかった。

「今にまた何か御礼をしますからそれで好いでしょう」

他を訪問する時に殆んど土産（ひとみやげ）ものを持参した例（ためし）のない健三は、それでもまだ不審そうに細君の膝の上にあるめりんすを見詰めていた。

八十六

「だから元は御姉（おあねえ）さんの所へ皆なが色んな物を持って来たんですつて」

細君は健三の顔を見て突然こんな事をいい出した。――

「十とおのものには十五の返しをなさる御姉さんの氣性を知ってるもんだから、皆なその御礼を目的あてに何か呉れるんだそうですよ」

「十のものに十五の返しをするったって、高が五十錢が七十五錢になるだけじゃないか」

「それで沢山なんでしょう。そういう人たちは」

他ひとから見ると酔興ひととしか思われなほど細かなノートばかり拵こしらえて
いる健三には、世の中にそんな人間が生きていようとさえ思えなかつた。

「随分厄介な交際つきあいだね。だいち馬鹿々々しいじゃないか」

「傍はたから見れば馬鹿々々しいようですけれども、その中に入ると、

やっぱり仕方がないんでしょう」

健三はこの間よそから臨時に受取った三十円を、自分がどう消費してしまっただかの問題について考えさせられた。

今から一カ月余り前、彼はある知人に頼まれてその男の経営する雑誌に長い原稿を書いた。それまで細かいノートより外に何も作る必要のなかった彼に取ってのこの文章は、違った方面に働いた彼の頭脳の最初の試みに過ぎなかった。彼はただ筆の先に滴る面白^{したた}い気分^{したた}に駆られた。彼の心は全く報酬を予期していなかった。依頼者が原稿料を彼の前に置いた時、彼は意外なものを拾ったように喜んだ。

兼て^{かね}からわが座敷^いの如何^かにも殺風景^いなのを苦に病んでいた彼は、すぐ団子坂^{だんござか}にある唐木^{からぎ}の指物師^{さしものし}の所へ行つて、紫檀^{したん}の懸額^{かけがく}を一枚作らせ

た。彼はその中に、支那から歸った友達に貰った北魏の二十品という石摺いしずりのうちにある一つを扨えり出して入れた。それからその額を環かんの着いた細長い胡麻竹ごまだけの下へ振ぶら下げて、床の間の釘くぎへ懸けた。竹に丸味があるので壁に落付おちつかないせいか、額は静かな時でも斜ななめに傾かたむいた。

彼はまた団子坂を下りて谷中やなかの方へ上のぼつて行つた。そうして其所そこにある陶器店から一個の花瓶はないけを買つて來た。花瓶は朱色であつた。中に薄い黄で大きな草花が描かれていた。高さは一尺余りであつた。彼はすぐそれを床の間の上へ載せた。大きな花瓶とふらふらする比較的小さい懸額とはどうしても釣合が取れなかつた。彼は少し失望したような眼をしてこの不調和な配合を眺めた。けれどもまるで何にもないよりは増しだと思へた。趣味に贅沢ぜいたくをいう余裕のない彼は、不満足のうち

ちに満足しなければならなかった。

彼はまた本郷通りにある一軒の呉服屋へ行つて反物たんものを買った。織物について何の知識もない彼はただ番頭が見せてくれるもののうちから、好いい加減な選択をした。それはむやみに光る緋かすりであつた。幼稚な彼の眼には光らないものより光るものの方が上等に見えた。番頭そろに揃はおりいの羽織こしらと着物を拵はおりえるべく勧められた彼は、遂に一匹の伊勢崎銘仙いせざきめいせんを抱えて店を出た。その伊勢崎銘仙という名前さえ彼はそれまでついで聞いた事がなかった。

これらの物を買とい調とえた彼は毫ごうも他人について考えなかった。新しく生れる子供さえ眼中になかつた。自分より困こっている人の生活などはてんから忘れていた。俗社会の義理を過重かちようする姉に比べて見る

と、彼は憐れなものに対する好意すら失なっていた。

「そう損をしてまでも義理が尽されるのは偉いね。しかし姉は生れ付いての見栄坊みえぼうなんだから、仕方がない。偉くない方がまだ増しだらう」

「親切気しんせつぎはまるでないんでしょうか」

「そうさな」

健三はちよつと考えなければならなかった。姉は親切気のある女に違いなかった。

「ことによると己おれの方が不人情に出来ているのかも知れない」

この会話がまだ健三の記憶を新しく彩^{いろど}っていた頃、彼は御常^{おつね}から第二回の訪問を受けた。

先達^{せんだつ}て見た時とほぼ同じように粗末な服装^{なり}をしている彼女の恰好^{かつこう}は、寒さと共に襦袢^{じゅばん}胴着^{どうぎ}の類でも重ねたのだろう、前よりは益丸^{ますます}まっちくなくなっていた。健三は客のために出した火鉢^{ひばち}をすぐその人の方へ押し遣^やった。

「いえもう御構い下さいますな。今日^{きょう}は大分御暖^{だいぶおあつた}かで御座いますから」

外部^{そと}には穏やかな日が、障子^{はめ}に簾^{がらす}めた硝子^{ごし}越に薄く光っていた。

「あなたは年を取って段々御肥^{おふと}りになるようですね」

「ええ御蔭^{からだ}さまで身体の方はまことに丈夫で御座います」

「そりゃ結構です」

「その代り身上しんしょうの方はただ痩やせる一方で」

健三には老後になってからこうむくむく肥る人の健康が疑がわれた。少なくとも不自然に思われた。どこか不気味に見えるところもあつた。

「酒でも飲むんじゃなからうか」

こんな推察さえ彼の胸を横切つた。

御常の肌身はだみに着けているものは悉ことごとく古びていた。幾度いくたび水を潜くぐつた

か分らないその着物なり羽織はおりなりは、どこかに絹の光が残っているよ

うで、また変にごつごつしていた。ただどんなに時代を食つても、綺きれ

麗いに洗張あらいはりが出来ている所に彼女の気性が見えるだけであつた。健三は

丸いながら如何いかにも窮屈きうくつそうなその人の姿を眺めて、彼女の生活状態と彼女の口に距離のない事を知った。

「どこを見ても困る人だらけで弱りますね」

「こちらなどが困っていらしっちゃあ、世の中に困らないものは一人も御座いません」

健三は弁解する気にさえならなかった。彼はすぐ考えた。

「この人は己おれを自分より金持と思っているように、己を自分より丈夫だとも思っているのだろう」

近頃の健三は実際健康を損そこなっていた。それを自覚しつつ彼は医者にも診みてもらわなかった。友達にも話さなかった。ただ一人で不愉快を忍んでいた。しかし身体の未来を想像するたんびに彼はむ・し・やく

し・や・した。或時は他ひとが自分をこんなに弱くしてしまつたのだというよ
うな氣を起して、相手のないのに腹を立てた。

「年が若くつて起居たちいに不自由さえなければ丈夫だと思ふんだらう。門もんが
構まへの宅うちに住んで下女げじよさえ使つていれば金でもあると考えるように」

健三は黙つて御常の顔を眺めていた。同時に彼は新らしく床とこの間に
飾はなられた花瓶はいけとその後うしろに懸かけつてゐる懸額かけがくとを眺めた。近いうちに袖そでを
通すべきぴかぴかする反物たんものも彼の心のうちにあつた。彼は何故なぜこの年
寄よに対して同情を起し得ないのだろうかと怪しんだ。

「ことによると己の方が不人情なのかも知れない」

彼は姉の上に加えた評をもう一遍腹の中で繰り返した。そうして
「何不人情でも構うものか」という答を得た。

御常は自分の厄介になっている娘婿の事について色々な話をし始めた。世間一般によく見る通り、その人の手腕うでがすぐ彼女の問題になった。彼女の手腕というのは、つまり月々入る金の意味で、その金より外に人間の価値を定めるものは、彼女に取って、広い世界に一つも見み当たらないらしかった。

「何しろ取高とりだかが少ないもんですから仕方が御座みいません。もう少し稼かせいでくれると好いいのですけれども」

彼女は自分の娘婿を捉つかまえて愚図やぐざだとも無能むねだともいわない代りに、毎月彼の労力が産み出す収入の高を健三の前に並べて見せた。あたかも物指ものさしで反物の寸法さえ計れば、縞柄しまがらだの地質ちしつだのは、まるで問題にならないといった風に。

生憎^{あいにく}健三はそうした尺度で自分を計ってもらいたくない商売をしている男であつた。彼は冷淡に彼女の不平を聞き流さなければならなかつた。

八十八

好い加減な時分に彼は立つて書斎に入った。机の上に載せてある紙入を取つて、そつと中を改めると、一枚の五円札があつた。彼はそれを手に握つたまま元の座敷へ歸つて、御常の前へ置いた。

「失礼ですがこれで俵^{くるま}へでも乗つて行つて下さい」

「そんな御心配を掛けては済みません。そういうつもりで上^{あが}つたので

は御座いせんから」

彼女は辞退の言葉と共に紙幣を受け納めて懐^{ふところ}へ入れた。

小遣^やを遣^やる時の健三がこの前と同じ挨拶^{あいさつ}を用いたように、それを貰^{もら}う御常の辞令も最初と全く違わなかった。その上偶然にも五円という金高^{かねだか}さえ一致していた。

「この次来た時に、もし五円札がなかったらどうしよう」

健三の紙入がそれだけの実質で始終充たされていない事はその所有主の彼に知れているばかりで、御常に分るはずがなかった。三度目に来る御常を予想した彼が、三度目に遣る五円を予想する訳に行かなかった時、彼はふと馬鹿々々しくなった。

「これからあの人が来ると、何時でも五円遣らなければならぬよう

な気がする。つまり姉が要らざる義理立ぎりだてをするのと同じ事なのかしら」

自分の関係した事じゃないといった風に熨斗ひのしを動かしていた細君は、手を休めずにこういった。――

「ないときは遣らないでも好いじゃありませんか。何もそう見栄みえを張る必要はないんだから」

「ない時に遣ろうたって、遣れないのは分ってるさ」

二人の問答はすぐ途切れてしまった。消えかかった炭ひのしを熨斗ひのしから火鉢ひばへ移す音がその間に聞こえた。

「どうしてまた今日は五円入っていたんです。貴夫あなたの紙入かみいれに」

健三は床の間に釣り合わない大きな朱色の花瓶はないけを買うのに四円いく

らか払った。懸額かけがくを誂あつらえるとき五円なにがしか取られた。指物師さしものしが百円に負けて置くから買わないかといった立派な紫檀したんの書棚をじろじろ見ながら、彼はその二十分の一にも足りない代価を大事そうに懷中から出して匠人しょうにんの手に渡した。彼はまたぴかぴかする一匹の伊勢崎銘いせざきめい仙せんを買うのに十円余りを費やした。友達から受取った原稿料がこう形を変えたあとに、手垢てあかの付いた五円札がたった一枚残ったのである。

「実はまだ買いたいものがあるんだがな」

「何を御買いになるつもりだったの」

健三は細君の前に特別な品物の名前を挙げる事が出来なかった。

「沢山あるんだ」

慾に際限のない彼の言葉は簡単であつた。夫と懸け離れた好尚を

有^もっている細君は、それ以上追窮する面倒を省いた代りに、外の質問を彼に掛けた。

「あの御婆^{おばあ}さんは御姉^{おあねえ}さんなんぞよりよっぽど落ち付いているのね。

あれじゃ島田^{うち}って人と宅^{うち}で落ち合^あつても、そう喧嘩^{けんか}もしないでしよう」

「落ち合わないからまだ仕合せなんだ。二人が一所の座敷で顔を見合せでもして見るがいい、それこそ堪^{たま}らないや。一人ずつ相手にしているんでさえ沢山な所へ持つて来て」

「今でもやっぱり喧嘩が始まるでしうか」

「喧嘩はとにかく、己^{おれ}の方が厭^{いや}じゃないか」

「二人ともまだ知らないようね。片^うつ方が宅^{うち}へ来る事を」

「どうだか」

島田はかつて御常の事を口にしなかった。御常も健三の予期に反して、島田については何にも語らなかった。

「あの御婆さんの方がまだあの^い人より好いでしよう」

「どうして」

「五円貰うと黙って帰って行くから」

島田の請求慾の訪問ごとに増長するのに比べると、御常の態度は尋常に違なかった。

日ならず鼻の下の長い島田の顔がまた健三の座敷に現われた時、彼はすぐ御常の事を聯想した。

彼らだつて生れ付いての敵同志でない以上、仲の好い昔もあつたに違ない。他から爪に灯を点すようだといわれるのも構わずに、金ばかり溜めた当時は、どんなに楽しかつたろう。どんな未来の希望に支配されていただろう。彼らに取つて睦まじさの唯一の記念とも見るべきその金がどこかへ飛んで行つてしまった後、彼らは夢のような自分たちの過去を、果してどう眺めているだろう。

健三はもう少しで御常の話を島田にするとところであつた。しかし過去に無感覚な表情しか有たない島田の顔は、何事も覚えていないように鈍かつた。昔の憎悪、古い愛執、そんなものは当時の金と共に彼の

心から消え失せてしまったとしか思われなかった。

彼は腰から烟草タバコ入れを出して、刻み烟草を雁首がんくびへ詰めた。吸殻すいがらを落す

ときには、左の掌てのひらで烟管キセルを受けて、火鉢ひばちの縁を敲たたかなかった。脂やにが

溜たまっていると見えて、吸う時にじゅじゅ音がした。彼は無言で懐中ふところを

探った。それから健三の方を向いた。

「少し紙はありませんか、生憎あいにく烟管が詰って」

彼は健三から受取った半紙を割さいて小撚こよりを拵こしらえた。それで二返も三

返も羅宇ラウの中を掃除した。彼はこういう事をするのに最も馴なれた人で

あった。健三は黙ってその手際を見ていた。

「段々暮になるんでさぞ御忙がしいでしょう」

彼は疎通とおりの好くなつた烟管をぷっぷつと心持好さそうに吹きながら

こういった。

「我々の家業は暮も正月もありません。年が年中同じ事です」

「そりや結構だ。大抵の人はそうは行きませんよ」

島田がまだ何かいおうとしているうちに、奥で子供が泣き出した。

「おや赤ん坊のようですね」

「ええ、つい此間こないだ生れたばかりです」

「そりやどうも。些ちつとも知りませんでした。男ですか女ですか」

「女です」

「へええ、失礼だがこれで幾人目いくたりですか」

島田は色々な事を訊きいた。それに相当な受応うけこたえをしている健三の胸に

どんな考えが浮かんでいるかまるで気が付かなかった。

出産率が殖えると死亡率も増すという統計上の議論を、つい四、五日前ある外国の雑誌で読んだ健三は、その時赤ん坊がどこかで一人死なれば、年寄が一人どこかで死ぬものだというような理窟とも空想とも付かない変な事を考えていた。

「つまり身代りに誰かが死ななければならぬのだ」

彼の観念は夢のようにぼんやりしていた。詩として彼の頭をぼうつと侵すだけであつた。それをもつと明瞭になるまで理解の力で押し詰めて行けば、その身代りは取も直さず赤ん坊の母親に違なかつた。次には赤ん坊の父親でもあつた。けれども今の健三は其所^{そこ}まで行く気はなかつた。ただ自分の前にいる老人にだけ意味のある眼^{まなこ}を注いだ。何のために生きているか殆んど意義の認めようのないこの年寄は、身代

りとして最も適当な人間に違なかつた。

「どういう訳でこう丈夫なのだろう」

健三は殆んど自分の想像の残酷さ加減さえ忘れてしまった。そうして人並でないわが健康状態については、毫ごうも責任がないものの如き忌々いまいましさを感じた。その時島田は彼に向つて突然こういった。――

「御縫おぬいもとうとう亡くなつてね。御祝儀は済んだが」

とても助からないという事だけは、脊髄病せきずいびょうという名前から推おして、

とうに承知していたようなものの、改まつてそういわれて見ると、健三も急に氣の毒になつた。

「そうですか。可愛想かわいそうに」

「なに病氣が病氣だからとても癒なおりつこないんです」

島田は平然としていた。死ぬのが当り前だといったように烟草の輪を吹いた。

九十

しかしこの不幸な女の死に伴なつて起る経済上の影響は、島田に取つて死そのものよりも遙はるかに重大であつた。健三の予想はすぐ事実となつて彼の前に現れなければならなかつた。

「それについて是非一つ聞いてもらわないと困る事があるんですが」
此所ここまで来て健三の顔を見た島田の様子は緊張していた。健三は聴かない先からその後を推察あとする事が出来た。

「また金でしょう」

「まあそうで。御縫が死んだんで、柴野と御藤との縁が切れちゃったもんだから、もう今までのように月々送らせる訳に行かなくなっただね」

島田の言葉は変にぞんざいになったり、また鄭寧ていねいになったりした。

「今までは金鵄勲章きんしゅんしょうの年金だけはちゃんちゃんとこっちへ来たんですかね。それが急になくなると、まるで目的あてが外れるような始末で、私も困るんです」

彼はまた調子を改めた。

「とにかくこうなっちゃ、御前を措おいてもう外に世話をしてもらう人は誰もありやしない。だからどうかしてくれなくっちゃ困る」

「そう他にひとのし懸って来たって仕方ありません。今の私わたくしにはそれだけの事をしなければならぬいんねん因縁も何もないんだから」

島田は凝じっと健三の顔を見た。半ば探りを入れるような、半ば弱いものを脅かすようなその眼付は、単に相手の心を激昂げつこうさせるだけであつた。健三の態度から深入ふかいりの危険を知つた島田は、すぐ問題を区切つて小さくした。

「永い間の事はまた緩々ゆるゆる御話しをするとして、じゃこの急場だけでも一つ」

健三にはどういう急場が彼らの間に持ち上っているのか解らなかつた。

「この暮を越さなくっちゃならないんだ。どこの宅うちだつて暮になりや

百と二百と纏まとった金の要いるのは当り前だろう」

健三は勝手にしろという氣になった。

「私にそんな金はありませんよ」

「笑談じょうだんいっちゃいけない。これだけの構かまえをしていて、その位の融通が

利かないなんて、そんなはずがあるもんか」

「あつてもなくつても、ないからないというだけの話です」

「じゃいうが、御前の収入は月に八百円あるそうじゃないか」

健三はこの無茶苦茶な言掛いいがりに怒おこらされるよりはむしろ驚ろかされ

た。

「八百円だろうが千円だろうが、私の収入は私の収入です。貴方あなたの關係した事じゃありません」

島田は其所^{そこ}まで来て黙った。健三の答が自分の予期に外れたという
ような風も見えた。ずうずうしい割に頭の発達していない彼は、それ
以上相手をどうする事も出来なかった。

「じゃいくら困っても助けてくれないというんですね」

「ええ、もう一文も上ません」

島田は立ち上った。沓脱^{くつぬぎ}へ下りて、開けた格子^{こうし}を締める時に、彼は
また振り返った。

「もう参^{あが}上りませんから」

最後であるらしい言葉を一句遺した彼の眼は暗い中^{うち}に輝やいた。健
三は敷居の上に立って明らかにその眼を見下^{みおろ}した。しかし彼はその輝
きのうちに何らの凄^{すご}さも怖ろしさもまた不気味さも認めなかった。彼

自身の眸ひとみから出る怒りいかと不快とは優にそれらの襲撃を跳ね返すに充分であつた。

細君は遠くから暗あんに健三の気色けしきを窺うかがつた。

「一体どうしたんです」

「勝手にするが好いいや」

「また御金でも呉れろって来たんですか」

「誰やが遣るもんか」

細君は微笑しながら、そつと夫を眺めるような態度を見せた。

「あの御婆おばあさんの方が細く長く続くからまだ安全ね」

「島田の方だつて、これで片付くもんかね」

健三は吐き出すようにこういつて、来きたるべき次の幕さえ頭の中に予

想した。

九十一

同時に今まで眠っていた記憶も呼び覚まされずには済まなかった。

彼は始めて新らしい世界に臨む人の鋭どい眼をもつて、実家へ引き取られた遠い昔を鮮明あざやかに眺めた。

実家の父に取つての健三は、小さな一個の邪魔物であつた。何しにこんな出来損できそこないが舞い込んで来たかという顔付をした父は、殆んど子としての待遇を彼に与えなかった。今までと打つて変つた父のこの態度が、生うみの父に対する健三の愛情を、根こぎにして枯らしつくした。

彼は養父母の手前始終自分に対してにこにこしていた父と、厄介物を背負い込んでからすぐ慳貪に調子を改めた父とを比較して一度は驚ろいた。次には愛想をつかした。しかし彼はまだ悲観する事を知らなかった。發育に伴なう彼の生氣は、いくら抑え付けられても、下からむくむくと頭を擡げた。彼は遂に憂鬱にならずに済んだ。

子供を沢山有っていた彼の父は、毫も健三に依怙る気がなかった。今に世話になろうという下心のないのに、金を掛けるのは一錢でも惜しかった。繋がる親子の縁で仕方なしに引き取ったようなものの、飯を食わせる以外に、面倒を見て遣るのは、ただ損になるだけであつた。

その上肝心の本人は帰つて来ても籍は復らなかつた。いくら実家で

丹精して育て上たにしたところで、いざという時に、また伴つれて行かれればそれまでであつた。

「食わすだけは仕方がないから食わして遣る。しかしその外の事はこつちじゃ構えない。先方むこうでするのが当然だ」

父の理窟はこうであつた。

島田はまた島田で自分に都合の好い方からばかり事件の成行なりゆきを觀望していた。

「なに実家へ預けて置きさえすればどうにかするだろう。その内健三が一人前になつて少しでも働らけるようになったら、その時表沙汰おもてぎたにしてでもこつちへ奪還ふんだくつてしまえばそれまでだ」

健三は海にも住めなかつた。山にもいられなかつた。両方から突き

返されて、両方の間をまごまごしていた。同時に海のものも食い、時には山のものにも手を出した。

実父から見ても養父から見ても、彼は人間ではなかった。むしろ物品であつた。ただ実父が我^{がらくた}樂多として彼を取り扱つたのに対して、養父には今に何かの役に立てて遣ろうという目算があるだけであつた。

「もうこつちへ引き取つて、給仕^{きゆうじ}でも何でもさせるからそう思うがい」

健三が或日養家を訪問した時に、島田は何かのついでにこんな事をいった。健三は驚ろいて逃げ歸つた。酷薄という感じが子供心に淡い恐ろしさを与えた。その時の彼は幾^{いくつ}歳だつたか能^よく覚えていないけれども、何でも長い間の修業をして立派な人間になつて世間に出なければ

ばならないという慾が、もう充分萌きざしている頃であつた。

「給仕になんぞされては大変だ」

彼は心のうちで何遍も同じ言葉を繰り返した。幸さいわいにしてその言葉は徒勞むだに繰り返されなかった。彼はどうかこうか給仕にならずに済んだ。

「しかし今の自分はどうして出来上つたのだろう」

彼はこう考えると不思議でならなかった。その不思議のうちには、自分の周囲と能く闘い終おせたものだという誇りも大分交だいぶまじっていた。そうしてまだ出来上らないものを、既に出来上つたように見る得意も無論含まれていた。

彼は過去と現在との対照を見た。過去がどうしてこの現在に発展し

て来たかを疑がった。しかもその現在のために苦しんでいる自分には
まるで気が付かなかつた。

彼と島田との関係が破裂したのは、この現在の御蔭であつた。彼が
御常を忌むのも、姉や兄と同化し得ないのもこの現在の御蔭であつ
た。細君の父と段々離れて行くのもまたこの現在の御蔭に違なかつ
た。一方から見ると、他と反が合ひとそりわなくなるように、現在の自分を作
り上げた彼は気の毒なものであつた。

九十二

細君は健三に向つていった。――

「貴夫あなたに氣に入る人はどうせどこにもいないでしょうよ。世の中はみんな馬鹿ばかりですから」

健三の心はこうした諷刺ふうしを笑って受けるほど落付おちついていなかった。

周囲の事情は雅量に乏しい彼を益窮屈ますますにした。

「御前は役に立ちさえすれば、人間はそれで好いいいと思っっているんだろう」

「だって役に立たなくっちゃ何にもならないじゃありませんか」

生憎あいにく細君の父は役に立つ男であつた。彼女の弟もそういう方面にだけ発達する性質たちであつた。これに反して健三は甚だ実用に遠い生れ付であつた。

彼には転宅の手伝いすら出来なかつた。大掃除の時にも彼は懷手ふところを

したなり澄ましていた。行李一つ絡げるにさえ、彼は細紐をどう渡すべきものやら分らなかった。

「男のくせに」

動かない彼は、傍のものの眼に、如何にも氣の利かない鈍物のように映った。彼はなおさら動かなかった。そうして自分の本領を益反対の方面に移して行つた。

彼はこの見地から、昔し細君の弟を、自分の住んでいる遠い田舎へ伴れて行つて教育しようとした。その弟は健三から見ると如何にも生意氣であつた。家庭のうちを横行して誰にも遠慮会釈がなかった。ある理学士に毎日自宅で課業の復習をしてもらう時、彼はその人の前で構わず胡坐をかいた。またその人の名を何君何君と君づけに呼んだ。

「あれじゃ仕方がない。わたくし私に御預けなさい。私が田舎へ連れて行って育てるから」

健三の申出は細君の父によつて黙つて受け取られた。そうして黙つて捨てられた。彼は眼前に横暴を恣ほまにする我子を見て、何という未来の心配も抱いだいていないように見えた。彼ばかりか、細君の母も平氣であつた。細君も一向氣に掛ける様子がなかつた。

「もし田舎へ遣やつて貴夫と衝突したり何なんかすると、折合が悪くなつて、後が困るから、それでやめたんだそうです」

細君の弁解を聞いた時、健三は満更まんざらの嘘うそとも思わなかつた。けれどもその他ほかにまだ意味が残っているようにも考えた。

「馬鹿じゃありません。そんな御世話にならなくつても大丈夫です」

周囲の様子から健三は謝絶の本意がかえって此所にあるのではなからうかと推察した。

なるほど細君の弟は馬鹿ではなかった。むしろ伶俐過ぎた。健三にもその点はよく解っていた。彼が自分と細君の未来のために、彼女の弟を教育しようとしたのは、全く見当の違った方面にあった。そうして遺憾ながらその方面は、今日に至るまでいまだに細君の父母にも細君にも了解されていなかった。

「役に立つばかりが能じゃない。その位の事が解らなくってどうするんだ」

健三の言葉は勢い権柄けんぺいづくであつた。傷けきずられた細君の顔には不満の色がありありと見えた。

機嫌の直った時細君はまた健三に向った。――

「そう頭からがみがみいわないで、もっと解るようにいって聞かして下すたら好いでしよう」

「解るようにいおうとすれば、理窟ばかり捏ね返すっていうじゃないか」

「だからもっと解りやすいように。私に解らないような小六こむずかしい理窟はやめにして」

「それじゃどうしたって説明しようがない。数字を使わずに算術を遣れと注文するのと同じ事だ」

「だって貴夫の理窟は、他ひとを捻ねじ伏せるために用いられるとより外に考えようのない事があるんですもの」

「御前の頭が悪いからそう思うんだ」

「私の頭も悪いかも知れませんが、中味のない空っぽの理窟で捻じ伏せられるのは嫌ですよ」

二人はまた同じ輪の上をぐるぐる廻り始めた。

九十三

面と向って夫としつくり融け合う事の出来ない時、細君はやむをえず彼に背中を向けた。そうして其所そこに寐ねている子供を見た。彼女は思い出したように、すぐその子供を抱き上げた。

章魚たこのようにぐにやぐにやしている肉の塊りと彼女との間には、理

窟の壁も分別の牆かきもなかった。自分の触れるものが取も直さず自分のような気がした。彼女は温かい心を赤ん坊の上に吐き掛けるために、唇を着けて所嫌わず接吻せつぶんした。

「貴夫あなたわたくしが私のものでなくつても、この子は私の物よ」

彼女の態度からこうした精神が明らかに読まれた。

その赤ん坊はまだ眼鼻立めはなだちさえ判明はつきりしていなかった。頭には何時まで待っても殆んど毛ほとらしい毛が生えて来なかった。公平な眼から見ると、どうしても一個の怪物であつた。

「変な子が出来たものだなあ」

健三は正直な所をいった。

「どこの子だって生れたては皆なこの通りです」

「まさかそうでもなからう。もう少しは整ったのも生れるはずだ」

「今に御覧なさい」

細君はさも自信のあるような事をいった。健三には何という見当も付かなかった。けれども彼は細君がこの赤ん坊のために夜中何度^{やちゆう}となく眼を覚ますのを知っていた。大事な睡眠を犠牲にして、少しも不愉快な顔を見せないのも承知していた。彼は子供に対する母親の愛情が父親のそれに比べてどの位強いかの疑問にさえ逢着^{ほうちやく}した。

四、五日前少し強い地震のあつた時、臆病^{おくびよう}な彼はすぐ縁^{えん}から庭へ飛び下りた。彼が再び座敷へ上^{あが}つて来た時、細君は思いも掛けない非難を彼の顔に投げ付けた。

「貴夫は不人情ね。自分一人好ければ構わない気なんだから」

何故^{なぜ}子供の安危^{あんき}を自分より先に考えなかったかというのが細君の不
平であつた。咄嗟^{とつさ}の衝動から起つた自分の行為に対して、こんな批評
を加えられようとは夢にも思っていなかった健三は驚ろいた。

「女にはああいう時でも子供の事が考えられるものかね」

「当たり前ですわ」

健三は自分が如何^{いか}にも不人情のような気がした。

しかし今の彼は我物顔に子供を抱いている細君を、かえつて冷^{ひや}かに
眺めた。

「訳の分らないものが、いくら束になつたって仕様がなない」

しばらくすると彼の思索がもつと広い区域にわたつて、現在から遠
い未来に延びた。

「今にその子供が大きくなって、御前から離れて行く時期が来るに極きまっている。御前は己おれと離れても、子供とさえ融け合つて一つになつていれば、それで沢山だという氣でいるらしいが、それは間違だ。今に見ろ」

書齋に落付おちついた時、彼の感想がまた急に科学的色彩を帯び出した。

「芭蕉ばしょうに実が結なると翌年あくるとしからその幹は枯れてしまう。竹も同じ事である。動物のうちには子を生むために生きているのか、死ぬために子を生むのか解らないものがいくらでもある。人間も緩漫ながらそれに準じた法則にやッぱり支配されている。母は一旦自分の所有するあらゆるものを犠牲にして子供に生を与えた以上、また余りのあらゆるものを犠牲にして、その生を守護しなければなるまい。彼女が天からそう

いう命令を受けてこの世に出たとするならば、その報酬として子供を独占するのは当り前だ。故意というよりも自然の現象だ」

彼は母の立場をこう考え尽した後、^{あと}父としての自分の立場をも考えた。そうしてそれが母の場合とどう違っているかに思い^{いた}到った時、彼は心のうちでまた細君に向っていった。

「子供を有^もった御前は仕合せである。しかしその仕合せを享^うける前に御前は既に多大な犠牲を払っている。これから先も御前の気の付かない犠牲をどの位払うか分らない。御前は仕合せかも知れないが、実は気の毒なものだ」

年は段々暮れて行つた。寒い風の吹く中に細かい雪片がちらちらと見え出した。子供は日に何度となく「もういくつ寝ると御正月」という唄をうたつた。彼らの心は彼らの口にする唱歌の通りであつた。来るべき新年の希望に充ちていた。

書斎にいる健三は時々手に洋筆を持ったまま、彼らの声に耳を傾けた。自分にもああいう時代があつたのかしらなどと考えた。

子供はまた「旦那の嫌な大晦日」という毬歌をうたつた。健三は苦笑した。しかしそれも今の自分の身の上には痛切に的中らなかった。彼はただ厚い四つ折の半紙の束を、十も二十も机の上に重ねて、それを一枚ごとに読んで行く努力に悩まされていた。彼は読みながらその紙へ赤い印気で棒を引いたり丸を書いたり三角を附けたりした。それ

から細かい数字を並べて面倒な勘定もした。

半紙に認ためられたものは悉く鉛筆の走り書なので、光線の暗い所では字画さえ判然^{はんぜん}しないのが多かった。乱暴で読めないのも時々出て来た。疲れた眼を上げて、積み重ねた束を見る健三は落胆^{がっかり}した。「ペネロピーの仕事」という英語の俚諺^{ことわざ}が何遍となく彼の口に上^{のぼ}った。

「何時まで経ったって片付きやしない」

彼は折々筆を擱^おいて溜息^{ためいき}をついた。

しかし片付かないものは、彼の周囲前後にまだいくらでもあった。

彼は不審な顔をしてまた細君の持つて来た一枚の名刺に眼を注がなければならなかった。

「何だい」

「島田の事についてちよつと御目に掛りたいっていうんです」

「今差支るからつて返してくれ」
さしつかえ

一度立つた細君はすぐまた戻つて来た。

「何時伺つたら好いか御都合を聞かして頂きたいんですつて」

健三はそれどころじゃないという顔をしながら、自分の傍そばに高く積

み重ねた半紙の束を眺めた。細君は仕方なしに催促した。

「何といいましょう」

「明後日あさっての午後に来て下さいといつてくれ」

健三も仕方なしに時日を指定した。

仕事を中絶された彼はぼんやり烟草タバコを吹かし始めた。ところへ細君

がまた入つて来た。

「帰ったかい」

「ええ」

細君は夫の前に広げてある赤い印しるしの附いた汚らしい書きものを眺めた。夜中に何度となく赤ん坊のために起こされる彼女の面倒が健三に解らないように、この半紙の山を綿密に読み通す夫の困難も細君には想像出来なかった。――

調べ物を度外に置いた彼女は、坐すわるとすぐ夫に訊たずねた。――

「また何かそういつて来る気でしょうね。執しつツ濃こい」

「暮のうちにどうかしようというんだらう。馬鹿らしいや」

細君はもう島田を相手にする必要がないと思つた。健三の心はかえって昔の關係上多少の金を彼に遣やる方に傾いていた。しかし話は其そ

所^こまで発展する機会を得^えずによそへ外^それてしまった。

「御前^{うち}の宅の方はどうだい」

「相変らず困るんでしよう」

「あの鉄道会社の社長の口はまだ出来ないのかい」

「あれは出来るんですって。けれどもそうこつちの都合の好いように、ちよつくらちよいとという訳には行かないんでしよう」

「この暮^むのうちには六^むずかしいのかね」

「とても」

「困るだろうね」

「困つても仕方ありませんわ。何もかもみんな運命なんだから」
細君は割合に落付^{おちつ}いていた。何事も諦^{あきら}らめているらしく見えた。

九十五

見知らない名刺の持参者が、健三の指定した通り、中なかいちにち一日置いて再び彼の玄関に現れた時、彼はまだささくれた洋筆先ペンさきで、粗末な半紙の上に、丸だの三角だのと色々な符徴を附けるのに忙がしかった。彼の指頭ゆびさきは赤い印気インキで所々汚よごれていた。彼は手も洗わずにそのまま座敷へ出た。

島田のために来たその男は、前の吉田に比べると少し型を異ことにしたが、健三からいえば、双方とも殆ほとんど差別のない位懸け離れた人間であつた。

彼は縞しまの羽織はおりに角帯かくおびを締めて白足袋しろたびを穿はいていた。商人とも紳士と

も片の付かない彼の様子なり言葉遣なりは、健三に差配という一種の人柄を思い起させた。彼は自分の身分や職業を打ら明ける前に、卒然として健三に訊いた。き——

「貴方あなたは私の顔を覚えて御出おいでですか」

健三は驚ろいてその人を見た。彼の顔には何らの特徴もなかった。

強しいていえば、今日こんにちまでただ世帯染しよたいじみて生きて来たという位のものがあつた。

「どうも分りませんね」

彼は勝ち誇った人のように笑った。

「そうでしょう。もう忘れても好いい時分ですから」

彼は区切を置いてまた附け加えた。

「しかし私やこれでも貴方の坊ちゃん坊ちゃんていわれた昔をまだ覚えていますよ」

「そうですか」

健三は素ツ気ない挨拶をしたなり、その人の顔を凝と見守った。

「どうしても思い出せませんかね。じゃ御話しましょう。私や昔し島田さんが扱所を遣つていなすった頃、あすこに勤めていたものです。ほら貴方が悪戯をして、小刀で指を切つて、大騒ぎをした事があるでしょう。あの小刀は私の硯箱の中にあつたんでさあ。あの時金盥に水を取つて、貴方の指を冷したのも私ですぜ」

健三の頭にはそうした事実が明らかにまだ保存されていた。しかし今自分の前に坐っている人のその時の姿などは夢にも憶い出せなかつ

た。

「その縁故で今度また私が頼まれて、島田さんのために上^{あが}ったような訳^{わけ}合^{あい}なんです」

彼は直^{すぐ}本題に入った。そうして健三の予期していた通り金の請求をし始めた。

「もう再び御宅へは伺わないといっていますから」

「この間帰る時既にそういつて行つたんです」

「で、どうでしょう、此^{ここ}所^こいらで綺麗^{きれい}に片を付ける事にしたら。それでないと何時まで経つても貴方が迷惑するぎりですよ」

健三は迷惑を省いてやるから金を出せといった風な相手の口^{こう}氣^きを快よく思わなかった。

「いくら引つ懸っていたって、迷惑じゃありません。どうせ世の中の事は引つ懸りだらけなんですから。よし迷惑だとしても、出すまじき金を出す位なら、出さないで迷惑を我慢していた方が、私にはよッぽど心持が好いんです」

その人はしばらく考えていた。少し困ったという様子も見えた。しかしやがて口を開いた時は思いも寄らない事をいい出した。

「それに貴方も御承知でしょうが、離縁の際貴方から島田へ入れた書付がまだ向うの手にありますから、この際いくらでも纏めたものを渡して、あの書付と引き易えになすった方が好くはありませんか」

健三はその書付を慥に覚えていた。彼が実家へ復籍する事になった時、島田は当人の彼から一札入れてもらいたいと主張したので、健三

の父もやむをえず、何でも好いから書いて遣れと彼に注意した。何も書く材料のない彼は仕方なしに筆を執った。そうして今度離縁になつたについては、向後御互に不義理不人情な事はしたくないものだといふ意味を僅二行余に綴つて先方へ渡した。

「あんなものは反故同然ですよ。向で持っていても役に立たず、私が貰つても仕方がないんだ。もし利用出来る気ならいくらでも利用したら好いでしょう」

健三にはそんな書付を売り付けに掛るその人の態度がなお気に入らなかつた。

話が行き詰るとその人は休んだ。それから好い加減な時分にまた同じ問題を取り上げた。いう事は散漫であつた。理で押せなければ情に訴えるという風でもなかつた。ただ物にさえすれば好いという料簡^{りようけん}が露骨に見透かされた。収束するところなく共に動いていた健三はしまいに飽きた。

「書付を買えの、今に迷惑するのが厭^{いや}なら金を出せのといわれるとこつちでも断るより外に仕方がありませんが、困るからどうかしてもらいたい、その代り向後^{こうご}一切無心がましい事はいつて来ないと保証するなら、昔の情義上少しの工面はして上げても構いません」

「ええそれがつまり私^{わたくし}の来た主意なんですから、出来るならどうかそう願いたいもんで」

健三はそんなら何故早くそういわないのかと思つた。同時に相手も、何故もつと早くそういつてくれないのかという顔付をした。

「じゃどの位出して下さいます」

健三は黙つて考えた。しかしどの位が相当のところだか判明した目安の出て来ようはずはなかつた。その上なるべく少ない方が彼の便宜であつた。

「まあ百円位なものですね」

「百円」

その人はこう繰り返した。

「どうでしょう、責めて三百円位にして遣る訳には行きますまいか」

「出すべき理由さえあれば何百円でも出します」

「御尤もだが、島田さんもああして困ってるもんだから」

「そんな事をいやあ、私^{わたし}だって困っています」

「そうですか」

彼の語気はむしろ皮肉であつた。

「元来一文も出さないといたつて、貴方^{あなた}の方じゃどうする事も出来ないでしょう。百円で悪けりや御止^{およ}しなさい」

相手は漸く懸引^{ようや かけひき}をやめた。

「じゃともかくも本人によくそう話して見ます。その上でまた上^{あが}る事にしますから、どうぞ何分」

その人が歸つた後で健三は細君に向つた。

「とうとう来た」

「どうしたっていうんです」

「また金を取られるんだ。人さえ来れば金を取られるに極きまってるから厭いやだ」

「馬鹿らしい」

細君は別に同情のある言葉を口へ出さなかった。

「だって仕方がないよ」

健三の返事も簡単であつた。彼は其そこ所へ落付くまでの筋道を委くわしく細君に話してやるのさえ面倒だつた。

「そりゃ貴夫あなたの御金を貴夫が御遣りになるんだから、私何わたくしもいう訳はありませんわ」

「金なんかあるもんか」

健三は擲^{たた}き付けるようにこういつて、また書齋へ入った。其所には鉛筆で一面に汚^{よご}された紙が所々赤く染ったまま机の上で彼を待っていた。彼はすぐ洋筆^{ペン}を取り上げた。そうして既に汚れたものをなおさら赤く汚さなければならなかった。

客に会う前と会った後との気分の相違が、彼を不公平にしはしまいかとの恐れが彼の心に起った時、彼は一旦読み終わったものを念のためまた読んだ。それですら三時間前の彼の標準が今の標準であるかどうか、彼には全く分らなかった。

「神でない以上公平は保てない」

彼はあやふやな自分を弁護しながら、ずんずん眼を通し始めた。しかし積重ねた半紙の束は、いくら速力を増しても尽きる期がなかった。

た。漸く一組を元のように折るとまた新らしく一組を開かなければならなかった。

「神でない以上辛抱だつてし切れない」

彼はまた洋筆^{ペン}を放り出した。赤い印氣^{インキ}が血のように半紙の上に滲^{にじ}んだ。彼は帽子^{かぶ}を被つて寒い往来へ飛び出した。

九十七

人通りの少ない町を歩いている間、彼は自分の事ばかり考えた。

「御前は必竟^{ひつきよう}何をしに世の中に生れて来たのだ」

彼の頭のどこかでこういう質問を彼に掛けるものがあつた。彼はそ

れに答えたくなかった。なるべく返事を避けようとした。するとその声がなお彼を追窮し始めた。何遍でも同じ事を繰り返してやめなかった。彼は最後に叫んだ。

「分らない」

その声は忽ち^{たちま}せせら笑った。

「分らないのじゃあるまい。分っていても、其所^{そこ}へ行けないのだらう。途中で引懸っているのだらう」

「己^{おれ}のせいじゃない。己のせいじゃない」

健三は逃げるようにずんずん歩いた。

賑^{にぎ}やかな通りへ来た時、迎年の支度に忙しい外界は驚異に近い新らしさを以て急に彼の眼を刺^{しげ}撃した。彼の気分は漸^{ようや}く変った。

彼は客の注意を惹くために、あらゆる手段を尽して飾り立てられた店頭を、それからそれと覗き込んで歩いた。或時は自分と全く交渉のない、珊瑚樹の根懸だの、蒔絵の櫛笄だのを、硝子越に何の意味もなく長い間眺めていた。

「暮になると世の中の人はずっと何か買うものかしら」

少なくとも彼自身は何にも買わなかった。細君も殆んど何にも買わないといってよかった。彼の兄、彼の姉、細君の父、どれを見ても、買えるような余裕のあるものは一人もなかった。みんな年を越すのに苦しんでいる連中ばかりであった。中にも細君の父は一番非道そうに思われた。

「貴族院議員になってさえいれば、どこでも待ってくれるんだそうで

すけれども」

借金取に責められている父の事情を夫に打ち明けたついでに、細君はかつてこんな事をいった。

それは内閣の瓦解がかいした当時であつた。細君の父を閑職から引っぱり出して、彼の辞職を余儀なくさせた人は、自分たちの退しりぞく間際に、彼を貴族院議員に推挙して、幾分か彼に対する義理を立てようとした。しかし多数の候補者の中うちから、限られた人員を選ばなければならなかつた総理大臣は、細君の父の名前の上に遠慮なく棒を引いてしまった。彼はついに選に洩もれた。何かの意味で保険の付いていない人にもみ酷薄であつた債権者は直ちに彼の門に逼せまつた。官邸を引き払つた時に召仕めしつかいの数を減らした彼は、少時しばらくして自用俵じようぐるまを廃した。しまい

にわが住宅を挙げて人手に渡した頃は、もうどうする事も出来なかった。日を重ね月を追って益悲境に沈ますますんで行つた。

「相場に手を出したのが悪いんですよ」

細君はこんな事もいった。

「御役人をしている間は相場師の方で儲もうけさせてくれるんですつて。だから好いいけれども、一旦役を退ひくと、もう相場師が構かまつてくれないから、みんな駄目になるんだそうです」

「何の事だか要領を得ないね。だいち意味さえ解らない」

「貴方あなたに解らなくつたつて、そうなら仕方がないじゃありませんか」

「何をいつてるんだ。それじゃ相場師は決して損をしつこないものに極きまつちまうじゃないか。馬鹿な女だな」

健三はその時細君と取り換わせた談話まで憶い出した。

彼はふと気が付いた。彼と擦れ違^すう人はみんな急ぎ足に行き過ぎた。みんな忙がしそうであつた。みんな一定の目的を有^もっているらしかった。それを一刻も早く片付けるために、せつせと活動すると思われなかつた。

或者はまるで彼の存在を認めなかつた。或者は通り過ぎる時、ちよつと一瞥^{いちべつ}を与えた。

「御前は馬鹿だよ」

稀^{まれ}にはこんな顔付をするものさえあつた。

彼はまた宅^{うち}へ歸つて赤い印氣^{インキ}を汚^{きた}ない半紙へなすくり始めた。

九十八

二、三日すると島田に頼まれた男がまた刺^しを通じて面会を求めに来た。行掛り上断る訳に行かなかった健三は、座敷へ出て差配じみたその人の前に、再び坐^{すわ}るべく余儀なくされた。

「どうも御忙がしいところを度々^{たびたび}出まして」

彼は世事慣れた男であつた。口で気の毒そうな事をいう割に、それほど殊勝な様子を彼の態度のどこにも現わさなかつた。

「実はこの間の事を島田によく話しましたところ、そういう訳なら致し方がないから、金額はそれで宜^{よろ}しい、その代りどうか年内に頂戴^{ちやうだい}致したい、とこういうんですがね」

健三にはそんな見込がなかった。

「年内たつてもう僅^{わず}かの日数しかないじゃありませんか」

「だから向うでも急ぐような訳でしてね」

「あれば今すぐ上げても好^いいんです。しかしないんだから仕方がないじゃありませんか」

「そうですか」

二人は少時^{しばらく}無言のままでした。

「どうでしょう、其所^{そこ}のところで一つ御奮発は願われますまいか。私^{わたくし}も折角こうして忙がしい中を、島田さんのために、わざわざ遣^やつて来たもんですから」

それは彼の勝手であつた。健三の心を動かすに足るほどの手数^{てかず}でも

面倒でもなかった。

「御気の毒ですが出来ませんね」

二人はまた沈黙を間に置いて相対した。

「じゃ何時頃頂けるんでしよう」

健三には何時という目的もなかった。

「いずれ来年にでもなったらどうかしましう」

「私もこうして頼まれて上った以上、何とか向へ返事をしなくっちゃ

なりませんから、せめて日限でも一つ御取極を願いたいと思います

が」

「御尤もです。じゃ正月一杯とでもして置きましょう」

健三はそれより外にいいようがなかった。相手は仕方なしに帰って

行つた。

その晩寒さと倦怠けんたいを凌しのぐために蕎麦湯そばゆを拵こしらへてもらつた健三は、どろどろした鼠色のものを啜すすりながら、盆ひざを膝の上に置いて傍そばに坐つてゐる細君と話し合つた。

「また百円どうかしなくっちゃならない」

「貴夫あなたが遣やらないでも好いものを遣るつて約束なんぞなさるから後で困るんですよ」

「遣らないでもいいのだけれども、己おれは遣るんだ」

言葉の矛盾がすぐ細君を不快にした。

「そう依故地えこじを仰おつしゃればそれまでです」

「御前は人を理窟りくつばいとか何とかいつて攻撃するくせに、自分にや大

変形式ばった所のある女だね」

「貴夫こそ形式が御好きなんです。何事にも理窟が先に立つんだから」

「理窟と形式とは違うさ」

「貴夫のは同なじですよ」

「じゃいつて聞かせるがね、己は口^{ロジツク}にだけ論理^もを有っている男じゃない。口にある論理は己の手にも足にも、身体^{からだ}全体にもあるんだ」

「そんなら貴夫の理窟がそう空っぽうに見えるはずがないじゃありませんか」

「空っぽうじゃないんだもの。丁度ころ柿^この粉^このようなもので、理窟^{ロジツク}が中^{うち}から白く吹き出すだけなんだ。外部^{そと}から喰^く付^つけた砂糖とは違う

さ」

こんな説明が既に細君には空っぽうな理窟であつた。何でも眼に見えるものを、しっかりと手に掴まなくつては承知出来ない彼女は、この上夫と議論する事を好まなかつた。またしようと思つても出来なかつた。

「御前が形式張るというのはね。人間の内側はどうでも、外部へ出た所だけを捉まえさえすれば、それでその人間が、すぐ片付けられるものと思つているからさ。丁度御前の御父さんが法律家だもんだから、証拠さえなければ文句を付けられる因縁がないと考へているようなもので……」

「父はそんな事をいつた事なんぞありやしません。私だつてそう外部

ばかり飾って生きてる人間じゃありません。貴夫が不断からそんな僻ひがんだ眼で他ひとを見ていらっしやるから……」

細君の瞼まぶたから涙がぽたぽた落ちた。いう事がその間に断絶した。島田に遣る百円の話しが、飛んだ方角へ外それた。そうして段々こんがららかって来た。

九十九

また二、三日して細君は久しぶりに外出した。

「無沙汰見舞ぶさたみまいかたがた少し歳暮に廻って来ました」

乳呑児ちのみごを抱いたまま健三の前へ出た彼女は、寒い頬ほおを赤くして、暖

かい空気の裡なかに尻しりを落付おちつけた。

「御前うちの宅はどうだい」

「別に変った事ありません。ああなると心配を通り越して、かえって平気になるのかも知れませんか」

健三は挨拶あいさつの仕様もなかった。

「あの紫檀したんの机を買わないかっていうんですけれども、縁起が悪いから止よしました」

舞葡萄まいぶどうとかいう木の一枚板で中を張り詰めたその大きな唐机とうきうきえは、百円以上もする見事なものであった。かつて親類の破産者からそれを借金かたの抵当かたに取った細君の父は、同じ運命もとの下に、早晚それをまた誰かに持って行かなくてはならなかったのである。

「縁起はどうでも好いが、そんな高価いものを買う勇氣は当分こつちにもなさそうだ」

健三は苦笑しながら烟草タバコを吹かした。

「そういえば貴夫あなた、あの人に遣る御金を比田ひださんから借りなくって」
細君は藪やぶから棒にこんな事をいった。

「比田にそれだけの余裕があるのかい」

「あるのよ。比田さんは今年限り株式の方をやめられたんですって」
健三はこの新らしい報知を当然とも思つた。また異様にも感じた。

「もう老朽だろうからね。しかしやめられれば、なお困るだろうじゃないか」

「追つてはどうなるか知れないでしょうけれども、差当りさしあた困るような

事はないんですって」

彼の辞職は自分を引き立ててくれた重役の一人が、社と関係を絶つた事に起因しているらしかった。けれども永年勤続して来た結果、権利として彼の手に入るべき金は、一時彼の経済状態を潤おすには充分であつた。

「居食いぐいをしていても詰らないから、確かな人があつたら貸したいからどうか世話をしてくれって、今日頼まれて来たんです」

「へえ、とうとう金貸を遣るようになったのかい」

健三は平生へいぜいから島田の因業わらを嗤わらっていた比田だの姉だのを憶おもい浮べた。自分たちの境遇が変わると、昨日きのうまで軽蔑けいべつしていた人の真似まねをして恬てんとして気の付かない姉夫婦は、反省の足りない点においてむしろ子

供染^じみていた。

「どうせ高利なんだろう」

細君は高利だか低利だかまるで知らなかった。

「何でも旨^{うま}く運転すると月に三、四十円の利子になるから、それを二人の小遣^{おづし}にして、これから先細く長く遣^{おづし}って行くつもりだって、御姉^{おあね}えさんがそう仰^{おつし}やいましたよ」

健三は姉のいう利子の高から胸算用^{むなざんよう}で元金^{もとぎん}を勘定して見た。

「悪くすると、またみんな損^すつちまうだけだ。それよりそう慾張^{よくばら}ないで、銀行へでも預けて置いて相当の利子を取る方が安全だがな」

「だから確^{たしか}な人に貸^{たしか}したいっていうんでしょ」

「確^{たしか}な人はそんな金は借りないさ。怖いからね」

「だけど普通の利子じゃ遣って行けないんでしよう」

「それじゃ己おれだって借りるのは厭いやださ」

「御兄おあにいさんも困っていらしつてよ」

比田は今後の方針を兄に打ち明けると同時に、先ずその手始として、兄に金を借りてくれと頼んだのだそうである。

「馬鹿だな。金を借りてくれ、借りてくれって、こっちから頼む奴もないじゃないか。兄貴だって金は欲しいだろうが、そんな剣呑けんのんな思いまでして借りる必要もあるまいからね」

健三は苦々しいうちにも滑稽こっけいを感じた。比田の手前勝手な気性がこの一事でも能く窺うかがわれた。それを傍はたで見えて澄ましている姉の料簡りようけんも彼には不可思議であつた。血が続いていても姉弟きょうだいという心持は全くしな

かった。

「御前己が借りるとでもいったのかい」

「そんな余計な事いやしません」

百

利子の安い高いは別問題として、比田から融通してもらおうという事が、健三にはとても真面目まじめに考えられなかった。彼は毎月まいげついくらかつづの小遣を姉に送る身分であつた。その姉の亭主から今度はこつちで金を借りるとなると、矛盾は誰の眼にも映る位明白であつた。

「辻褄つじつまの合わない事は世の中にいくらでもあるにはあるが」

こういう掛けた彼は突然笑いたくなくなった。

「何だか変だな。考えると可笑おかしくなるだけだ。まあ好いいや己おれが借りて遣やらなくつてもどうにかなるんだろうから」

「ええ、そりゃ借手はいくらでもあるんでしょう。現にもう一口ばかり貸したんですって。彼所あそこいらの待合まちあいか何かへ」

待合という言葉が健三の耳になおさら滑稽こっけいに響いた。彼は我を忘れたように笑った。細君にも夫の姉の亭主が待合へ小金を貸したという事実が不調和に見えた。けれども彼女はそれを夫の名前に関わると思うような性質たちではなかった。ただ夫と一所になって面白そうに笑っていた。

滑稽の感じが去った後で反動が来た。健三は比田について不愉快な

昔まで思い出させられた。

それは彼の二番目の兄が病死する前後の事であつた。病人は平生か
ら自分の持っている両蓋の銀側時計を弟の健三に見せて、「これを今
に御前に遣ろう」と殆んど口癖くちくせのようにいつていた。時計を所有した
経験のない若い健三は、欲しくて堪らないその装飾品が、何時になつ
たら自分の帯に巻き付けられるのだろうかと思像して、暗あんに未来の得
意を予算に組み込みながら、一、二カ月を暮した。

病人が死んだ時、彼の細君は夫の言葉を尊重して、その時計を健三
に遣るとみんなの前で明言した。一つは亡くなった人の記念かたみとも見る
べきこの品物は、不幸にして質に入れてあつた。無論健三にはそれを
受出す力がなかつた。彼は義姉あねから所有権だけを譲り渡されたと同様

で、肝心の時計には手も触れる事が出来ずに幾日かを過ごした。

或日皆なが一つ所に落合った。するとその席上で比田が問題の時計を懐中から出した。時計は見違えるように磨かれて光っていた。新しい紐に珊瑚樹の珠が装飾として付け加えられた。彼はそれを勿体らしく兄の前に置いた。

「それではこれは貴方に上げる事にしますから」

傍にいた姉も殆んど比田と同じような口上を述べた。

「どうも色々御手数をお掛けまして、有難う。じゃ頂戴します」

兄は礼をいってそれを受取った。

健三は黙って三人の様子を見ていた。三人は殆んど彼の其所にいる事さえ眼中に置いていなかった。しまいまで一言も発しなかった彼

は、腹の中で甚しい侮辱を受けたような心持がした。しかし彼らは平気であつた。彼らの仕打を仇敵きゆうてきの如く憎んだ健三も、何故なぜ彼らがそんな面中つらあてがましい事をしたのか、どうしても考え出せなかつた。

彼は自分の権利も主張しなかつた。また説明も求めなかつた。ただ無言のうちに愛想あいそうを尽かした。そうして親身の兄や姉に対して愛想を尽かす事が、彼らに取って一番非道ひどい刑罰に違なからうと判断した。「そんな事をまだ覚えていらつしやるんですか。貴夫あなたも随分執念深いわね。御兄おあにいさんが御聴きになつたらさぞ御驚ろきなさるでしょう」細君は健三の顔を見て暗にその気色けしきを伺つた。健三はちつとも動かなかつた。

「執念深からうが、男らしくなからうが、事實は事實だよ。よし事實

に棒を引いたって、感情を打ち殺す訳には行かないからね。その時の感情はまだ生きているんだ。生きて今でもどこかで働いているんだ。己が殺しても天が復活させるから何にもならない」

「御金なんか借りさえしなきゃあ、それでいいじゃありませんか」

こういった細君の胸には、比田たちばかりでなく、自分の事も、自分の生家さとの事も勘定に入れてあつた。

百一

歳としが改たまつた時、健三は一夜いちやのうちに変わった世間の外観を、気のなさそうな顔をして眺めた。

「すべて余計な事だ。人間の小刀細工だ。」

実際彼の周囲には大晦日おみそかも元日もなかった。悉く前ことごとの年の引続きばかりであった。彼は人の顔を見て御目出とうというのさえ厭いやになった。そんな殊更な言葉を口にするよりも誰にも会わずに黙っている方がまだ心持が好かった。

彼は普通の服装なりをしてぶらりと表へ出た。なるべく新年の空気の通わない方へ足を向けた。冬木立ふゆこたちと荒た畠はたけ、藁葺屋根わらぶきと細い流ながれ、そんなものが盆槍ぼんやりした彼の眼に入いった。しかし彼はこの可憐かれんな自然に対してももう感興を失っていた。

幸い天気は穏かであった。空風からかぜの吹き捲まくらない野面のづらには春に似た靄もやが遠く懸からだっていた。その間から落ちる薄い日影もおつとりと彼の身体

を包んだ。彼は人もなく路みちもない所へわざわざ迷い込んだ。そうして融とけかかった霜で泥だらけになった靴の重いのに気が付いて、しばらく足を動かさずにいた。彼は一つ所に佇たたず立たんでいる間に、気分を紛まらそうとして絵を描かいた。しかしその絵があまり不味まずいので、写生はかえって彼を自暴やけにするだけであつた。彼は重たい足を引き摺ずつてまた宅うちへ歸かへつて來た。途中で島田に遣やるべき金の事を考えて、ふと何か書いて見ようという氣を起した。

赤い印氣インキで汚こない半紙をなすくる業わざは漸ようく済やんだ。新らしい仕事の始まるまでにはまだ十日の間があつた。彼はその十日を利用しようとした。彼はまた洋筆ペンを執とつて原稿紙に向つた。

健康の次第に衰えつつある不快な事實を認めながら、それに注意を

払わなかった彼は、猛烈に働らいた。あたかも自分で自分の身体に反抗でもするように、あたかもわが衛生を虐待するように、また己れの病気に敵討かたきうちでもしたいように。彼は血に餓うえた。しかも他ひとを屠ほふる事が出来ないのでやむをえず自分の血を啜すすって満足した。

予定の枚数を書きおえた時、彼は筆を投げて畳の上に倒れた。

「ああ、ああ」

彼は獣けだものと同じような声を揚げた。

書いたものを金に換える段になって、彼は大した困難にも遭遇せず
に済んだ。ただどんな手続きでそれを島田に渡して好いいかちよつと
迷った。直接の会見は彼も好まなかった。向うももう参上あがりませんと
いい放った最後の言葉に対して、彼の前へ出て来る気のない事は知れ

ていた。どうしても中へ入って取り次ぐ人の必要があつた。

「やっぱり御兄さんおあにいか比田さんに御頼みなさるより外に仕方がないでしょう。今までの行掛りもあるんだから」

「まあそうでもするのが、一番適當なところだろう。あんまり有難くはないが。公けな他人を頼むほどの事でもないから」

健三は津守坂つのかみざかへ出掛けて行つた。

「百円遣るの」

驚ろいた姉は勿体もったいなさそうな眼を丸くして健三を見た。

「でも健ちゃんなんぞは顔が顔だからね。そうし・み・つ・た・れた・真似まねも出来まいし、それにあの島田じいって爺さんが、ただの爺さんと違つて、あの通りの悪党わるだから、百円位仕方がないだろうよ」

姉は健三の腹にない事まで一人合点でべらべら喋舌しゃべった。

「だけど御正月早々御前さんも随分好い面の皮さねつら」

「好い面の皮鯉こいの滝登りか」

先刻さつきから傍そばに胡坐あぐらをかいて新聞を見ていた比田は、この時始めて口

を利いた。しかしその言葉は姉に通じなかった。健三にも解らなかつた。それをさも心得顔にあははと笑う姉の方が、健三にはかえって可笑おかしかった。

「でも健ちゃんは好いね。御金を取ろうとすればいくらでも取れるんだから」

「こちとらとは少し頭の寸法が違うんだ。右大将頼朝公の髑髏うだいしよよりともこうしやりこうべと来ているんだから」

比田は変^{へん}挺^{てい}な事ばかりいった。しかし頼んだ事は一も二もなく引き受けてくれた。

百二

比田と兄が揃^{そろ}って健三の宅^{うち}を訪問^{おとず}したのは月の半ば頃であつた。松飾の取り払われた往来にはまだどことなく新年の香^{におい}がした。暮も春もない健三の座敷の中に坐^{すわ}った二人は、落^{おち}付^つかないように其所^{そこ}いらを見廻した。

比田は懷から書付を二枚出して健三の前に置いた。

「まあこれで漸^{ようや}く片が付きました」

その一枚には百円受取った事と、向後一切の関係を断つという事が古風な文句で書いてあった。手蹟は誰のとも判断が付かなかつたが、島田の印は確かに捺してあった。

健三は「しかる上は後日に至り」とか、「后日のため誓約件の如し」とかいう言葉を馬鹿にしながら黙読した。

「どうも御手数でした、ありがとう」

「こういう証文さえ入れさせて置けばもう大丈夫だからね。それでないと何時まで蒼蠅く付け纏わられるか分つたもんじゃないよ。ねえ長さん」

「そうさ。これで漸く一安心出来たようなものだ」

比田と兄の会話は少しの感銘も健三に与えなかつた。彼には遣らな

いでもいい百円を好意的に遣ったのだという気ばかり強く起った。面倒を避けるために金の力を藉^かりたとはどうしても思えなかった。

彼は無言のままもう一枚の書付を開いて、其所に自分が復籍する時

島田に送った文言^{もんごん}を見出した。

「私儀^{わたくしぎ}今般貴家御離縁に相成^{あいなり}、実父より養育料差出候^{そうろう}については、今

後とも互に不実不人情に相成ざるよう心掛^{ぞんじ}たくと存候」

健三には意味も論理^{ロジック}も能く解らなかった。

「それを売り付けようというのが向うの腹さね」

「つまり百円で買って遣ったようなものだね」

比田と兄はまた話し合った。健三はその間に言葉を挟^{さしはさ}むのさえ厭^{いや}だった。

二人が帰ったあとで、細君は夫の前に置いてある二通の書付を開いて見た。

「こつちの方は虫が食ってますね」

「反故ほごだよ。何にもならないもんだ。破いて紙屑籠かみくずかごへ入れてしまえ」

「わざわざ破かなくっても好いいでしょう」

健三はそのまま席を立った。再び顔を合わせた時、彼は細君に向つ

て訊きいた。――

「先刻さっきの書付はどうしたい」

「筆笥たんすの抽斗ひきだしにしまつて置きました。」

彼女は大事なものでも保存するような口振くちぶりでこう答えた。健三は彼女の所置を咎とがめもしない代りに、賞ほめる気にもならなかった。

「まあ好^よかった。あの人だけはこれで片が付いて」

細君は安心したといわぬばかりの表情を見せた。

「何が片付いたって」

「でも、ああして証文を取って置けば、それで大丈夫でしょう。もう来る事も出来ないし、来たって構い付けなければそれまでじゃありませんか」

「そりゃ今までだって同じ事だよ。そうしようと思えば何時でも出来たんだから」

「だけど、ああして書いたものをこっちの手に入れて置くと大変違いますわ」

「安心するかね」

「ええ安心よ。すっかり片付いちゃったんですもの」

「まだなかなか片付きやしないよ」

「どうして」

「片付いたのは上部^{うわべ}だけじゃないか。だから御前は形式張った女だというんだ」

細君の顔には不審と反抗の色が見えた。

「じゃどうすれば本当に片付くんです」

「世の中に片付くなんてものは殆^{ほと}んどありやしない。一遍起^{ひと}った事は何時までも続くのさ。ただ色々な形に変わるから他^{ひと}にも自分にも解^とらなくなるだけの事さ」

健三の口調は吐き出すように苦々しかった。細君は黙って赤ん坊を

抱き上げた。

「おお^い好い子だ好い子だ。御父さまの仰^{おつし}やる事は何だかちつとも分りやしないわね」

細君はこういいいい、幾^{いくたび}度か赤い頬^{ほお}に接吻^{せつぶん}した。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML (一部は HTML) 形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
